

保津川下り

みると言つて好かつた。

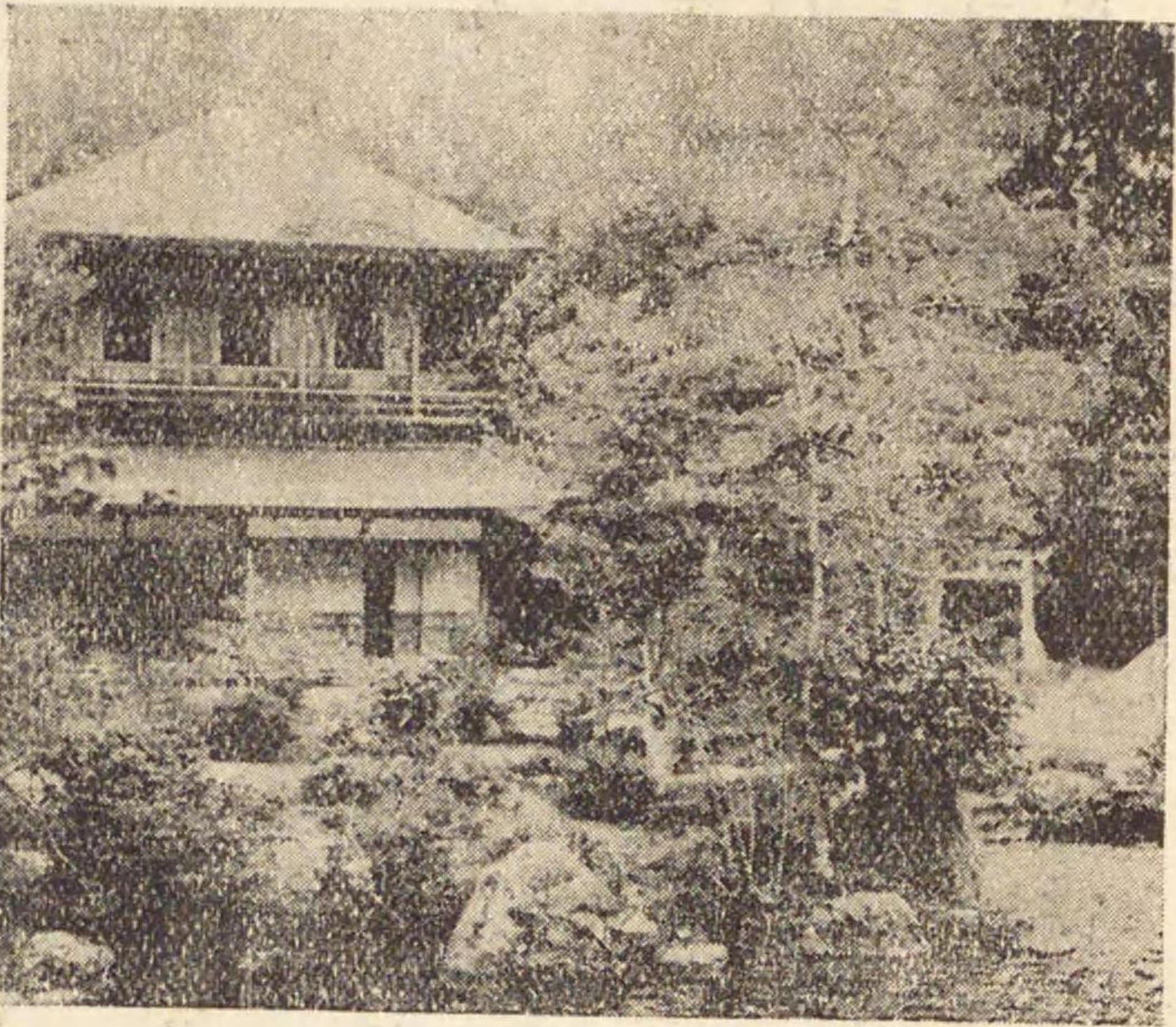
ことに、この溪に忘れることの出来ないのは、五六月の新緑時分に此處を下ると、青い色彩の中に山躑躅が雜つてチラチラ咲いてゐるのが、何とも言はれない藝術的の感じを誘ふことであつた。『好いね、何とも言はれんぢやないか……。こんなに好いとは思ひもかけなかつた』こんなことを絶えず私達は口にした。

屏風岩、壁岩を通つて二十町ほど下ると、清瀧川は北から来てそこに落ちてゐる。つまり汽車のトンネルのすぐ下のところになつてゐるのである。少し来ると釣橋がかゝつてゐる。それから汽車の線路は左岸になるのである。嵐山の奥の温泉のところまではそこから最早いくらもなかつた。

## 銀閣寺

蹴上から黒谷の眞如堂を見、それから吉田の神樂ヶ岡の東の裾を通つて浄土寺町に入る。その突當つたところに銀閣寺がある。

それは恰度大の字で名高い如意嶽の北月待山の麓に當つてゐる。寺の本當の名は慈照寺と言ふのである。こゝにある銀閣は初から寺として建てられたものではなく、義政の別墅であつたのを、その死後に遺命に依つて一つの寺としたのである。起工は文明十四年二月である。所謂銀閣は東山藝術を研究するもの、是非見なければならぬところのもので、そのさびに於て、その構造に於て、またはその精神に於て、金閣とは比べものにならないほどの意義を有してゐると言はれてゐる。いかにも閑寂を旨としてゐる。世を離れてゐる。そこに行くのと止むを得ず政治の煩雜から離れた義政の心持がはつきりとわかるやうな氣がする。屋根は寶形柿葺で、桁行四間梁間三間にしか過ぎない小さな建物である。棟の上に紫銅の鳳凰の置かれてゐるのは金閣と同じである。下層を潮音閣といひ、上層を心空殿と言つてゐる。銀閣とは言ふけれども、計



銀閣寺

畫だけで、その貼附は實行されなかつたらしいといふことである。金閣に比していかにも靜かである。義政と義満との差がこゝにはつきりとあらはれてゐるやうな氣がする。東求堂は義政の持佛堂で、その額が義政の筆であるのはなつかしい。義政法體の木像も好い感じがした。

東北の隅に四疊半の小さな茶室があるが、一に相阿彌の茶室と言はれてゐる。義政が最も好きであつた茶室で、かれは此處で茶を點して、伺候した諸臣に賜つたといふことである。つまり後世に於ける茶室四疊半の濫觴をなしてゐるものであるといふことである。今ではそこで茶を點じて遊覽者に供した。

## 詩仙堂

淨土寺町を白川村へと北する。比叡にのほる白川越はこれから右に折れて行つてゐる。それを傍に見て眞直に北して田圃の中に出る。小學校などがある。少し行くと、山の裾が下まで靡き下つてゐるやうな地形をなしたところへとかゝつて行く。かれこれ二十町も行つたと思ふ頃、前に村落のゴタゴタと簇つてゐるのを目にする。それが一乗寺村である。そしてそれを眞直に行つて、村の中央あたりから右に折れて突當つたところに石川丈山の詩仙堂がある。

一生鴨川をわたらなかつたといふ丈山の氣概は、それほど豪いか何うかそれはわからなかつたけれども、兎に角その時代の大儒であつたことは、疑ふことは出来なかつた。ことに、その詩はその時代に群を抜いてゐるに相違ないのであつた。そこは丈山のもともたところ、後に尼寺になつたが、その堂の中に掲げてある漢魏唐宋三十六人の詩仙の像に一々丈山が題詩をつけた懸軸は、頗る珍とすべきものであらねばならなかつた。繪はすべて狩野尙信の筆に成つた。享保年間には靈元上皇が御幸あらせられたことがあるといふ。

こゝを出て一乗寺村を北に抜けると、一田圃隔て、向うに修雲院村がある。曼珠院、修學院離宮などがそこにある。比叡にのほるには、此處から入るのが一番近い。

これから左に五六町行くと、北國街道の最初の驛とも言ふべき山端やまはたの驛があらはれた。それはもはや昔のおもかけは半分以上なくなつて了つたけれども、それでも西に高野川の水が流れてるたりして、何となしに、名所圖會の挿畫などの思ひ出されて来るやうな處だ。山端の平八茶屋の昔なども思ひやられた。

## 大原へ

めせやめせ

夕けの妻木

早くめせ

かへるさ遠し

大原の里

これは香川景樹の歌であるが、これを吟すると、あの頭の上に物を載せて京都の町を歩いてゐる大原女のさまがはつきりと思ひ出された。歌としてもすぐれた歌だと私は思つた。

そればかりではなかつた。そこにはいろいろな歴史上のあとがあつた。大原女、八瀬童子、寂光院、三千院、すべて私に深い憧憬の念を起させにすには置かなかつた。

今は自動車でも何でも行けた。三時間あれば、樂に行つて來ることが出來た。しかし靜かにあたりのさまに浸らうとするには、何うしても徒歩で出かけて行くのに越したことはなかつた。

山端から二十二三町で高野、その前に高野川の橋を渡る。次第に翠微が近く嵐氣があたりに揺曳するのを覺える。やがて十五町で、近藤といふ村に着く。

こゝから比叡に上る路が右にわかれて行つてゐる。この路は白川越に比べて半分ぐらゐしかないけれど——非常に近いけれども、のほりがかなり急にである。雲母越きら、こえと並行してゐるのである。私の師匠の歌に、

大比叡の

雲母の阪は

さくら花

ちりかふ時の

名にこそありけれ

といふ歌があるが、つまりその山路を言ふのである。近藤の村からすぐ急なのほりになつて、二百米、四百米、五百四十米、六百三十二米といふ風で、釋迦堂のところへとのほつて行つてゐる。

しかしこれはあとにして、比叡のところに書くことにして、眞直に山合の中の路を北へ北へ

と進んで行く。和所、神子淵を経て八瀬に入る。蕭然とした山村である。

こゝは一に矢脊に作る。この地名の初めて歴史にあらはれたのは、天武天皇が大伴皇子との戦に敗れて、此地に走る途中、流矢に當つたのを、此處にかくれて療養したよりその名は起つたと言はれてゐる。今でもその天皇の入浴したといふ蒸風呂を存してゐる。

ひまがあつたら、鬼の會て住んでゐたといふ、または叡山の惡稚兒鬼門丸のかくれて住んでゐたといふ鬼の洞でも見て、そして眞直に北に向つて行く。一里ほどで、花尻といふところに見達する。そこあたりに來ると、追つた兩方の山がいくらかひらけて、やがて前に水田などを見るやうになつて行つた。左に行くと、井出で、江文峠の方へと路はつゞいて行つてゐる。それをそつちには行かずに、眞直に北に指す。二十町ほどで大長瀬といふところに着く。こゝはもう大原村であつた。

此處に、平家物語を引いて來るのも滿更無意味ではないであらうと思ふ。

『小原御幸』

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御住居、御覽せまほしく思し召されけれども、二月三月の程は、嵐烈しく餘寒も未盡きず、峯の白雪絶えやらで、谷のつらゝも打ち解けず、かくて春過ぎ、夏立ちて、きた祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、小原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺、花山の院、土御門、以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、彼清原の深養父が、補陀寺、小野の皇太皇后の舊跡叡覽ありて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかかる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜まる。卯月二十日餘の事なれば、夏草のしけみが末を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀れなり。西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院是なり。古く造りなせる泉水木立、よしある様の所なり。いらか破れては霧不斷の香を焼き、とほそ落ちては月常住の燈をかゝぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の

若葉繁りあひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を曝すかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うらむらさきに咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待顔なり。法皇是を叡覽ありて、かくぞあそばされける。

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より、落ち来る水の音さへ、ゆるよしある所なり。緑羅の垣、翠苔の山、繪に書くとも筆も及びがたし。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦薺つたあさかほ這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、瓢箪屢むなし、草顔淵が蒼にしけし、藜藿深くとざせり、雨原憲かとほそを濕すともいひつべし。すぎのふきめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひてたまるべしとも見えざりけり。後は山前は野べ、い笹を笹に風さわぎ、世に絶えぬ身のならひとて、うきふししけき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、僅に言とふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、是等が音づれならでは、まさきのかづら青つゝら、来る人稀なる所なり。法皇、人やあるくとめされたれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ、と仰せけ

れば、此上の山へ花つみに入らせ給ひて候ふと申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、左様の事に仕へ奉る人もなきにや、御いたはしくこそと仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報つきさせ給ふによりて、今かゝる御目を御覽せられ候ふにこそ、捨身の業に、何かは御身を惜ませ給ひ候ふべき。因果經には、よくちくわこるん、けんごけんざいくわ、よくちみらいくわ、けんごけんざいるんと解かれたり。過去未來の因果を兼ねて悟らせ給ひなば、つやく御歎あるべからず。昔悉達太子は、十九にてかや城を出で、壇特山の麓にて木の葉を連ねて肌をかくし、峯に上りて薪を採り、谷に下りて水を掬ひ、離行苦行の功によりてこそ、終にじやうとうしやうがくし給ひき、とぞ申しける。此尼の有様を御覽すれば、身には絹布のわきも見えぬものを、結び集めてぞ着たりける。あの有様にてもかやうの事申す、不思議さよと思し召して、抑汝等は何なる者ぞと仰せければ、此の尼さめくと泣きてしばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへて申すにつけて、憚覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深くこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにもつきても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せんかたなくこそ候へとて、袖を顔に押し當て、忍びあへぬさま、目も當てられず。

法皇、實にも汝は阿波の内侍にてある、ござんなれ、御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、只夢とのみこそ思し召せとて、御涙せきあへ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理にて申しけりとぞ各感じ合はれける。さてかなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、しぎ立つひまも見え分かず。女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の糸をかけられたり。左に普賢の畫像右にぜんたうくわしやう、並に先帝の御繪をかけ、八軸の妙文、九てうの御書も置かれたり。蘭麝の匂に引きかへて、香の烟ぞ立ち上る。かのしやうみやう居士の方丈の室の内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文ども色紙に書きて、所々におされたり。その中の大江の定元法師が、せいりやうせんにして詠じたりけん、せいが遙に聞ゆこうんの上、しやうしゆ來迎すらくじつの前、ともかゝれたり。少し引きのけて、女院の御歌とおほしくて、

思ひきやみ山の奥にすまひして雲井の月をよそに見んとは  
さて傍を叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に麻の御衣、紙のふすまなどかけられた

り。さしも本朝漢土の妙なる類數をつくし、綾羅錦繡の装、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖をぞしほられける。やゝありて、上の山より濃き墨染の衣きたりける尼二人、岩のかけちを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれは如何なる者ぞ、と仰せければ、老尼涙をおさへて、花がたみ臂にかけ、岩つゝじ取り具して、持たせ給ひて候ふは、女院にて渡らせ給ひ候ふ。つま木に薇折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言これぞねが女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の佐の局、と申すもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見え參らせんすらん恥しさよ、消えも失せばやと思し召せども、かひぞなき、よひくごとの関伽の水、むすぶ袂もしほるゝに、曉起の袖の上、山路の露もしけくして、しほりやかねさせ給ひけん、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましくゝたる所に、内侍の尼參りつゝ、花がたみをばたまはりけり。平家物語の中でも名文と言はれただけあつて、これを讀むと、その時のさまが彷彿として眼の前にあらはれて來るやうな心持がした。

この寂光院は大長瀬から北國街道に離れて、五六町ほど山の中に入つた草生の部落の西北の外れになつた。いかにも古びた寺で、數千級の石段をのほつた奥に小さな山門がそれと覗かれた。それを入ると、本堂があつて、その右に書院があつた。大して大きな構ひではなかつた。書院で案内を乞うて、老いた尼が出て來た。何となしに、阿波内侍が偲ばれるやうな心持がした。拜觀を乞うと、その老尼は親切に案内してくれた。外形の貧弱なのに比して、内部はこれほどと思はれるほど美しい昔の色彩に満されてゐた。藤原式の鑄金螺鈿の高欄などもあつた。本尊は丈餘の地藏尊で、その背後に六萬體といふ夥しい小さな地藏尊が安置されてあつた。老尼は靜かな聲で話した。そしてその靜な調子が何とも言はれずあたりの光景に相伴つた。かの女は建禮門院室の址を示した。その寛は門院の使はれた寛と同じであると話した。否そればかりではなかつた。汀の櫻も、枯れたには枯れたけれども、その位置は昔のまゝであると話した。誰も此處に來て、平家物語の大詰のさびしさを思はないものはないに相違なかつた。何でもその尼の話すところに由ると、當時この里に住んでゐたものは十二軒、今はその倍になつたけれども、それでも、他から入つて來たものは一軒も加へてゐないといふことであつた。私は何とも言はれない氣がした。

この寺は眞言宗で、初めは弘法大師の開かれたものであるが、建禮門院の崩御以來尼寺となつて、今に及んだ。門院の陵墓は後方の山の上に残つてゐるといふことであつた。本堂には門院御影の他阿波内侍の像をも安置してある。

これから東二町行つたところに、歌に名高い朧の清水がある。良暹法師寂然法師などのかくられたところであるといふ。

こゝを出て元の北國街道に戻つて、今度は路を右に入る。三千院はそれから少し行つたところにある。それは延暦寺三門跡の一つで、梶井宮とも梨本坊とも呼ばれ、叡山東塔の南谷にあつたのを、應仁の亂後初めて此處に移されたといふことである。大原聲明の本山として、累代皇族を以て相承し、聲明音律を統源してゐるので知られてゐる。承久の役に、三皇兵亂を此寺に避けたことは、東鑑にも出でゐる。玄關、宸殿、庫裡、すべて新しい建築で、その間ごとの襖障子に現代の栖鳳、春琴、香嶠などが筆を揮つてゐるのも他に比して頗る珍とすべきであらう。庭もちよつと見事である。その向うに、杉木立の中に特別保護建造物の往生極樂院がある。花山天皇の御願で、恵心僧都の建てられたものと傳へられてある。竣成は寛和元年といふことである。しかし、外部は度々修補が加つてゐるために——むしろ加はりすぎるほど加つて

ゐるために、餘りに近代の形式になりすぎてゐるが、内部には流石に剝落毀損はあつても、創立當時の欣求淨土の莊嚴を窺ふことが出来るやうな氣がしたのはうれしかつた。本尊の阿彌陀佛にも頗る優秀な藤原藝術を味ふことが出来た。

この北に勝林院、その附近に後鳥羽、順徳兩天皇の山陵がある。共に佐渡、隱岐から此處に納め奉つたものである。

これから北すると一里半ほどで途中越の峠へと達した。



途中越

途中越をすつと眞直に北に向つて行くのも、郊外散策としては面白いものゝ一つであつた。私の知つてゐる京都生れのF君は話した。『まだ、十五六でしたから、子供でしたよ。兎に角、自轉車の流行はじめて、面白かつたもんですから、何處かに行つて見やうと言ふんで、近所の同じ年頃の兒と出かけたんですよ。さうですね、別にこれと言つて變つたこともありませんが、大原から先はいかにも山の中といふ氣がしますね。そこらに何と言つたか忘れましたが兵隊除けの神社があつて、參詣するものがかなりにあつたのを覚えてゐます。途中越の峠のところでは、右にそれより高い山があるので、琵琶湖は見えませんが、それを少し下つて、途中といふ部落の向うに行くと、丘陵を越して遠く湖水が見え出して來ましたよ。ところが、そこから右に湖畔に出れば好かつたのですけども、もう少し先きに行くつもりで、ぐんぐん一本路を眞直に北に向つて行きました。平、阪下などいふところがあります。全く山村です。一度微かに見えた湖水はまたすつかり見えなくなつて了ひ、行つても行つても、山また山です。右の方

に湖水があると思つてゐながら、何うしてもそつちへ出る路がないんです……。それも今考へて見れば無理はありませんよ。何しろ比良の裏を通つてゐるわけなんですから……。何處まで行つても、とても駄目なので、引返して、途中の少し手前から湖水の方に出ました。雄松まで出るのに随分骨が折れましたね……。それでも一日かゝつて、やつと大津から京都の方に歸つて來ましたけれどもね……。さうですね。北小松まで里程にしたら、十二三里もありますかね。一度はあれでも歩いて見るのも好いでせう。自轉車ではちよつと厄介なところですね……。随分ひどい目に逢ひましたからな』

# 比叡山

比叡山は京都に行くもの、是非一度はのほつて見なければならぬところであつた。熊谷直好の歌に、

ふらぬ日も

なほはるさめの

中なれば

雲そおりるる

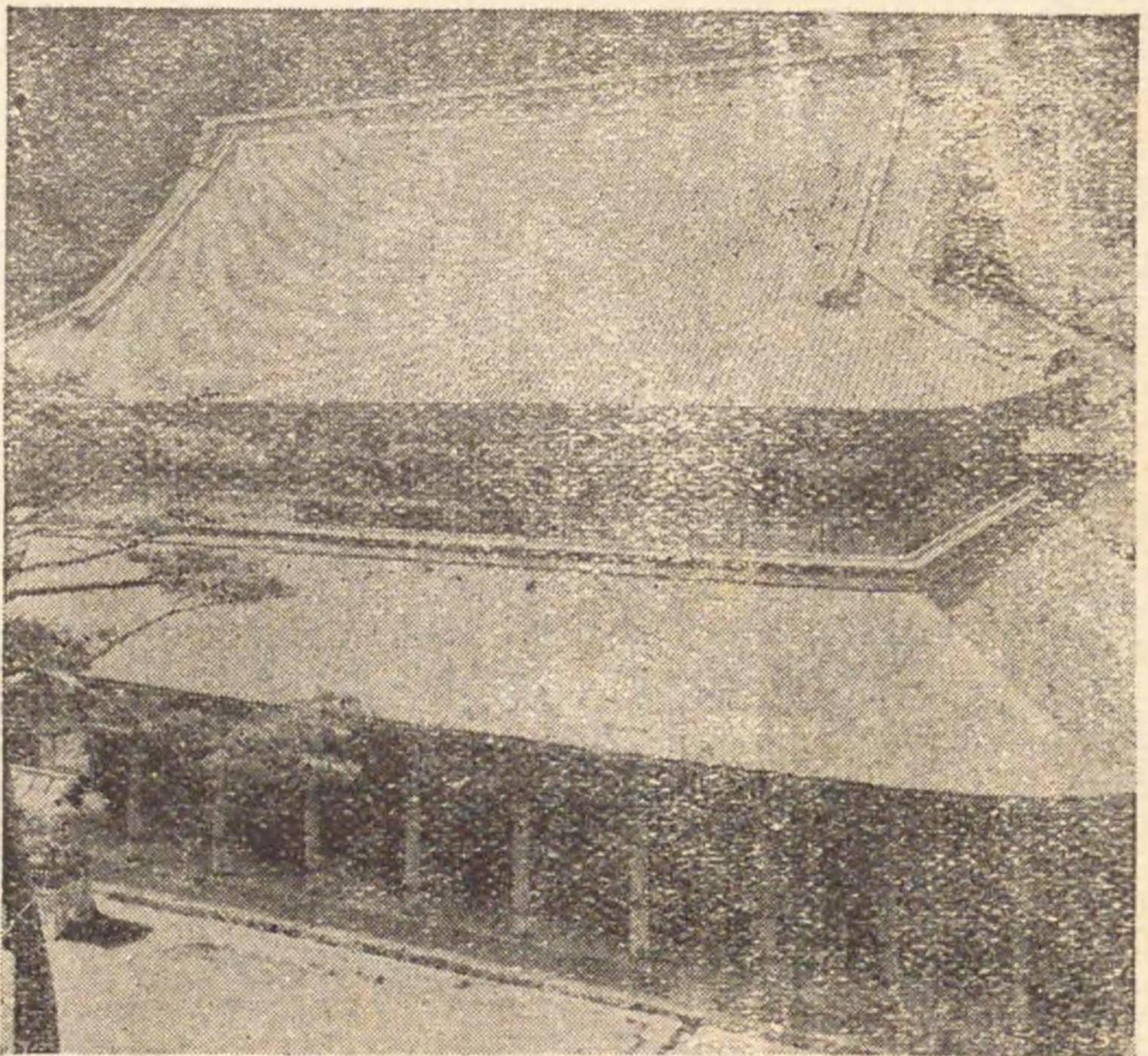
大ひえの山

といふのがあつたが、實際、京都にゐては、比叡は常に絶えざる伴侶といふ氣がせずにはゐられなかつた。その特色ある山の姿は、橋の上から、旅舎の欄干から、寺の御堂から、電車の停留場から、郊外の垣に添つた道から、常にはつきりと打仰がれた。それに、歴史上から言つても、いろいろな關係があつた。例の僧兵の猖獗であつたことも思ひ出さるれば、天皇が危をそ

こに避けられたことなども思ひ出された。それにその昔の延曆寺が、そのまゝそこに残つてゐるといふことが、私達にいろいろなことを思ひ出させずにも置かなかつた。

延曆寺の正面としては、普通近江の琵琶湖畔の阪本村からのほるのが例であるが、登攀するものに取つては、京都から登つて、そして其方に下りる方が順路のやうに思はれてゐた。

京都からの路が三つ。その一つは白川村から、もう一つは修學院村から、もう一つは八瀬からであるが、この三つの中では、八瀬路が一番険しいかはりに一番近く、白川路が一番樂な代りに一番遠いといふことになつてゐる。普通は大抵修學院村からのほつて行くものが多いらしかつた。



比叡山 根本中堂

京都元標から修學院村まで一里二十八町、それから比叡山まで四十町と言はれてゐる。阪本からのほるのを東阪と言つてゐるのに對して、これを西阪と言つてゐる。つまり裏口とも言ふべきものである。

村を離れると、すぐのほりになる。かなりに険しい。四百米乃至四百五十米ぐらゐひたのほりにのほる。それから少し細かになるが、一本杉のところに行くまで絶えずのほりである。四明岳の絶巔がすぐ左に高く聳えてゐる。そしてそこにのほる路が幾本となく左にわかれて行つてゐる。それから山をぐるりと廻るやうにして、大乘院を右に見て、根本中堂のあるところへと達する。四明嶽の頂上が八百四十八米三の標高を示してゐる。

この寺が帝都鎮護のために、桓武帝の時に建てられたのは、今更言はずとものことである。最澄や傳教のことも既に餘り多く世に傳へられてある。大講堂、根本中堂のあるあたり、いかにも壯嚴をきはめてゐる。それに、杉の大いのが非常に多く、ところに由つては、日影の洩れないやうなところすらある。浄土院から本覺院釋迦堂、これから八瀬へ下りて行く路がある。その他、東塔西塔がある。

詳しくこの山を探らうとするには、一日や二日では駄目だ。大宮谷を経て横川の中堂あたり

まで行くには、女子供の足ではちよつとむづかしいくらいである。

香川景樹の歌に、

只たのめ

横川のおくに

咲く花も

ちりてのちこそ

浮ひ出づなれ

といふのががあるが、それなども思ひ出されずにはゐられなかつた。

根本中堂から阪本村まで二十七八町、これはひた下りで、わけなく下りて行くことの出来る路であつた。

## 大津まで

三條橋畔から出る電車に乗ると、四十分ほどで大津の終端驛まで伴れて行つて呉れた。この間は概して昔の街道で、感じが何とも言はれずなつかしい氣がした。毘沙門から追分邊りには、まだ昔の面影が残つてゐるはしないかと思はれた。

山の靡いた形といひ、雲の浮んださまと言ひ、ところどころにさびしい村落の散在してゐる姿といひ、すべて旅客の思を惹かずに置かないものはなかつた。義仲が今井の身の上を察して敗兵と共に此道を落ちて行つたさまなども、それとはつきり想像された。平重衡が奈良法師の手にその運命を托すべく、京へは入らずに追分から日野の方へ出て行つたさまなども想像された。汽車では、ぐるりと大廻りに廻つてゐるので、はつきりその光景を想像することが出来なかつたが、この電車は全く街道に添つてゐるので、昔の人々がいろ／＼な思ひを抱いて此處を出て行つたことなどが盡きずに私の胸に上つた。

竹藪に美しく朝日が當つてゐたり、小さな川に子供が隊をなして小魚をすくつてゐたり、百姓が夫婦で野を耕してゐたりするのが見えたりした。あたりは静かであつた。何事もなかつたやうに見えた。あらゆる悲喜劇もすつかり埋れて了つたやうに見えた。電車はカーブのところに来る度に、凄じい唸りを空に響かせて通つて行つた。

追分から少し此方に來たところで、電車は汽車の線路と交錯して、今度は汽車を左に見るやうになつた。で、逢阪山の狹隘もまた、く間に過ぎて行つた。

大津の町はやがてその前にあらはれ出した。

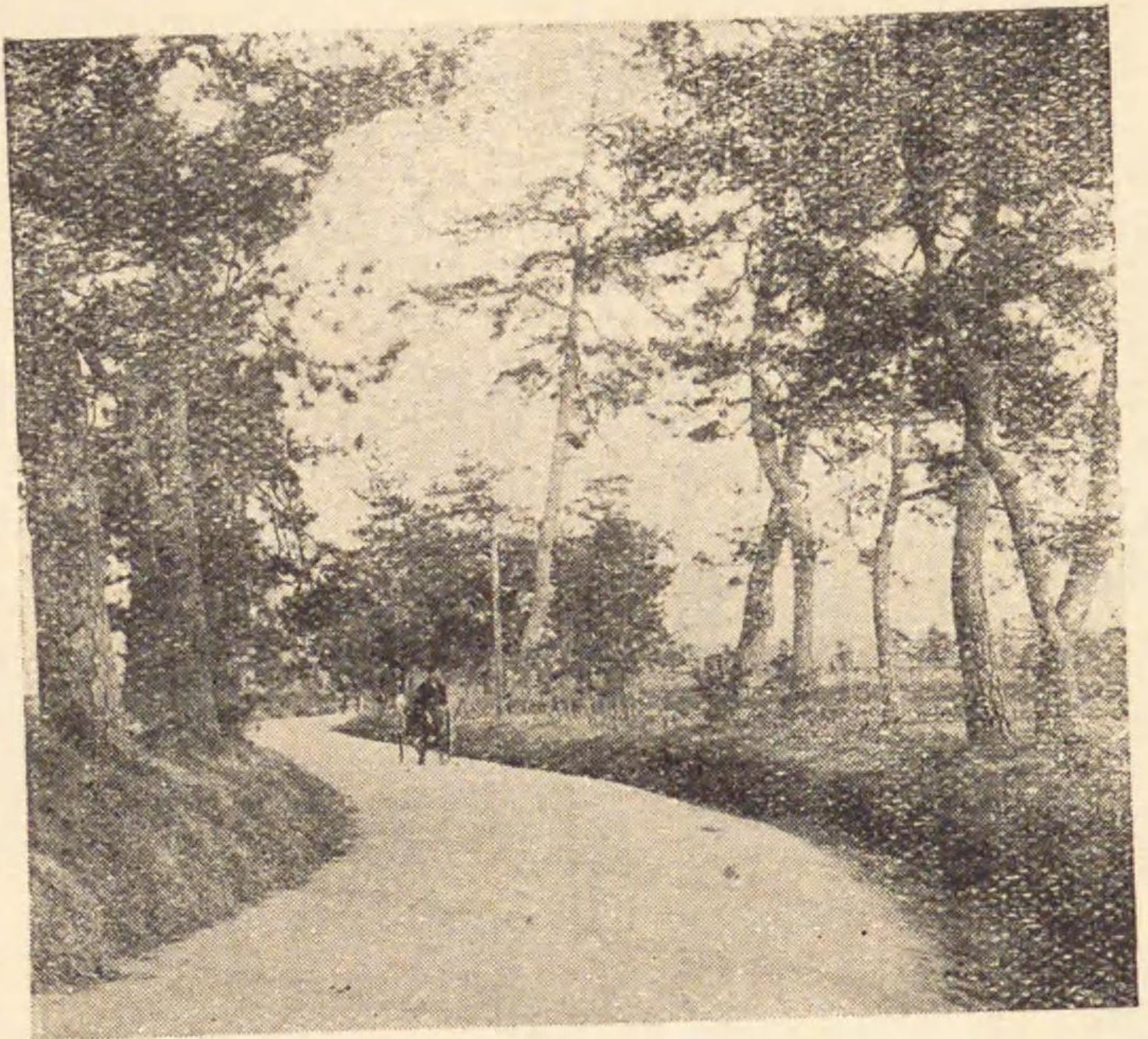
## 石山寺

私達は電車を下りてから、細い賑かな通りを北に向つて歩いた。琵琶湖名産のあめ煮を賣る店が到るところに庇を連ねてゐて、たまには、『あめだき買うていきまえんか』など、聲をかけた。

向うに出ると、琵琶湖がちらりとその水光を髣髴させる。白石丸の出るところもすぐそこである。それを左に見て、石山電車の起端驛へと行く。二三町しかなかつた。

この電車は始め湖水に近く、松本から馬場、膳所を通り越して、粟津から石山寺へと行つた。半は町、半は野の中を走つて行つてゐるやうな電車であつた。いつも石山行の人達で一抔になつてゐた。

石山の終端驛を下りて、それからまだ十一二町歩かなければならなかつた。その點から言ふと、石山に行くには紺屋ヶ關から出る汽船に乗る方が便利であるかも知れなかつた。次第に石山の人家があらはれ出した。旅舎もあれば、料理店もある。土産物を賣つてゐる店もある。前



粟津の原

石山寺

は瀬田川で、水は靜かに淀むやうに流れてゐる。向うには、赤ちやらけた石山が起伏して、それに日がチラ／＼光つてゐる。ペンキ塗の新しいボートや汽船が靜かに川の上を動いて行つた。寺の前が公園になつてゐて、ところ／＼にベンチなどが据ゑてある。山門が立つてゐる。それを入ると、兩側に躑躅と楓とがある。春も秋も見事である。これを少し行くと、奥に本堂がある。これは西國十三番の札所で、天平勝實年間僧良辨の始めて創建したものであるが、後、僧觀賢中興して密教の道場とした。中世には花山天皇の皇子深觀僧都が座主となつて、門跡の稱に呼ばれたが、其後は長くつゞかなかつた。今は京都の嵯峨の仁和寺に屬してゐる。本堂は承暦年間源頼朝の

建立したもので、特別保護建造物となつてゐる。

それに、此處に忘れることの出来ないのは紫式部のことである。式部は此處であの源氏物語の稿を起したといふ。今でもその室がちやんと残つてゐる。源氏の間と言つてゐる。頼めば誰でも見ることが出来る。寶物もかなりにめづらしいものがある。石山縁起の繪卷なども一覽の値がある。

こゝを出て左に行くと、多寶塔がある。特別保護建造物である。その前を通つて、ひろいところに出る。觀月臺がある。そこからは瀬田橋を隔て遙かに湖水のひろくとした眺望を恣にすることが出来た。此處から見た前面の赤ちやけた丘陵の起伏も見事であつた。

再びあとに戻つて、柳屋あたりで晝飯を食ふのも好かつた。ひがいや鮎が旨かつた。

## 南郷の洗堰

石山から南郷の方へ行く小さな汽船があつた。それに乗ると、水郷らしい氣分——蘆荻が岸に生えてゐたり、白楊が並んで繁つてゐたり、さうかと思ふと、水鳥が思ひもかけず蘆荻の中からばたばたと羽音を立つ、飛んで行つたり、いかにも水郷としても恥しくないといふやうな心持があたりには漲つて來たが、しかも、それは長くはつゝかず、ぐるりと一まがり曲つて了ふと、すつかり川らしい感じになつて了つて、あとにあの大きな湖水、美しい湖水を置いて來たとは何うしても思はれないやうな氣がした。

山の靡き合ひ、重なり合つてゐる具合も、いかにも靜かで、且つのんびりとしてゐた。

S君は私の傍に寄つて來た。

『それ、あそこが橋本です。つまりこの少し上流あたりをわたつて、そしてあの向うに見える、それ、あそこに、人家があつて、杜が見えるでせう。あそこに間道があるんです。毘沙門堂まで、そこから一里位のもんでせう。』

『さうですか……ふむ。』

私もじつとあたりに眺め入つた。

南郷近く來ると、あたりのさまが、石山を持つた丘陵よりも、ぐつと開けた丘陵で取巻かれてゐるのを私は発見した。いかにも靜かな、のんきな、落附いた心持を誘はれるやうなところであつた。やがて、その大きな南郷の洗堰——これと淀の洗堰と大阪の閘門とで、この水を調整するやうに出來てゐる大きな洗堰を前にして、私達の乗つて來た汽船は留つた。

私達は岸に上つた。

六月の午前の日影は、かなりに暑くあたりを照した。歓迎のために、休み臺の出してあるところは、それでもいくら疎らな櫻の木の蔭があつたけれども、概してその附近には、涼むに足りるやうな林や杜の影はなかつた。洗堰の上には、新らしい麥稈帽や、ハイカラなネクタイや、合着のスコッチの背廣などが往來した。

洗堰が階段をなして落ちてゐるために、鰻は川から湖水の方へのほつて行くことが出來なかつた。そのため、鰻がのほることの出來るために、ある設備がその堰の三分の二ほどまで行つたあたりに出來てゐた。『さうですか。こゝを鰻が這つてのほつて來るんですか。不思議なもん

ですね』こんなことを言つて、めづらしさうにそれを見入つてゐる人達もあつた。

私は縣廳の役人に訊いた。

『米かし、鹿飛びなど、いふところが、この瀬多川にあるさうですが、それはこゝからまだ餘程下ですか？』

『いゝえ、そんなに遠くはありません。鹿飛の方は、もうすぐそこです。』

『行くのに、かなりに険しいですか？』

『いゝえ、そんなことはありません。立派な路がついてをります。水力電氣の工事で、一時は、歩きにくくなつてゐましたけれども、此頃はもうすつかり元の通りになつたでせう。』

『宇治まで何里ありますか？』

『五里位ありません。しかし、わけはありません。半日位かゝれば、宇治に出て行けます。』

私はそれからいろいろな話をきいた。大石良雄が一時そこに隠匿してゐた跡などもあつた。これから立木觀音までも二十町ぐらゐるしかないといふことであつた。

私達は洗堰の此方のところ、疎らな櫻の木の蔭で、縁臺に腰をかけて、歓迎の茶を飲んだりした。初夏の日影は赤ちやけた丘から丘へと照つて、印象派の畫を私達の前に展げた。『は、

ア、さうですか、あつちがさうなりますか。甲賀郡の方になりますか。『かう言ひながら、私はじつとその起伏した丘陵を眺めた。』



### 瀬多橋

秋の午後四時過ぎであつた。汽車は明るい大きな湖水を前にして、例の義仲の古戦場である粟津の原を次第に石山の停車場へと近寄つて行つた。流石は秋だ。いつ通つても、いやにどんよりと錆びてゐる湖水も、今日は際立つて静かに、碧い空がくつきりと擦すやうにそこに映つてゐるのを私は見た。比叡山の丸い姿もさながらそれと手に取るやうに指さされた。石山の停車場は、ちよつと停つただけで、すぐまた出て行つた。

ふと、私の眼に映つたものがあつた。私ははつ



と思つた。私は汽車の左側に腰をかけてゐた。私は白い壁を見た。一面に岸に竝んでゐる白い壁を見た。そしてそこに美しく——何とも言はれずインプレッシブに、夕日が美しく反映してゐるのを見た。

つゞいて湖から流れ落ちてゐる瀬多川が見え、そこにかゝつてゐる長い瀬多の橋が見え、石山の寺をその中に持つてゐる低い扁平い丘陵が見えた。そしてそれらのものは、すべて美しく夕日の影にチラチラと輝くやうに思はれた。川に浮んだ帆も、舟も、何も彼も……。

白い壁のくつきりと照されたさまが、中でも殊に鮮かに見えた。岸には、川楊が矢張、夕日の明るい光線の中に——。

『はア、かういふことがあるんだ——』

かう私は思はずにはゐられなかつた。『だから、一度や二度見て、輕卒に判断して了ふことは出来ない。昔の人は、何遍も、何遍も見ただで、それで、瀬多夕照といふ名勝を八景の中の一つにしたのだ。これと同じ美しさを持つた夕照のさまを昔の人はちやんと見てゐたのだ……。それを、曾ては、何うしてこんなところが好いんだらうなど、思つた。瀬多夕照など、言ふけれども、ちつとも夕日などの好きさうなところぢやないと思つた。』かう思つてゐる中に汽車は

早くもその瀬田の長橋に並行した鐵橋を轟々として渡つて行つた。

### 三井寺

石山を出た汽船は、瀬多の大橋をくゞつて、次第に湖水の方へと出て行つた。比叡が見え出して來た。つゞいて比良が見え出して來た。右には近江富士の名のある三上山の形の好い姿がくつきりと水の上にその影を蘸した。

汽船は膳所の岸に成るたけ寄るやうにして航行した。

『昔は、こゝに膳所のお城があつて、それが水に映つて、何とも言はれない好い景色だつたんさうだ——。』私はこんなことを妻に言つた。

私達は石山から三井寺の方へと行かうとしてゐるのであつた。次第に大津の町があらはれ出して來た。頻りに蜆を取つてゐる小さな舟などもそここゝに見えた。

紺屋ヶ關を過ぎ、それからもう一つ何とかいふ埠頭を通つて、そして三井寺下に着いた。

汽船を下りて、其方へと出て行くと、川に添つた眞直な路があつて、それがずつと三井寺の下へとつゞいて行つてゐる。川には新しい臥席ござを敷いて客の來るのを待つてゐる河舟などがあ

つた。『あ、さうだ——これが疏水だ……。この舟に乗ると、京都の南禪寺のところに出て行けるのだ——。』思はずかう言つて私は妻に指し示した。

『トンネルの中をくゞつて行くんですか？』

『さうさ——。』

『いやですね？ よくそんな舟にのる人がありますね？』

妻もその河舟を覗いて見るやうにした。

『でもわけはないんだもの……。この舟に乗りさへすりやすく行けるもの……。非常に面白いさうだよ。』

『でも眞暗なんでせう？』

『それはさうさ……。ところどころに電氣がついてゐるにはゐるさうだけれどもね？ そして向う

に小さく針の穴ぐらゐるに出口が見えてゐるさうだ——。』

『へえ。』

あとから來た二人づれの學生は、私達を追ひ越して平氣で石段をその河舟の方へと下りて行つた。

『あ、あの人達も乗るのね？』

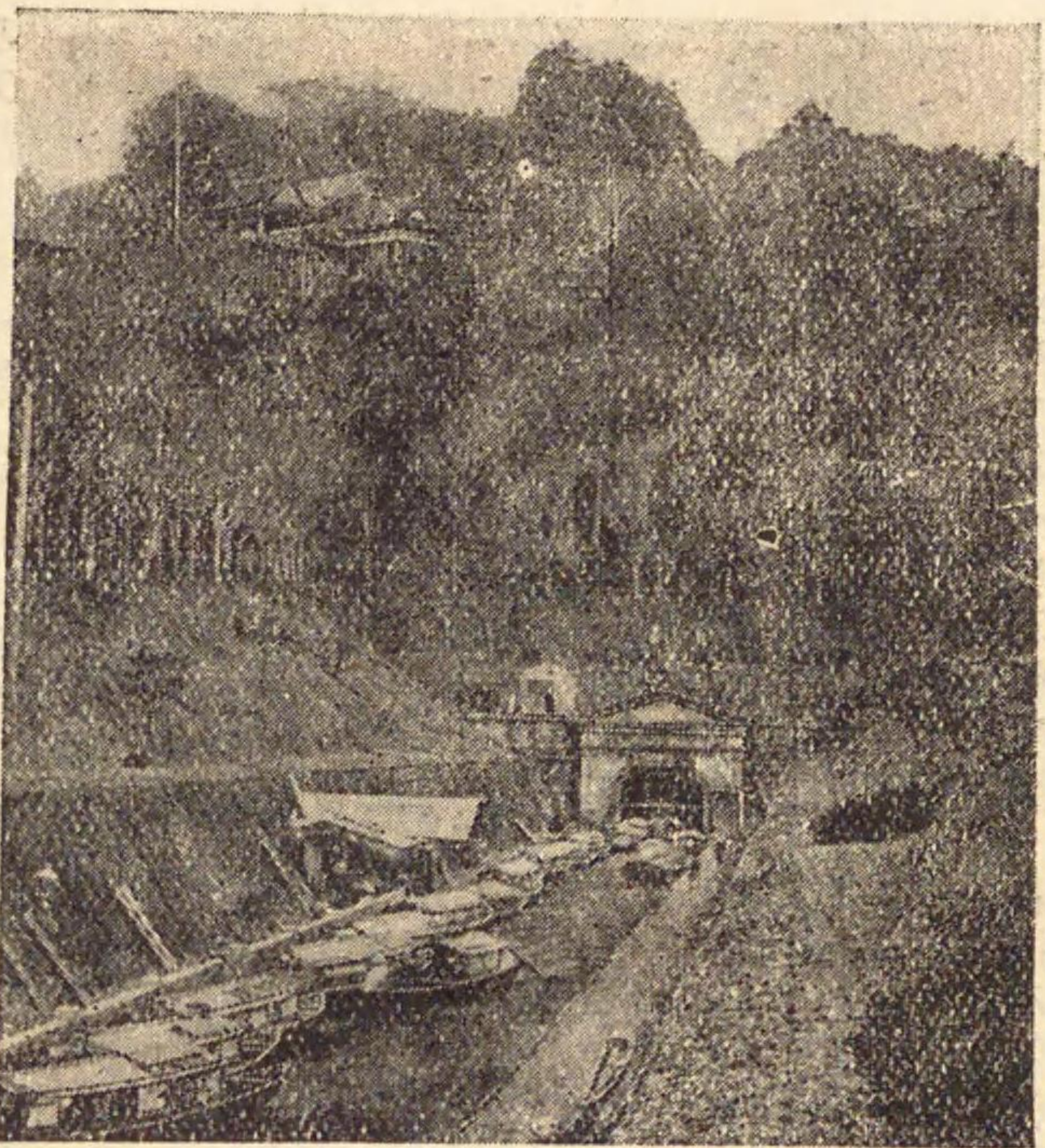
妻は小聲で言つた。

『國木田がよくこの舟に乗つたことを話して  
るたよ。始めは變な氣がしたけれども、馴れ  
ては何でもないツて、さう言つてゐたよ』

『さう國木田さんもこれに乗つたことがある  
んですか？』

こんなことを話しながら私達は歩いた。議  
事堂の建物などが次第に右の方に見え出して  
來た。やがて上に三井寺の堂があらはれ出し  
た。

この寺は長等山圓城寺と言つて、叡山の延  
曆寺と並んで昔から世にきこえてゐるもので  
あつた。西國十四番の札所で、三井寺といふ



疏水入口より三井寺を望む

別名は、境内に天智、天武、持統の三天皇の降誕の産湯に供した井があるためであるといふこ  
とであつた。何でも聞くところによると、同じ天台でも延曆寺とは違つて、最澄空海の二派を  
調和した形であるため、叡山の山徒と仲がわるく、天正元曆以後は全く分れて二つになつたと  
いふことであつた。石階をのぼると、そこには堂があつて、その向うに琵琶湖を一目のもとに  
集める月見臺があつた。

『好いのね……丸で一目ね』

かう言つて妻はそこに立ち盡した。大津の市街も唯足の下に見えた。

これから本堂の方に行くには、阪を下つたり疎らな林の中をぬけたりしなければならなかつ  
た。林の中には鐘樓があつて、そこに大きな古鐘の吊られてあるのを見た。案内の爺が上方辯  
で巧にそれを説明する形は、此處に來たもの、皆な忘るゝことの出來ないものであつた。

この他に、寺にはいろいろな寶物が藏されてあつた。應舉の七難七福の圖などもあつた。し  
かし堂は度々の兵燹に焼けて、今日まで依然として残つてゐるものは殆どないと言つて好かつ  
た。唯、金堂だけが割合に舊いあとを残してゐた。

これから私達はすつと通りへ出て、それからさつき添つて行つた疏水の堀割の方へと出て行

つた。

私は天智朝の志賀の都のことなどを妻に話しながら歩いた。それは暑い暑い初夏の日であった。私達は長い通を歩いて電車の出るところまでやつて来た。

## 義仲寺

義仲寺は大津の停車場から出て、すこし右に行つたところにあつた。義仲の戦死したのは、此の邊よりはもつとすつと東に寄つたところであらうと思はれるが——粟津野の今平兼平の墓のあるあたりではないかと思はれるが、その時、首だけ取つて、體をそこに放り出してあつたのを、そのまゝ、此處に持つて来て葬つたのであらうと思はれた。少くとも昔は此處等も田圃で、塚がさびしく夕日を帯びて横つてゐただけであつたであらうが、段々人家も出来、町らしい形も出来て、今の寺らしいものも段々出来るやうになつたらうと思はれた。

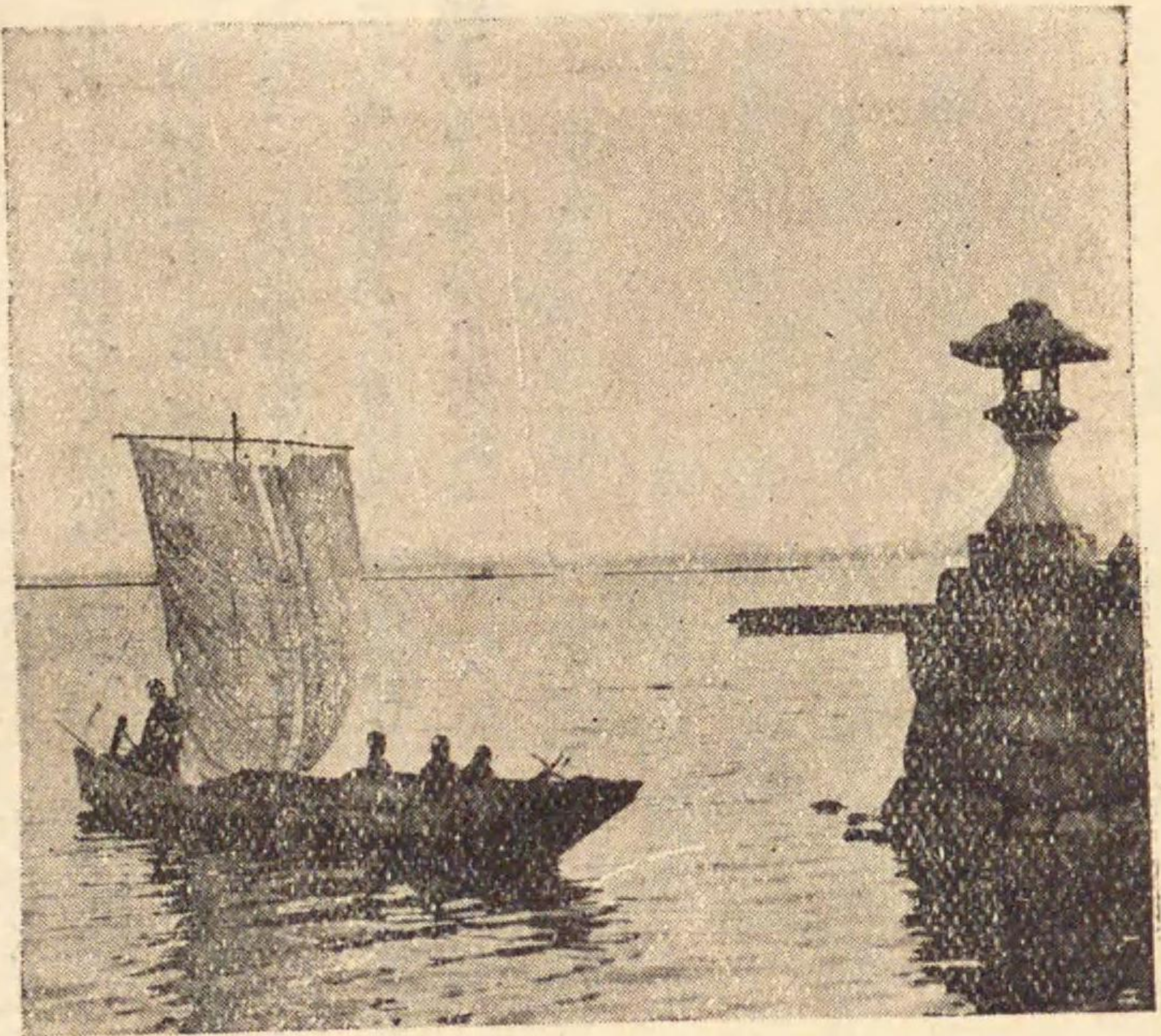
今はこゝに、芭蕉の墓があるので、一層意味深いものとなつた。『旅に病んで夢は枯野をかじめぐる』と詠んだ彼と、深田に陥つて死んだ不運な武將と、何の縁故もなしに、こゝに、かうして墓を並べてゐるといふことが不思議な心を旅客に起させずには置かなかつた。門人の建てた『木曾殿と背中合せの寒さかな』もいろいろなことを人に思はせた。

## 琵琶湖

琵琶湖は今は京阪地方の人達の立派な遊園地になつた形がある。ことに、太湖汽船會社では、その種の遊覽者を歓迎し、白石丸を始め、數種の汽船を航行せしめ、食堂の設備なども十分にしてあるので、竹生島、多景島、沖の白石、雄松崎などの諸勝——昔はとても容易に行くことが出来なかつたところまで樂に日がへりが出来るやうになつた。途中で一夜泊るつもりならば、ことに靜かに湖水の風景に浸ることが出来た。

日歸りの豫定ならば、大津を午前七時前後出港の西廻りの汽船に乗るのを便とする。汽船は途中、堅田、小松、大溝等に寄港して午後零時半に竹生島に着く。午後三時半までそこで遊んで、今度は東廻りの汽船に乗る。長濱、彦根、長命寺を通つて、午後の十時には大津に歸つて來ることが出来た。これを反對に、往路を東廻りに取れば、午前八時前後出港の汽船で、前とは廻に同じ時刻に大津に歸着した。

京阪地方からでなしに、東京の方から行くものは、また京阪から來ても、大津で歸らずに



矢橋附近

琵琶湖

すぐに東京に向うものは長濱で乗つたり降りたりすることが出来た。東京から夜行で米原に行き、北陸線で乗換へて長濱に着くとすれば、午前九時頃にそこを出港する竹生島寄港の汽船に間に合つた。琵琶湖が天下の奇觀であることは今更言ふまでもないことであるが、今までは、所謂近江八景なるものだけに限られて、それ以外には餘り多く注意を拂はれなかつた形があつた。つまり湖の最も美しいところは、全く他に知られずにあつたのであつた。それも理ことばのであつた。汽船のない時分には、とても二日や三日で竹生島まで行くことは出来なかつたのであるから……。それに西近江の北國街道は頗るわるい路で、車や自動車を樂にやることは出来なかつたのであるから——。

琵琶湖は石山、三井、唐崎などで満足すべきものではなかつた。また堅田あたりで引返して来て了ふべきものではなかつた。奥深く入つて行けば行くほど、美しさは加つて行つた。雄松崎あたりに行つて、始めてその大觀に接することが出来た。

沖の白石、多景島、すべて好かつた。名勝の多い近畿地方にも、これほどのところは容易に求めることが出来ないと思はれるくらゐであつた。竹生島のすぐれてゐるのは言はずもがなである。饗庭野あたり、今津あたり、更に奥深く大崎あたりに行くと、全く世離れた美しい湖水を眺めることが出来た。

## 唐崎の松

天智天皇の都した志賀の都の趾は、今の滋賀村字錦織あたりであるといふことであつた。しかしそこには何も残つてゐるものともなかつた。唯、竹藪が茂つてゐるのを見るばかりで、平忠度の歌の『さゝ浪やしがの都はあれにしを昔ながらの山櫻かな』のその山櫻すら、もはや何處にも見出すことが出来なかつた。

この東十五町ほどを隔てたところに、例の唐崎の一つ松があつた。『唐崎の松は月よりおほるにて』かう芭蕉の詠んだ松は、今はすっかり枯れて、何處にも緑を認めることが出来なくなつて了つてゐた。松は何でも天智天皇の御手植で、中世に枯死したのを秀吉時代に栽え替えたのが今のものであるといふ。南北十間、東西二十七間、數百の支柱でこれを支へて、頗る奇觀を呈してゐたのに、惜しみて餘りあるものと言はなければならなかつた。この樹はいつも雫が滴つて、暗夜にも、その下に立てば衣がぬるゝといふので、それで唐崎の夜雨と言はれたのであるといふことであつた。樹側に大己貴命を祭神とした唐崎神社がある。汽船はそのすぐ傍の

埠頭に來て、客を乗降させた。

こゝから五六町ほど湖水の岸について北に行く。左は水田で、その上に明智光秀の阪本城のあつたといふ丘陵が見わたされる。比叡はその上に聳えてゐる。いかにも好い眺めである。やがて人家の中に入つて行く。そこは上阪本である。それから田圃の中を左に入つて行くと、五六町で穴太といふ村が来る。そこに、景行天皇の高穴穗宮の趾がある。旅客は一度は是非行つて見なければならぬものである。

## 高穴穗宮址

小さな華表が村の道に臨んで靜かに立つてゐた。それは景行天皇の高穴穗宮の址であつた。私達は靜かにその深い杉森の中に入つて行つた。

祠はかなりに立派であつた。大きな神樂殿などがあつた。私達はそこにお詣りしてから、更に導かれて、祠の裏の路を奥へ奥へと行つた。

いかにも、靜かで、のんきで、世離れしたところであつた。それは丁度比叡連山の裾の湖水に向つて落ちたやうなところで、初夏の午後の日影が、或は碧く、或は紫に、或は黒く、山の襞の中にさし込んでゐるのが手に取るやうに見えた。

S君が言つた。

『君、そこにかう出てゐる山があるだらう？』

『長く、スロオプをつくつて……？』

『え、さう……』

かうS君は言つてから、『あそこが君、明智の亡びた阪本城のあつたところだよ。』

『あそこが、あの山の上が？』

『行つて見ると、今でも多少、城壘らしい跡が残つてゐる。あの時分にあつては、叡山の僧徒に對する戦略上、あの城は織田氏に取つて非常に必要な城であつたらしいね』

『さうだらうね……、それにしても、この高穴穗宮の址は何うだね？』

『何しろ、時代が遠いからね。まアまア、此處あたりがさうだつたらう位のところかも知れないよ。こゝから比べると、時代が新しいだけに、天智天皇の志賀の宮の址の方がたしかだね。勿論、そこにも何も残つてゐないけれどね……』

『その時分のことを考へると、しかしちよつと面白いね』

『本當だ……』S君は竝んで歩きながら、『景行天皇時代には、何うだつたか知れないけれど、天智天皇の志賀の都時代には、今の天津からかけて、この湖水の西の岸が一帶の都だつたんだね。人烟稠密だつたんだね。それを思ふと、不思議な氣がするね』

『どうだね』

こんなことを話してゐる中に、麥の黄熟した畠に添つた路は、再び林の中へと入つて行つた。

しかし、今度入つたのは、杉の林ではなかつた。楢やくぬぎの雜木林であつた。梢を洩れた日影は、チラチラの私達の衣の上に動いた。

仲哀天皇が産湯をつかつたといふ井戸のあと——井戸の跡と言ふよりも、むしろ水溜だと言つた方が適當な、さゝやかな水、そこには、落葉や埃塵が一杯に溜められてあるのを私は目にした。

村の人の言ふところに由ると、別に、さうした證據といふものもないけれども、昔から不淨をきらふ土地として、長く口碑に傳へられて來てゐたといふことであつた。天子様のお生れの時に、産湯をつかつた水として傳へられて來てゐたといふことであつた。そしてその考證されるところに由ると、その林のすぐ上にある臺地、それはかなりにひろい、小くとも二三十町四方もあらうと思はれる臺地が、その昔の皇居の營まれてあつたところであるらしいといふことであつた。

私はS君と一緒に、細い路をつたつて、その臺地へとほつて行つた。

先きに行つた私は、

『ほ！』



と言つて、思はず立留つた。

それは思ひもかけない美しい湖水が、すぐその前に横つてあらはれてゐたからである。こんなところから、こんな風に見えやうとは夢にも思はなかつた湖水が。

『ほ、成ほどこれは好いところだ』あとから來たS君もこんなことを言つて立留つた。

そこからは、大津、石山に寄つた湖水の半面が隠すところなくあらはれて見えた。ことに、對岸の三上山の形の整正な姿が、ほつかり獨立して湖水の上に浮んでゐるのは何とも言はれなかつた。

『あれが辛崎ですね？』

やゝ右に偏つて、ごたごた簇つてゐるのを指しながら、かうS君は言つた。

『さうです。辛崎です。松が半分見えてゐます』

『あ、松ですね、あれが？』

私達は高穴穂宮の址を忘れて、暫しそこに立盡した。

『何うです、君の鑑定では、高穴穂の宮の址は、果してこゝにあつたらしいですか？』  
暫くしてから私はかうS君に訊ねて見た。

『さアね……』

『大學の人達は、此處だつて言ふんですか？』

『さうです、此處だらうつて言ふんださうです。……成ほど、さうかも知れないですね。もし、宮殿があつたとすれば、此處でせうな。しかし、その時分にさうした大きな、今日から豫想するやうな都會があつたか何うか、また宮殿があつたか何うか、それはちよつとわかりませんからな』

『大きにね……』

『まア、址があつたとすれば、此處等だつたでせう』

そんなことは何うでも好いぢやないかと言つたやうな調子でS君は言つた。  
その路に添つたところには、黄熟した麥畠があり、その向うには、櫛や、櫟の林の若葉が美しく日に照されてゐた。私達は五六町行つてそして引返した。

## 阪本

阪本に汽船が着く。そこで下りて、通りへ出る。田舎町ではあるけれども、ちよつと賑やかである。いかにも比叡山の正面の入口といふ氣がする。名物の蕎麥屋が到るところに軒を並べてゐるのが見えるも、その特色のひとつだ。

此處の蕎麥は名にきこえたゞけあつて、非常に旨い。上方ではこゝの他に旨い蕎麥はないと言つて好いくらゐるである。流石は僧侶の別天地であるといふ氣がした。やがて延曆寺の正面へと來た。そこには松や杉が並んでゐて、いかにも感じが好い。傳教大

師が當年唐から移し植えたといふ日本最初の茶園などがそこに残つてゐるのもめづらしい。眞直に入つて行くと、延曆寺の事務所が左にある。嵐氣が絶えず山から搖曳して落ちて來る。眞行くと石橋がある。楓樹がある。そこは横川谷と言つて、水が潺々として落ちて流れてゐる。下には茶屋掛をしてゐる家がある。秋の紅葉の頃は、各所の一つになつてゐるといふことである。

やがて大きな華表が見え出して來た。それは日吉神社の近づいて來たしるしである。

これは官幣大社で、昔からきこえた社だ。一に山王權現と言つてゐる。つまり延曆寺の地主權現といふ意味である。例の僧徒がかついで京都を荒れ廻つたといふのはこの祠の神輿であるといふことである。本宮は大山咋命を、二宮三宮は大三輪神、大己貴命を祀つてゐる。社としても立派な構造である。昔はこゝの祭禮は頗る盛で、七社の神輿が乗船して唐崎の旅所に至り、その行列の豪壯盛大であつたことは、昔の書にも到るところに散見してゐる。

これから延曆寺の根本中堂のあるところまで、二十七八町、ひた上りである。杉並木の中に幅の広い路のつゞいて仰がれるさまは、人の心を惹かずには置かなかつた。

この他に、この阪本で見るべきものは、來迎寺、西教寺の二つの寺である。ことに、來迎寺に藏されてある十界圖は、國寶としては名高いものであるが、これは頼んでも是非見せて貰はなければならぬものであつた。何でも巨勢弘高の書いたものだと言はれてゐるが、その感じの神祕にして幽玄なのは、他に多く類を求めることの出來ないものであつた。その他高階隆兼筆の十二天圖があつた。

西教寺はこゝから猶ほも八町、北に山の中に入つたところにある。こゝにもいろいろな寶物

がある。頼めば矢張見せて呉れる。

來迎寺のある比叡辻から、苗鹿、雄琴の二村落を経て、堅田まで一里半ほどあつた。

## 堅田の浮御堂

汽船は湖の西岸に近く航行した。振返ると、大津もはや雲烟の間にかくれ、三上富士が形の好い姿を後の空に捺すやうに見せた。向うには野洲川の河口がそれと指さされた。

琵琶湖は此處等が一番狭かつた。その水深から言つても一番浅かつた。つまり野洲川のあの大きな流れが絶えずそこにその砂を流すので、そのため次第に湖は埋められつゝあるのであつた。やがては湖はこゝらあたりから二つに分けられるかも知れないといふことであつた。

と、右に、岸にくつつくやうになつて、例の浮御堂——これがあの浮御堂かと思はれるやうに、ほつかりそこに浮び出して見えた。『ふむ、これがさうかえ？ 存外小さいんだね？』初めて見たものは、誰もかう言はずにはゐられなかつた。

しかしそこには蘆荻などが茂つてゐて、唐崎や阪本あたりから比べると、餘程水郷らしい感じに富んで來てゐた。いくらか藝術的な匂ひもした。

この浮御堂といふのは、恵心僧都の創建で、中には千體の阿彌陀佛が安置されてある。堂は

岸から湖面に十四間ほど突出してゐて、それを連絡するために棧橋がかゝつてゐる。現今の堂は、昔の堂が破壊したので、櫻町天皇の内旨で京都の能舞臺を賜つたものであるといふことである。流石に感じはわるくなかつた。

それに、此處等あたりまで來ると、いくらか俗な世間的な氣分から離れて來たやうな氣がした。比叡はもう後に、比良がもう餘程前に近くなつてゐるのを目にした。

『それきり、別に何も無いんだらう？』

『それはさうさ』

『あつけないね』

こんなことを人達は言つた。汽船はすぐ動き出した。

## 雄 松 崎

汽船は停船した。

雄松崎の鼻は漸くやつて來たのである。私達の前には、何方かと言へば、色彩の濃い、葉の太い、幹の大きな、いろいろな形をした松の姿がはつきりと繪のやうにあらはれて來た。

長い棧橋に吃水の浅い汽船が横附けになると同時に、誰も彼も、皆な草履を引かけて岸に上つた。

白砂青松——何うしても、此處は海としか思はれなかつた。近江舞子の稱も徒爾ではないと思はれた。しかし、舞子よりも、何方かと言へば、讃岐の津田の松原に似てゐると私は思つた。村の人達は、私達のために、鯛ほすの地引網を引いて見せて呉れた。何といふ面白い光景であつたであらうか。兩方から絞つて行くにつれて、網の中に入れられた魚は、右往左往に泳ぎ廻つても、しかも何うすることも出來ず、益々引寄せられて、後にはゴチャゴチャに大きな蒼蒼びくの中へ入れられて了ふのであつた。私達は唯面白がつてそれに見入つた。

私達は涼しい松の蔭を選ぶやうにして休んだ。

此處から見た比良山は、殊に近かつた。二條、三條になつて遠くから見えてゐた山の薙ぎたところも、山と山と重り合つて見える巒のところも、谷から谷へと折れて入つて行くらしい路も、此處から仰けば、すべて手に取るやうに見えた。

『比良はすぐですね、此處からは？』

『え、一里半位のもんです』

『嶮しいには嶮しいですか』

『いゝえ、さうでもありません。それでも、ちよつときついいところがありますけれど、さう長くありませんから』

『登るものがありますか』

『夏はかなりあります。時には、外國人が夫婦づれで、テントを持つて、一週間も十日も暮して來ることなどもあります』

『へえ、それで山の中がそんなに涼しいのですか？』

『比叡よりも此方の方がいくらか高いですから。これから武奈ヶ嶽の方へ行くと、それはも

う深山です』

こんなことを土地の人達が話した。

陸路をやつて來ると、此處まではかなり遠かつた。堅田から和邇村まで一里半、それから木戸まで一里半、木戸から此處までまた一里と少し歩かなければならなかつた。この間は概して水田で、ところどころに林が雜つてゐるくらゐのものであつた。路からは湖水が絶えず指さされた。

南比良、北比良あたりは、ちよつと感じが好かつた。

雄松崎は、陸路から行くと、北比良から五六町北にあつた。松が美しく打渡して見られた。松林のかけに、小さな沼などがあつた。蘆荻や藺などが生えて、田舟などが浮んでゐた。

實際、琵琶湖も、此處あたりまでやつて來なければ、やつて來た効かないといふものであつた。此處では最早東岸の髣髴を得ることが出來ないほどそれほど湖は濶かつた。湖といふよりも何うしても海といふ感じに近かつた。

『此處等あたりがひらけると好いですな……。別莊地ぐらゐにはなりさうなもんですがな』私

はこんなことを縣の理事官に言つたことを思ひ起した。

『追々さうなるでせうがな？』

『さうなれば、此方の方もぐつと開けて行くに違ひない。堅田あたりから比べると、くらべものにならないくらいひ好いちやありませんか』

『さうですよ』

『ひとつ大に紹介するんですな……今にひらけますよ。近江舞子なんて言ふけども、本當の舞子よりもぐつとよくなりますよ』

汽笛が頻りに鳴る。私達は急いで棧橋の方へと引返して行つた。

## 楊梅の瀑

雄松崎から再び街道に出で北小松に行く。そこには小松村の中心で、村役場があつたりしてかなり賑やかな光景を呈してゐる。これから少し戻つて右に入る。十九町ほどで小松山の中に楊梅の瀧といふのがある。高さ二十七丈七尺、幅三間、絶壁から匹練のごとく落下してゐる。一名布引の瀑といひ、また溶洸の瀑とも言つてゐる。勿論、さう大してすぐれたものと言ふことは出来ないけれども、境が幽邃で、松などが澤山生えてゐて、湖西の一奇觀とするには十分である。昔、關白二條晴良と足利義輝とが此處に遊んで、初めて楊梅の瀧といふ名をつけたといふことであつた。

雄松からは、さういくらも隔つてはゐないのであるから、是非一度行つて見るが好いと思ふ。北小松から一里ほど北に鶉川といふ部落がある。そこに白鬚神社といふのがある。垂仁天皇二十七年の創建で猿田彦命を祭つてゐるが、三代實錄などにも出てゐて、かなりきこえた古社であるが、何でもその社の華表は往昔湖中にあつたが、あの年湖水増して全く水底に沈没して

了ひ、それから康安中に湖水が三丈六尺ほど減じた時、二回ばかりその檜柱が依然として残つて見えてゐたといふことである。このあたりを明神崎また五位崎と言つてゐる。雄松崎に勝るとも劣らない明媚な風光をもつてきこえてゐるところである。

## 藤樹書院

白鬚神社からぐるりと廻る。この間は湖上の風光が何とも言はれないほど美しい。遙かに沖の白石が見える。またその向うに多景島が見える。東岸の荒神山の立つてゐるのがほつかり波の上に浮ぶやうに見えた。

こゝから大溝まではいくらもなかつた。一里に少し近いくらゐるであつた。この町は西岸では一番大きく、維新前まで分部氏の城下であつただけに、何處か小ぢんまりとしたところがあつた。町を真直に南から北へと通り掛ける。水田があらはれ出して來た。いかにも感じがひろびろとしてゐる。右には饗庭野が遠く展げられた。

加茂川の橋のところまで二十五六町ぐらゐあらうか。それを渡つて川についてすぐ右に入る。更に水田の中の路を行く。突當りに見えるのが、中江藤樹の蹟のある上小川村の部落である。

私は『東遊記』に書いてある記事に興味を感じた。そしてかういふ僻地に近江聖人の名を得た學者のあとを何うかして一度は訪ねたいと思つた。今、それがその前にある。私は胸の躍る

のを禁めることは出来なかつた。

藤樹の事蹟は今これを此處に記すまでもない。大洲侯のもとから歸つて一人の母を養はうとしたことや、さうした田舎に陽明の良知の學をひろめたことなどは、皆な誰でも知つてゐる。ことに、あの躬行實踐、遂に徳を以て四隣を化したかれの事業は、ことに及ぶべからざるものとしなければならぬ。村にはその書院が依然として残つてゐる。ことに忘れることの出来ないのは、その時分からある老藤が今もそこに茂つてゐることであつた。藤樹書院、その名のよつて起つて來た藤——その藤が今日までかうして残つてゐるといふことは、その書院の依然として残つてゐると共に、何とも言はれないなつかしさを私に與へた。

私の頭には熊澤蕃山が藤樹を慕つて此處にやつて來て、何うしても門人になりたうと言つて、そこを去らなかつた時のことなどが浮んで來た。また藤樹の没後、同じやうに陽明學を修めた大鹽平八郎が門人をつれてこゝにやつて來て、『院畔古藤花落時、泛湖來拜昔賢碑、餘風有似比良雪、流滅無人致此知』といふ一詩を賦したことなどが浮んで來た。いよいよなつかしさに堪へられないやうな氣がした。

今でも里民は藤樹先生と言つてその徳を忘れなかつた。その墓は村の玉林寺にあるが、會て香

花の絶えたことはないといふことであつた。私は何とも言はれない氣がした。それに、その小川といふ村落も一種靜かな感じに富んでゐる村であつた。いかにもさうした學者の書院を保存してゐるのに適當してゐるやうに見えた。そこから二十町ほど湖畔へと出ることが出來た。

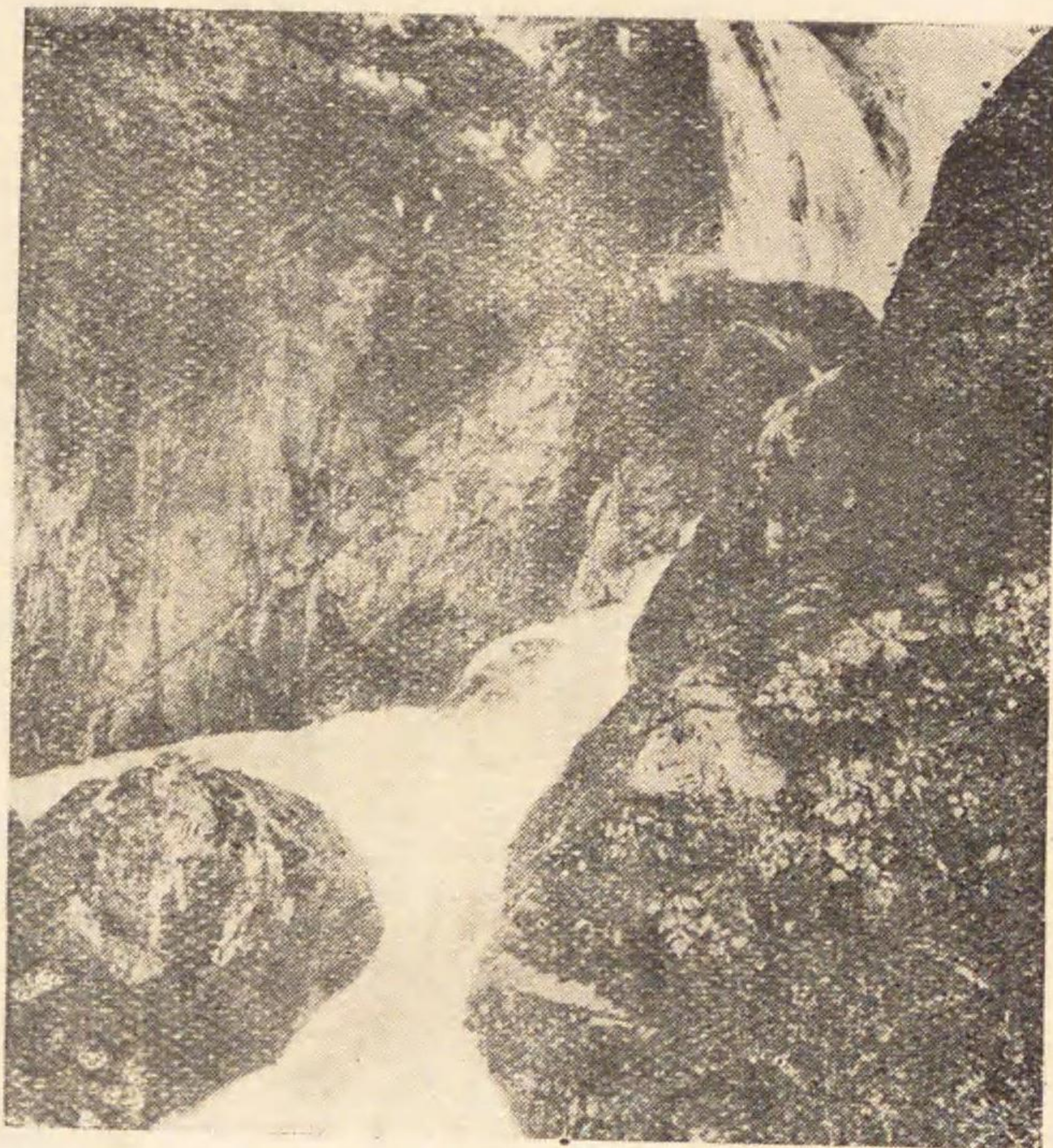


## 八池瀑

これから加茂川に添つた路を溯つて行くと、そこに二三の見るべき寺だの古蹟だのがあつたが、先づ一番先に上拜戸の禪智院に行くのがその順路であらねばならなかつた。

それは世に高島の尼御所と言はれて、伏見宮の女王龍溪禪尼を開基とした名高い禪宗の尼寺であつた。第四世までは累代伏見宮女王が入つて住職になつたといふことであつた。徳川時代には寺領百二十石を有した。

下拜戸には、往昔湖西屈指の大祠と言はれた水尾神社の衰へつくしたものが残つてゐる。



耶馬溪八池瀑

た。

これから伊岡を経て鹿ヶ瀬に行く。この間一里半には少し遠い。山は次第に近くなつて、翠嵐が衣袖を染めるばかりなのを感じる。こゝから少し山の中に入ると、字細谷に八池瀑がある。瀧の落つるところが八つの淵を成してゐるのでその名を得たのである。瀑壺は非常に深くその幾十丈なるの知らないほどだと言はれてゐる。

この瀑を見て、一里ほどで湖西の第一の高峰武奈ヶ岳の頂上に達することが出来る。比良の頂上も見事であるが、更に一層眺望に富んでゐるのが此山の頂であるといふことである。そこからは湖水ばかりではなく、波濤のやうな連山の起伏を隔て、遙かに西北に若狭の海光を見ることが出来るといふことであつた。

## 沖の白石

「ほ、これが沖の二つ岩！」

かう言つて、誰も彼も皆立つてそつちの方に行つた。

白ちやけた色をした二つの岩石——一つは鋭く一つは緩かに斜に伏したやうな形をして立つてゐる岩石と殆ど相觸れるばかりのところを、私達の汽船は速力を緩めて靜かに航行した。

「此處は全く無人島ですな」

かう誰かが訊くと、

「何しろ、これだけの岩ですから」

「でも、鳥は棲んでゐるらしいですな。白いのは糞でせう」

「さうですな」

「信夫翁鳥ですか」

傍からかう誰か言つた。

「信夫翁鳥はこんなところにはゐないでせう。海ぢやないから」

「さうかしら、あれは、海でなくつちやゐらない鳥かしら？」

皆なは面白さうにして笑つた。

酔つた一人が、傍にゐた若い妓をつかまえて、

「お前を一人こゝに置いて行つたら、何うする」

「さうね、一人ぢや、ちよつと困るわね。貴郎と一緒になら、此處に残されても好いけれど……」

「こいつ！」

など言つて皆な笑つた。誰も彼も大抵は酔つてゐた。

丸で絶海の唯中に航行してでもゐるかのやうに、汽船は靜かに動いて行つた。見わたす限り、渺茫として、殆ど際涯を知らなかつた。

## 多景島

『さうですね。矢張、さうするには、竹生島でせう。あそこなら、一日に一度や二度は便船もあり、たよりもありますけれど、多景島あたりでは、一週間も使ひもないやうなことがあるんですからな』

『しかし、そこに寺はあるんでせう？』

『多景ですか？』

『え』

『あるにはあります。それに、そこにいる坊主は面白い坊主だつたと思ひます。わざと好んで、その閑寂を好んで、そこに行つてゐるやうに聞きました。』

『それは面白いですな』

『いらつしやいますか』

『行つてゐられたら面白いだらうと思ひますね。寺はかなりに好い寺ですか？』

『貴方がゐらつしやる室ぐらゐ、それはありますよ』

『汽船は寄らんですね』

『定期船には、寄つて行く船はありませんな』

こんな話をしながら、私はじつとその遠い多景島の翠螺に見入つた。午後の日は斜に波に照つて、その微かな島影は濃い空氣の中に黒くはつきりと浮き出すやう見えてゐた。

『彦根の方から行く方が近いんですか？ 矢張……』

『え、さうです、彦根からなら、三里位のものでせう』

『矢張、和船を仕立て、行くより他、爲方がないんですな』

『さうですな』

かう言つたが、『何しろ、小さい島なんですから。……竹生島も、さう大きくはないが、あれよりも、もつと小さいんですから……』

『でも、島位は少しはあるんでせう』

『何うですか、ありますかな……。竹藪があるのは覚えてるますけれど……』

私には、何とはなしに、そのさびしい島の生活がいろいろ想像された。さうした世離れた生

活——もしそれが出来たなら、それこそ何んなに好いであらうか。島の周圍に微かに打寄する波の音を相手に靜かにその日その日を送るやうな生活が出来たら、それこそ何んなに好いだらうか。かう思ふと、そこに一人かくれて行ひすましてゐる僧侶のさまがいろいろに想像されて來て、何となくなつかしくなつた。私の眼の前には、世離れてくらしてゐるその光景が歴々と眼の前に見え出して來るやうな氣がした。

『置いて呉れるには置いて呉れますな……』

だしぬけに私はまた言つた。

『その多景の寺ですか？』

『え、さう……』

『置いてくれますとも……』

『今度頼んで貰ふんだな、一つ』

『いらつしやいますか』

とても駄目でせうといふやうな調子で、その人は言つた。

汽船は絶えず航行した。その小さな多景島の青螺は、いつまでもいつまでも——さながらさ

うした私の願ひを納れるかのやうに、はつきりと湖の空氣の中に浮び出してるた。

## 竹生島

次第に、島に近寄つて行つた。

私達の眼の前には、樹木の多い、緑葉の深い、それでゐてかなり大きな高距のある島があらはれて來た。湖は此處あたりでは、かなり大きい水深を持つてゐるので、水は頗る碧く、岸に打寄する波の音が靜かにさらさらと碎けるやうにきこえた。

汽船は最初島の側面を通つて、次第に、その正面、棧橋のある正面へと動いて行つたが、一方を見ると、鹽津の方に深く入り込んで行つてゐる湖水に、高い山巒の影が雲と一緒に落ちて何とも言はれない Picturesque なシーンをその前にひろけてゐた。

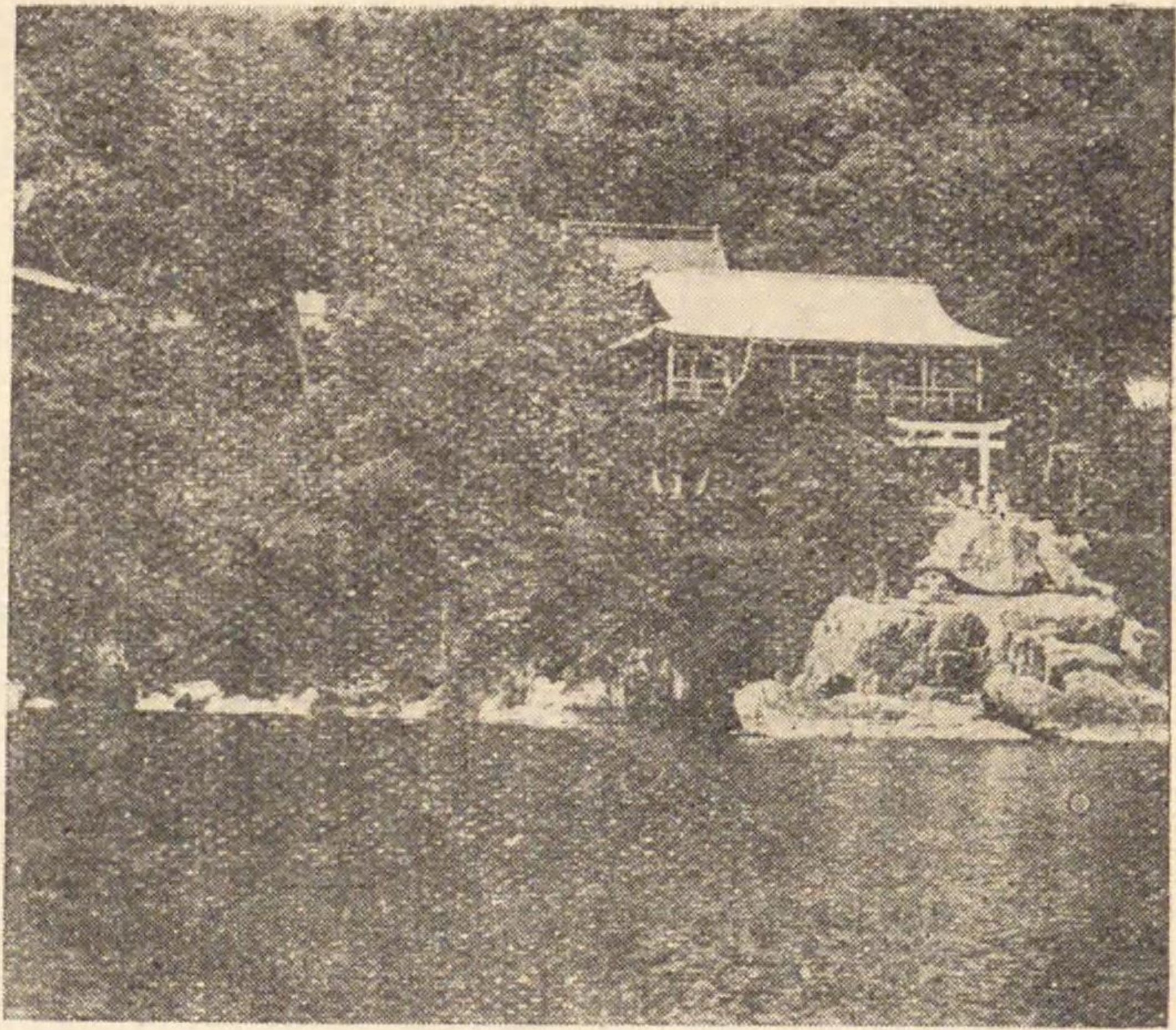
今まで、樹木しか見えなかつた島の中に、次第に、寺の屋根や、祠の蔓や、大きな社殿の屋根などが見え出して來た。岸には、大勢、人が集つて此方を見てゐた。

成ほど面白い島だと思つた。ちよつと他には類のない島だと思つた。第一、島の高いのが好かつた。次に、樹木の鬱蒼として茂つてゐるのが好かつた。ことに午が廻つたばかりの初夏

の日影の光線が、緑葉を灑してところどころに洩れてゐるは、私の心を惹かずには置かなかつた。

棧橋の上には、大きな、葉の厚い、美しい緑樹の影が、濃淡の繪を織り出してゐるのを私は目にした。やがて汽船は靜かにその棧橋へと近寄つて行つた。

その棧橋が既にかなり高い位置にあるのに、それ以上に、路は更に高く高く登つて行くのであつた。私はいろいろなものを見た。老僧が金襴の袈裟をかけて、多くの弟子達を伴れて、知事の一行を迎へに出てるのを見た。また衣冠をつけた祠官のチャホヤと傍に寄つて來るのを見た。少しのほると、其處に小さな堂があつて、その向うに、長い廊下がずつと寺の本堂へとつゞいて行つてゐる



竹生島

るのを見た。淡竹の藪が綺麗に掃除されてるのを見た。

辨天の堂は、かなり高いところに位置してゐた。波の音に取巻かれ、搖曳した嵐氣に包まれ、更に深い緑樹の影に半ば埋められるやうになつて……。私は群に離れて、猶ほ上へ上へとほつて行つたが、やがてその頂に近いところにかなりすぐれた別荘らしい新しい家屋の立つてゐるのを認めた。

縁起が古いだけに、そこに竝べられた寶物には、かなりすぐれたものがあつた。誰だかの持つたといふ菊一文字といふ銘刀や、豊臣秀吉の起請文などは、私の眼をひくに十分であつた。私はやがてそこから竹生島神社の社殿の方へと行つた。

そこには寶物は竝べてなかつたけれども、湖水に面した眺めは、他にないほどそれほどすぐれてゐるのを私は見た。私はいろいろなことを思つた。經正の琵琶のことで浮んで來れば、都良香が十二因縁心裏空に答へられた時のさまなどもそれとなく思ひ出されて來た。緑樹影沈んで魚木にのほり、月、海上に浮んでは、兎も波を走るか、あらおもしろの景色やと昔の人の言つたのも、理だなどと思ひながら、私はじつとそこに立盡した。

祇園南海が年がまだ幼なかつた頃、あの人から石見國如硯と言はれたのに對して、竹生島似

笹と言下に言つて退けた話は、幼ない時から聞いて知つてゐるが、今、またそれが思ひ出されて來るのもなつかしかつた。

私は縣廳の人にきいた。

『これで、こゝは、話せば、長く泊めて置いて呉れますか。』

『え、泊めて呉れますとも……』

『寺の方ですか、それとも神社の方ですか』

『何方でも、頼めば、泊めて呉れることになつてゐます。何しろ、かういふ交通の不便なところですから、昔は、參詣すると言つて、此處に來たものは、五日なり、十日なり、きつと滞在して行つたものらしいですからな』

『さうでせうな、昔は——。大津からは、餘程、好い追手か何かでなければ、一日では來られなかつたでせうからな』

『本當ですとも……』

『今は、しかし、長濱から來ればわけはありませんね？』

『え、わけはありません。朝の九時に、長濱を立つて來る汽船がきつと此處に寄つて行くこと

になつてゐますから……。東京から來るにしても、昨夜の夜行で來れば、米原ですぐ乗り替へて、その九時の汽船に十分に間に合ひますから』

『さうですかね、便利ですね、多景とは大分違ひますね』

『え、多景とは——』

私達は島の中をあちこちとめぐつたり、寶物を見たり、堂から祠へ參拜して歩いて行つたりしてゐる中に、時の間に時間が経つて了つたと見えて、歸りを促す汽笛は、棧橋の方からきこえて來た。

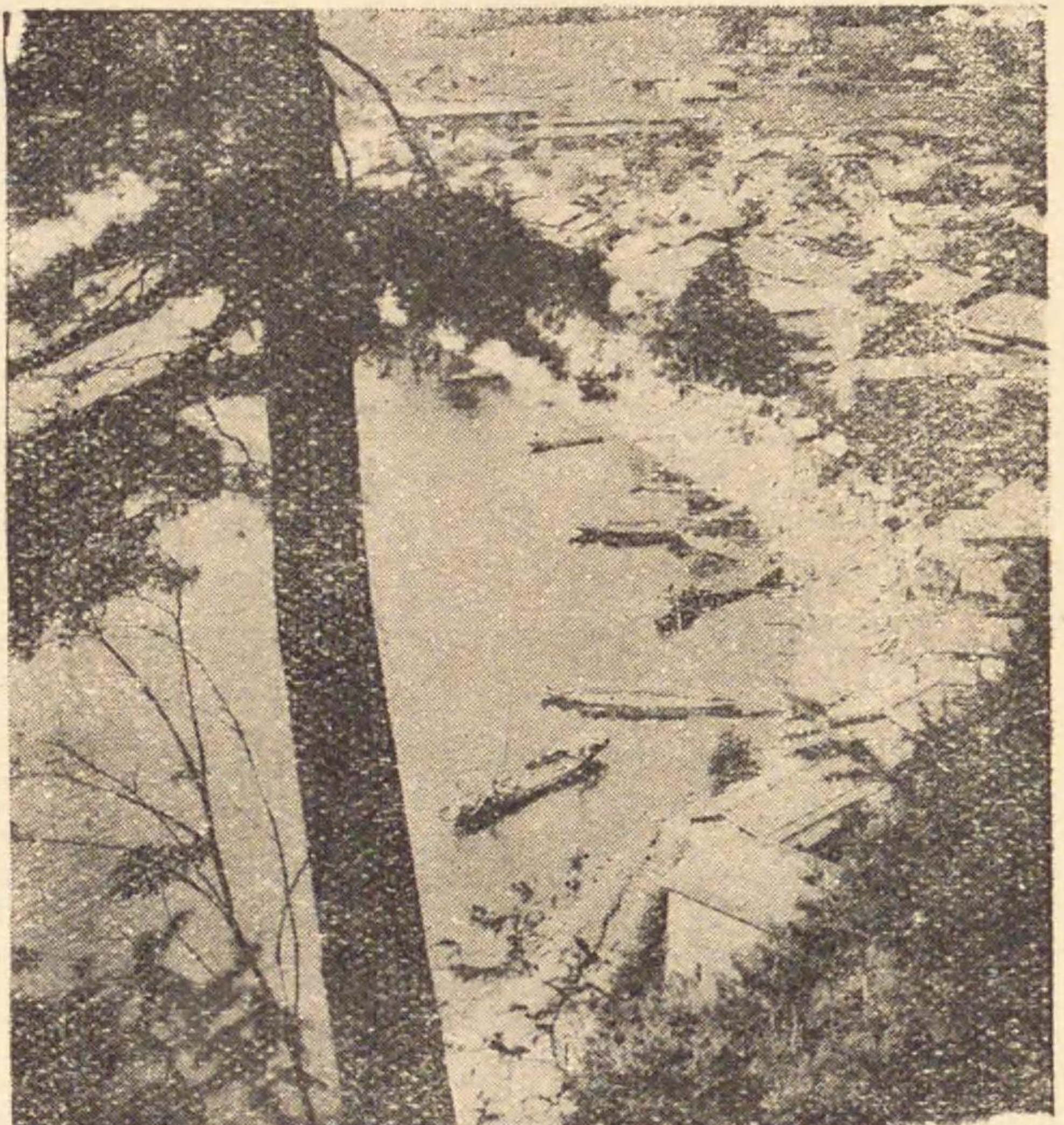
『あ、もう時間だ』

折角、はるばるとやつて來たのに、一夜もすごすことが出來ずに、もう別れて行かなければならないと思ふと、誰れも名残惜しく思はないものはないらしかつた。『さうだね、今度來た時には、もう少しゆつくりして行くんだな。一夜位泊つて行つてもわるくはないところだね』かうした話がそこでも此處でもきこえた。

汽船は大崎の奇勝を探ぐるために、少しあとに戻つて、鹽津から長く出てゐる半島の方へと深く入つて行つた。

静かな波、それに漂つた白い帆、半島の奥に深く連つて見えてゐる高い山巒——此處等あたりに来ると、もう何うしても湖水と思はれないほどそれほどあたりが渺茫としてゐた。

此島にある都久夫須麻神社は、式内の社で、雄略天皇の時、既にこゝに鎮座されてあつたと言はれてゐる。天平寶字八年には惠美押勝の叛があつた時、この神が神靈をあらはしたといふので從五位上を授けられたといふ事蹟もある。今の殿堂は、慶長八年豊臣秀頼が伏見桃山の日暮御殿を移したので、今、特別保護建造物になつてゐる。寺は寶嚴寺と言つて、天正十年僧行基の草創、昔は小堂の中に、鎮護國家のため四



琵琶湖海津

竹生島

天王像を安置したが、天平勝寶四年、淺井郡の人國造田次丸がこれに代ゆるに千手觀音を以てしたため、一時は觀音堂と言はれたが、その後、延曆になつて、僧最澄が辨天堂をつくり、辨財天を安置した。それから嚴島、江の島と並んで日本の三辨天と言はれることとなつた。

こゝにわたるのは、東岸の長濱からわたるのが一番近い。海上三里ぐらゐるしかない。昔、汽船のない時分には、東岸は淺井郡の早崎、西岸は高島郡の今津から小舟で此處にわたつて來たのであつた。平經正が北國征伐の途次笙を奏したことは平家物語に詳しく書いてある。

## 若 狹 へ

若狹に行くには、米原から北陸線で敦賀まで行つて、そこから小濱線に乗替へれば、何のわけもなく行けたけれども、以前は琵琶湖を汽船で今津までやつて來て、そこから若狹街道を西北へと入つて行つたのであつた。私は一度そこを通つたことがあるので、簡単に此處に書いて置かうと思ふ。

今津の町を半ば行つたあたりから左に入る。蘭生といふ部落から石田川の流に添つて次第に山の中に入つて行く。いかにも氣持が好い。溪はさう大してすぐれてはゐないけれども、兩岸に竹藪などがあつたりして、いかにも山村らしい感じに富んでゐる。北生見など、いふところを通る。路は絶えず川に添つてのほつて行く。石田川とわかれるところが百九十三米の高さを示してゐる。保阪に行くとは百四十六米、全くの山の中である。これから路は下りになる。杉山、大杉など、いふところを通る。もうそこは國境である。今津から、此處まで、三里半ぐらゐなものである。



熊川村はもはや若狭國である。ちよつとした村である。これを通り越すと、北川の源流を成してゐる天増川が北から落ちて来て、絶えず街道に添つて西に流れてゐる。次第にあたりはひらけて来た。ことに、北の方がひろびろと打わたされて見えて来た。

『そら、向うに松が見えやうがな?』かう言つて車夫は足をとめて、『あそこが小濱の入口だ』

『あ、もうあんなところかえ。近いんだねえ!』

水田があらはれ出して来た。村はところどころに點綴されて、殆どそれが絶えないと言つても好いくらるに街道の上を續いて行つてゐる。川の向うにも村落が處々に續いた。

『そら』

とまた車夫は指した。『そら、向うに路があるな?あれが、敦賀から来た路だアな』

『はア……。それぢや三方みかたの方に行くんだね?』

『さうだ』

『若狭にはあつちの方から入るのが便利かね?』

『さうだな、北國からなら、あつちから来るだ』

澤山に澤山に村が出て来た。この中で一番大きなのは、何と言つても若狭彦、若狭姫神社のある遠敷村であつた。それに、此處は京都の鷹ヶ峰からすつとつゞいて入つて来てゐる若狭街道の會點であつた。何となくあたりが靜かであつた。白壁なども多かつた。

熊川村から小濱町までは三里に少し遠いぐらゐるものであつた。今津を朝の七時に出て、午後の二時にはもはやそこに着くことが出来た。

小濱港は汽車が出来たので、今は更に一層の繁華を加へてゐるであらうが、その時分でも、町は綺麗に、娘達も美しく、海は繪のやうで、一夜泊つた旅の印象でも長く忘れられないやうなところであつた。私は門から深く入つて行くやうな、入つたところに柳のあるやうな旅舎に一夜泊つた。

そこでは、青井山といふ町の西の外れの山の上にのほつて見た。それはいかにも海山の眺めの美しいところで、何とも言はれない心持がした。いかにも世を離れた感じがした。この山の下には、柳の影の靡いてゐる美しい狭斜街があつた。

この町には、伴信友の墓、梅田雲濱の墓などがあつた。幕末の學者菊池三溪なども晩年は此處で過したといふことであつた。

今では、汽車で此處に来て、高濱から舞鶴の方へ出て行くのは、さう大して億劫ではなかつた。車も自動車もあつた。

## 大 門 小 門

大門小門の勝は、小濱町の北、内外海村ウチトミにある。つまり久須夜ヶ岳クシュヤケタケの背面になつてゐるのである。従つてそこには船で行くより他に爲方がなかつた。

それも平生は波が荒いので、とてもその怒濤を凌いで行くことは出来なかつた。一年の中五六月の候に、波の平らかな時を選んで、僅かにそこに行くことが出来るばかりであつた。幸ひに私は六月の末に行つた。私は小舟を艤してそこに遊んだ。

風のない静かな日であつたにも拘らず、私はかなり波に揺られた。一兒島の鼻に取つて、それから堅海、泊など、いふ漁村の岸を漕いで行く頃には、何うしてこんなところに出かけて來たらうなど、思つた。松崎の少し手前に、一時、鑛山を掘つた跡などがあつて、大きな岩石に波が凄じく打ち寄せてゐるのを私は見た。

松崎の鼻をぐるりと廻る間は、殆ど人心地がないくらゐに、凄じく波に弄ばれたが、その一角をぐるりと廻ると、そこは思つたほど波は高くななく、碧い、碧い海に藻刈船が二隻も三隻も

浮んでゐるのを發見した。

『不思議だね、外海の方が却つて波がないね？』

かう私は言はずにはゐられなかつた。

『あの鼻は潮先だで、何うしても波が高いだ！』

そればかりでなく、そこに來ると、船頭は帆を斜に張つた。北から吹いて風を利用したのであつた。

大門小門も立派であつたけれども、そこまで行く間の海と岩石とが見事であつた。岩石は到るところに欹つて立つてゐた。海は染めんばかりの碧をそこに湛えた。兎角する中に、船はその門のところへと達した。

それは妙義の山の石門を海に移したものと思へば間違がなかつた。船は帆を張つたまゝその石門の中を通過して行つた。

『ふむ、これは面白い』

かう私は言つた。

門が少くとも三つ、四つはあつた。ことに一番最後の門は奇を極めてゐた。その中には瀧が

落ちてゐるたけれども、それでもひろく舟が入ることの出来るくらゐにあたりがひろびろとしてゐた。私はそこでヒールを抜いたり、重詰にして來た小鯛の押鮓を食つたりした。

『それでも、時々はこのまゝで來るものがあるかね』

『滅多にありませんな……私も二三年前に來たきりです』

『こゝは陸からは何うしても來られないのかね？』

『何しろ久須夜ヶ岳が大きく立つてゐるでな』

『それでも路はあるんだね？』

『小さな路が一筋あるかな、大體ぢやねえよ。丸で壁見たいになつてゐるでな』  
で、私はそこに一時間ほどゐて、そして引返した。

外そと面も

若狹では、外面と言つて、そこまで行つて見なければ十分に海を見たとは言はれないやうに言つてゐた。簡單にその道筋を書いて見る。

無論、そこには車は通らなかつた。何うしても草鞋がけでてくてく歩かなければならなかつた。先づ小濱を出て、北に、國富村の方へと入つて行く。山にかゝつたかと思ふとすぐ嶮しい阪になる。それを越して向うに下りると志積といふ部落がある。そこから北海が一目に見える。左に和田戸岬、右に黒崎を見る。この附近は松の林で、感じが好い。また一峠越す。今度は矢代といふところだ。これから田島までかれは一里あるが、またかなり昇り降りがはげしく、路も嶮しいけれども、いかにも好い景色で、こんなところがかうした邊陲にかくれてゐるかと思はれるばかりである。そこから右に山を越せば、一里半ぐらゐるで三方湖の湖畔に出ることが出来たが、海の景色を見るには、そつちに行かずに、左に路を取つて行く。釣姫つるべ、谷及たんきうなど、いふ漁村がある。須といふ村あたりは、ことに海山の眺めを一目にあつめたやうなところである。

また山を一つ越す。半ば松林で半は雑木林である。二十町ほどで、また、灘しきみが展開される。食見といふ村がある。前の海中には、大きな島が一つ浮んでゐる、標高九十一米を示してゐる。烏邊うへ島と呼ばれてゐるのである。

また山を越す。と、そこに世久見といふ部落がある。これから田井に出る。三方湖があらはれ出す。つゞいて水月湖があらはれ出す。何とも言はれない眺めである。その湖の岸を通つて海山から鹽阪越をして、遊子、小川、神子から常神の方へと行く。この間は梅丈岳の山脈を後に帯びて、前に千島、御神島を眺め、左に沖の石を指し、何とも言はれないほどすぐれた海山の眺めである。小濱から十里近くの難道である。

## 若狹の四湖

若狹の四湖は、地理學上から言つても非常に面白いものである。久々子、日向、水月、三方この四つで、それが互ひに相通じてゐる。久々子は一番海に近く、前者の北端は全く海に瀕してゐるのを見る。日向湖の北端は一つの溝渠で海につゞいて行つてゐた。

こゝに行くには、敦賀から小濱線に乗つて、途中で下りて久々子の方へと出て行く。久々子にはちよつとした海岸の一聚落である。そこを通抜けて、小さな二つの獨立山の間を向うに出ると、右には北海を見、左には久々子湖を見る。頗る好眺望である。狭い海峽をわたると、早崎の漁村である。いかにも北海でなければ見られないやうな標式的漁村である。これから笹田を経て二十町ほど行くと、今度見える湖水は日向湖である。久々子よりは餘程小さい。しかも矢張久々子湖と同じやうに細い海峽を以て海と通じてゐる。橋をわたると、日向の部落がその向うに見える。

そこから引返して、湖の東岸を傳つて、苧そといふ部落を経て、細い川があるところに出る。

そこにも橋がかゝつてゐる。これが久々子湖と水月湖とを連絡してゐるのである。こゝに舟があるから、そこから水月湖を向うにわたる。そして狭い迫戸を通つて三方湖の方へやつて来る。場合に由つては、伊良積か、成出かに上陸して見るのも面白いけれども、普通はそのまゝ三方湖を舟でわたつて、東の岸の鳥濱の方へと出て来るのが一番順路になつてゐる。

この四湖はさう大して面白いといふでもなく、水郷の感じに富んでゐるといふでもないけれども、その四つの湖水の三つまで連絡してゐる形が頗る面白い。湖としては水月湖が一番色彩に富んでゐると言つて好い。

鳥濱から三方までは二三町しかない。で、三方から汽車に乗る。もしひまがあつたら、山添に見えてゐる宇波西神社に詣で、見るのも好いであらうと思ふ。

## 安土城址

信長の築城した安土の古城址は、湖東の古蹟にして第一に指を屈しなくてはならないところであつた。私はある日そこを訪ねた。

私は安土を訪ふ前に、その停車場のすぐ近くにある佐々木神社と、それと一田圃隔てゝある淨嚴院とへ行つた。前者は式内の古社として名高く、後者は例の安土宗論のあつた寺として世に知られてゐた。それに、このあたりは、丘陵が起伏して、いかにも感じが好かつた。觀音寺山に雲の靡いてゐるのを見ても、六角佐々木の昔を思ひ出さずにはゐられないやうな氣がした。それから桑實寺にも行つた。そこの庭は感じが好かつた。

信長が、あそこで死ななかつたら、天下は凡て異つた形式を取つたであらう。秀吉もあゝ急に豪くはならなかつたらう。家康もあの二百年の覇府を開くことは出来なかつたらう。そしてこの安土は何んなに立派に何んなに繁華になつたか知れなかつたのに……こんなことを思ひながら私は靜かに車に揺れながら行つた。

町の場末のやうな人家が暫しつゞいて、それがなくなつたと思ふと、今度は畠を隔て、醫者の白いペンキ塗の家などが見え出した。右には安土山のこんもりした姿が、五重塔の水烟を綠樹の中にあらはしながら聳えてゐるのが指さゝれた。

（此處等は皆な賑かな町になるところだつたのだ……。それなのに、それなのに、それなのに……）さうした私の空想は容易に盡きやうとはしなかつた。

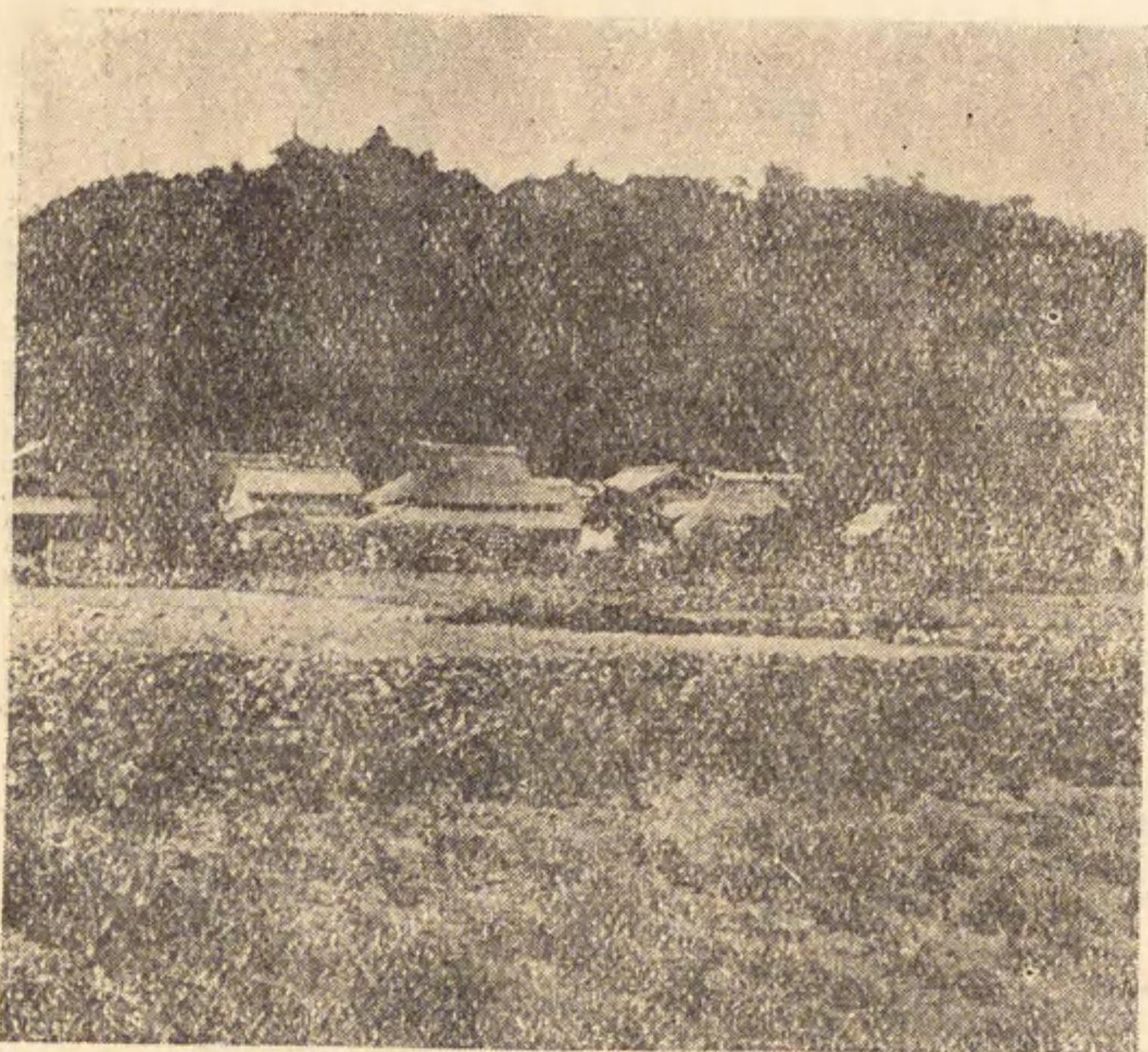
暫く行つたところで車夫は梶棒を下した。

『こゝからのほるのかね？』

『さうです』

車夫は車をそこに置いたまゝ私の先に立つた。

かなり急なほりであつた。塔のあるところまで行くのに私はすっかり汗をかいた。車夫の言ふところでは、昔はこの下のところに大手の門があつたので、さういふものはすべて焼けたが——明智左馬之助の攻略に由つて一度は奪はれ、それも三日も経たない中に、此處にもゐられなくなつて、火をかけて退いたために、すべて灰燼に歸して了つたのであるが、兎に角この塔ひとつだけでも此處に残つてゐるといふことは、不思議なこととしなければならなかつた。



安土山

「何でも明智の打擲されたのは、この塔のわきにあつた御殿だつたさうです」こんなことを車夫は言つた。

兎に角部下の諸將が金と力とを出して、一生懸命にこの山に城を築いた時のさまがはつきりと私の眼の前に浮び上つて來た。丹羽長秀の奉行振なども思ひ出されて來た。

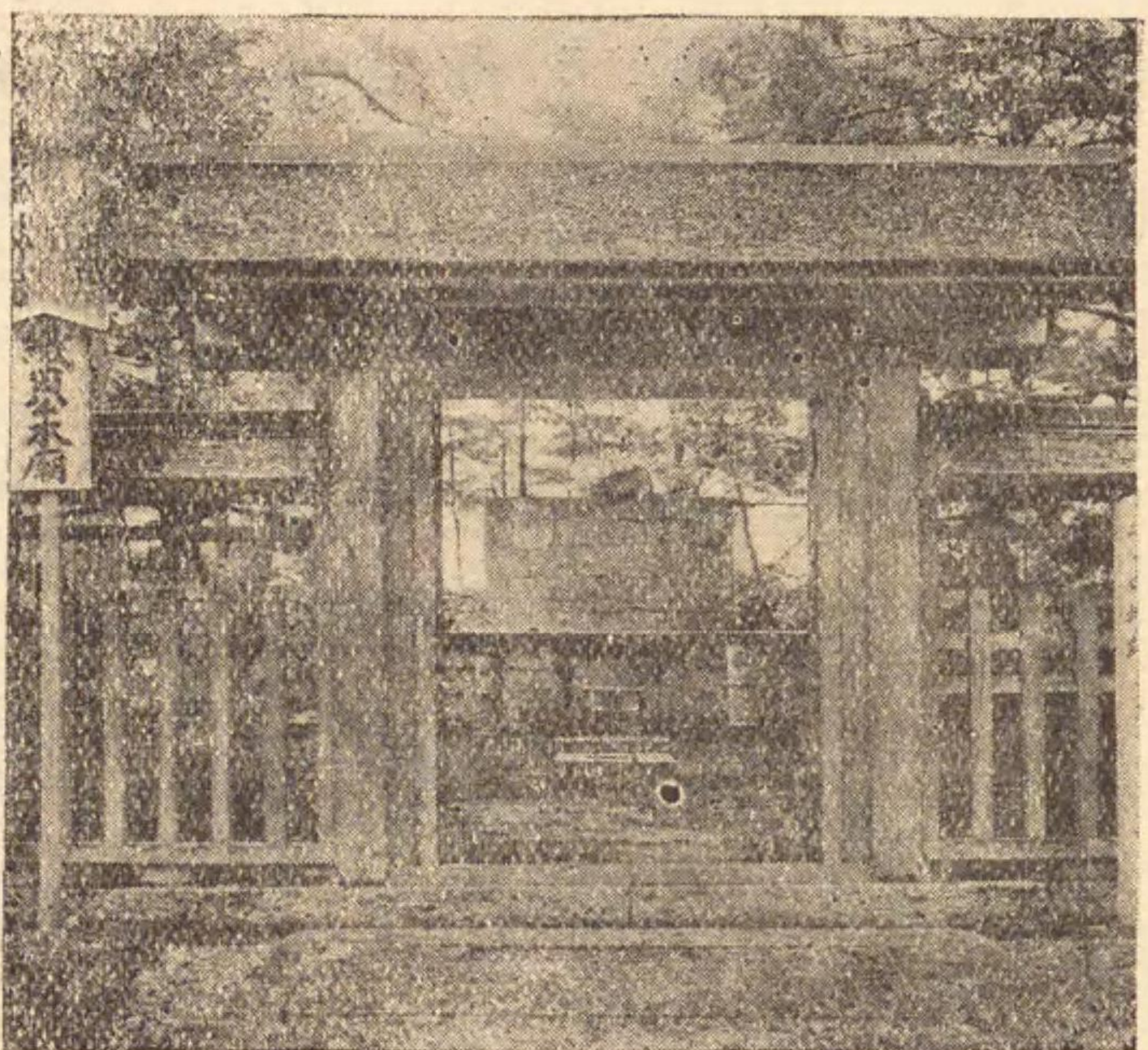
草藪の中に細い路がつゝいてゐて、それがうねうねと三丸趾、本丸趾の方へのほつてついで行つてゐるさまは、何とも言はれない感じを私に與へた。いかにも廢墟といふ感じがした。英雄の廢墟といふ感じがした。

明智左馬之助に焼かれた時に焼け落ちた瓦らしきものが、そこにも此處にも碎けて落ち散つてゐるのを私は見た。何でも此山城の配置は、近臣の邸宅を本丸に近く置き、段々下に諸將の邸を置くやうにしたらしく、今でもそれがはつきりとわかつた。この山城の唯一の飲料水であるといふ泉などもそこに残つてゐた。

本丸の一番上のところには、信長の墓があつた。いかにもかれに相應しい墓地だといふ氣がした。松だの雜木林だのがその周圍をめぐつた。

そこからすつと出て來て、登つて行つたところからは深く入込んだ入江が鏡のやうに澄んで、その向うに丘陵を隔て、濶い湖水の展開されてあるのがそれと想像された。私達はそこで暫く立盡した。

總見寺といふ寺は、すつと下りたところにあつ



安土山信長廟  
安土城址

た。臨濟派の禪宗で、安阿彌の作十一面觀音がその本尊であつた。二王門の額には、信長の祐筆の書いた遠景山下漫々總見寺の九字が題されてあつた。信長や信忠の像なども其處に藏されてある。

兎に角、英雄の跡のこれほど鮮かに偲ばれるところは他にないと言つても好いくらるであつた。それに、山に叢生した松や雜木が一種深い感慨をその中にこめてゐるやうな氣がした。秋はことに詩趣が饒ほかつた。草原の中に赤い實が綴られてあつたり、自然生の栗の實が熟して落ちてゐたり、萱原にさびしく夕日がさし込んでゐたりした。それに、此處等は松茸の多く出るところとしてきこえてゐた。

## 永源寺の紅葉

永源寺の紅葉は、東近江では今は指に屈せられる名所となつた。京阪地方からもわざわざ出かけて行くものは澤山にあつた。

こゝの紅葉の名高くなつたのは、文政年間に、江戸の詩人大窪詩佛が遊んだのがその始めてあつたといふことであつた。その後、大鹽平八郎が門人を拉してこゝに遊び、有名な古詩を賦していよく名高くなつた。藤井竹外なども行つて遊んだ。

落日層嵐影有無

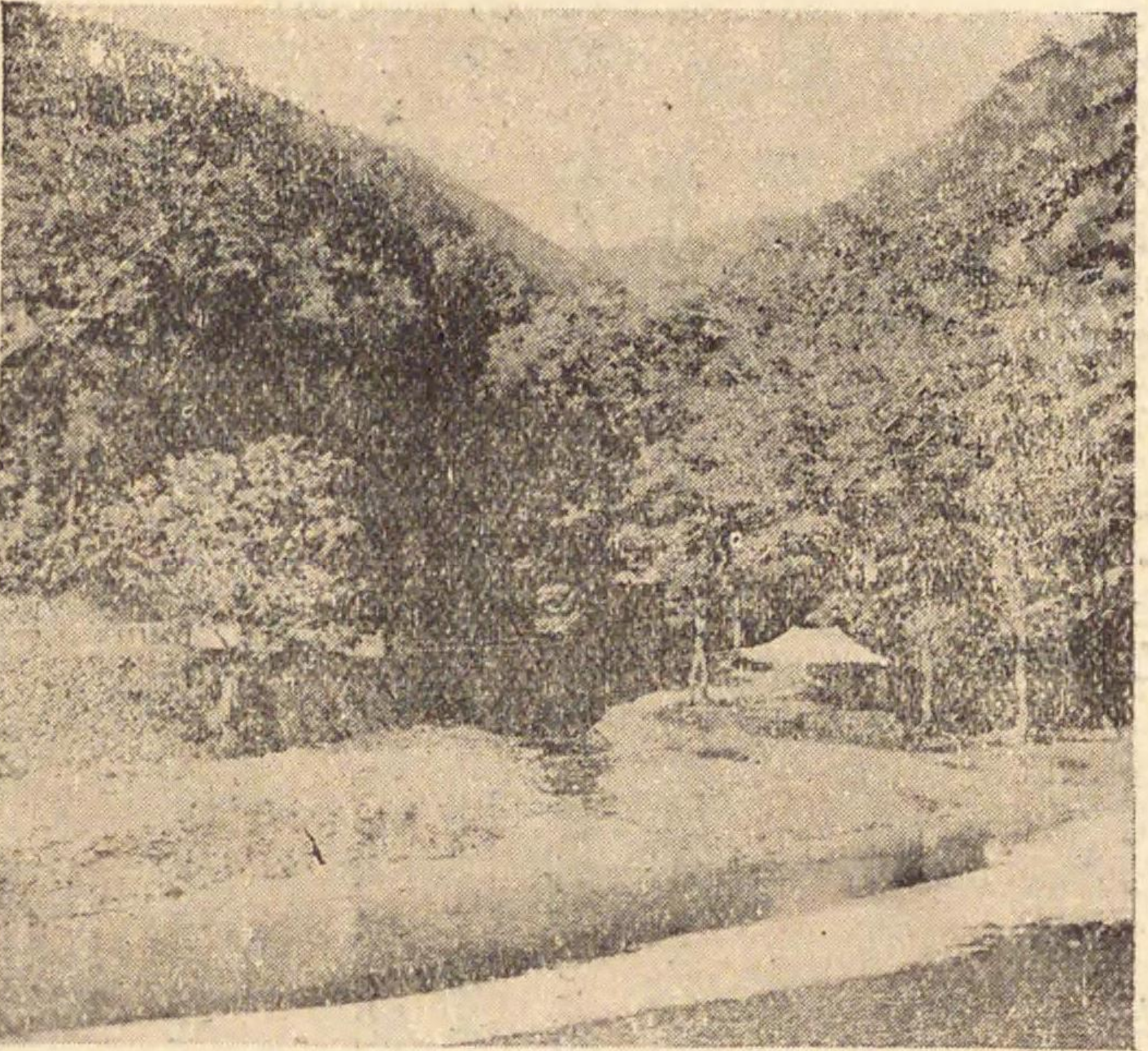
溪橋縱目送歸鳥

霜林假欠如舟葉

絕望寒流最畫器

この七絶はその時かれが寺の畫帖に書いたものであるといふことであつた。つまり紅葉青山水急流の詩句をそのまゝそこに展開したやうなところだと思へば間違はなかつた。





永源寺

これは寂室禪師の開基で、臨濟禪宗として由緒のある寺であつた。寂室は支那から歸國して後、各國を巡遊し、遂に此處に来て佐々木氏に頼り、こゝに一勝地を發見して、そしてその寺を構へたのであつた。信長が會て一度此處を焼いたことがあるので、今の寺觀はさう舊くはないけれども、それでも本堂、方丈、書院、衆寮、庫裡、經藏、勝山社、觀音堂が立派に構へられて、いかにも幽寂清淨の地であることが點頭かれた。丁度それは愛知川のの上流に面してゐて、その潺湲とした瀨に紅葉の映帶したさまは、繪も亦これに及ぶことが出来ないほどである。攝津の箕面、山城の高雄も、その感じに於て、またはその山水に於て、とても比べものにならなかつた。

そこに行くには、東海幹線の八幡驛から湖南鐵道に乗替へて、八日市驛に下車、それから三里を愛知川の流に沿つて山深く入つて行くのであるが、概して道路は平坦で、車も通ずれば、秋の紅葉の時には乗合自動車などもあつて、わけなくその溪の中に入つて行くことが出来た。この愛知川の谷は、こゝからずつと深く、それから二里ほど入つたところに、君ヶ畑など、いふ部落があつて、何でもそこは例の惟喬親王のあと、稱する山窩の根據であるといふことであつた。つまり山窩は此處を出立點として、全國の山の中にジプシイに似た生活を送つてゐるので、一年乃至二年目に時を期して、此處に集つて來ることがあるといふことである。兎に角、これから奥は山深く、雲遠く、水鳴り谷膺へて、容易にその神祕を探ることが出来ないといふ。

## 長命寺觀音

奥島にある長命寺も、湖の東岸では見遁すことの出来ない勝地の一つであらねばならなかつた。そこに行くには、八幡驛で下車、眞直に北西に三十町ほど行つて、八幡の町に入る。眞直にそれを突當ると、豊臣秀次のゐた八幡城址があつて、今でもそこに八幡社が祀られてある。毎年四月の祭禮には、卯の夜踊といふ賑かな催しがある。またそこには西村太郎左衛門の奉納した安南船の額がある。

陸を行けば、その八幡山の東の山裾に添ふやうにして、一里ぐらゐるで、その奥の島にわたつて行くことが出来たが、これよりも、舟で町から出て行く方が便利である。何でも八幡山のすぐ下のところから舟が出ると覺えてゐる。

舟は堀割のやうなところを通つて、四十分ほどで、ひろい入江のやうなところへと出て行く。そこを越えると、長命寺はすぐそこであつた。

それは入江がすつと琵琶湖に向つて開けてゐるやうなところであつた。舟の着いたところに

は、人家がごたくと軒を並べて、ちよつと寺の門前町のやうな形を成してゐた。西國三十一番の札所で、參詣するものが常に陸續として群を成してゐる。

表阪をのほる。甚だ峻しい。石段を數へて見るのに、八百八階あつた。上には觀音堂がある。その境内は頗ぶる眺望に富んでゐる。三井や石山などの比ではなかつた。紀伊の和歌の浦の紀三井寺に比するものもあるが、それとてもこれに及ぶべくもなかつた。

裏阪は、表阪に比べると非常に樂であつた。一町ほど行つたところに華表があり、それを過ぎて四町ほどで頂上に達した。

この島から湖上十八町にある沖の島にわたつて



近江八幡町

長命寺觀音

見るのも面白い行楽の一つであつた。

## 荒神山

湖東の名勝としては、この他に荒神山を数へなければならなかつた。それは湖に近く、周圍に一物の遮るものもないので、眺望の地點としては、長命寺も、沖の島も、彦根城址も到底これに比ぶべくもなかつた。

此處に行くには、幹線の川瀬驛で下車するのが一番近かつた。驛を出て眞直に西北に向つて行くと、十五町でその山の裾に達することが出来た。

その山の上には、奥山寺と云ふのがあるが、それは僧行基が四十九院を建立した時にそこを奥院としたところであるが、今は何方かと言へば衰へてゐるけれども、靜かで、心をすますのには好いところであつた。この山は丁度、西岸の明神岬と湖光相對して、右に近く多景島を望み、そのまた右に沖の白石を指してゐる。いかにも風光のすぐれたところで、容易にそこを立去ることが出来ないやうなところであつた。

## 多賀神社

多賀は近江では有名な由緒のある古社であつた。延喜式には多何神社といひ、また日の少宮と言つてゐる。古事記にも『伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也』と言つてゐる。

『あそこは何う思ひました?』

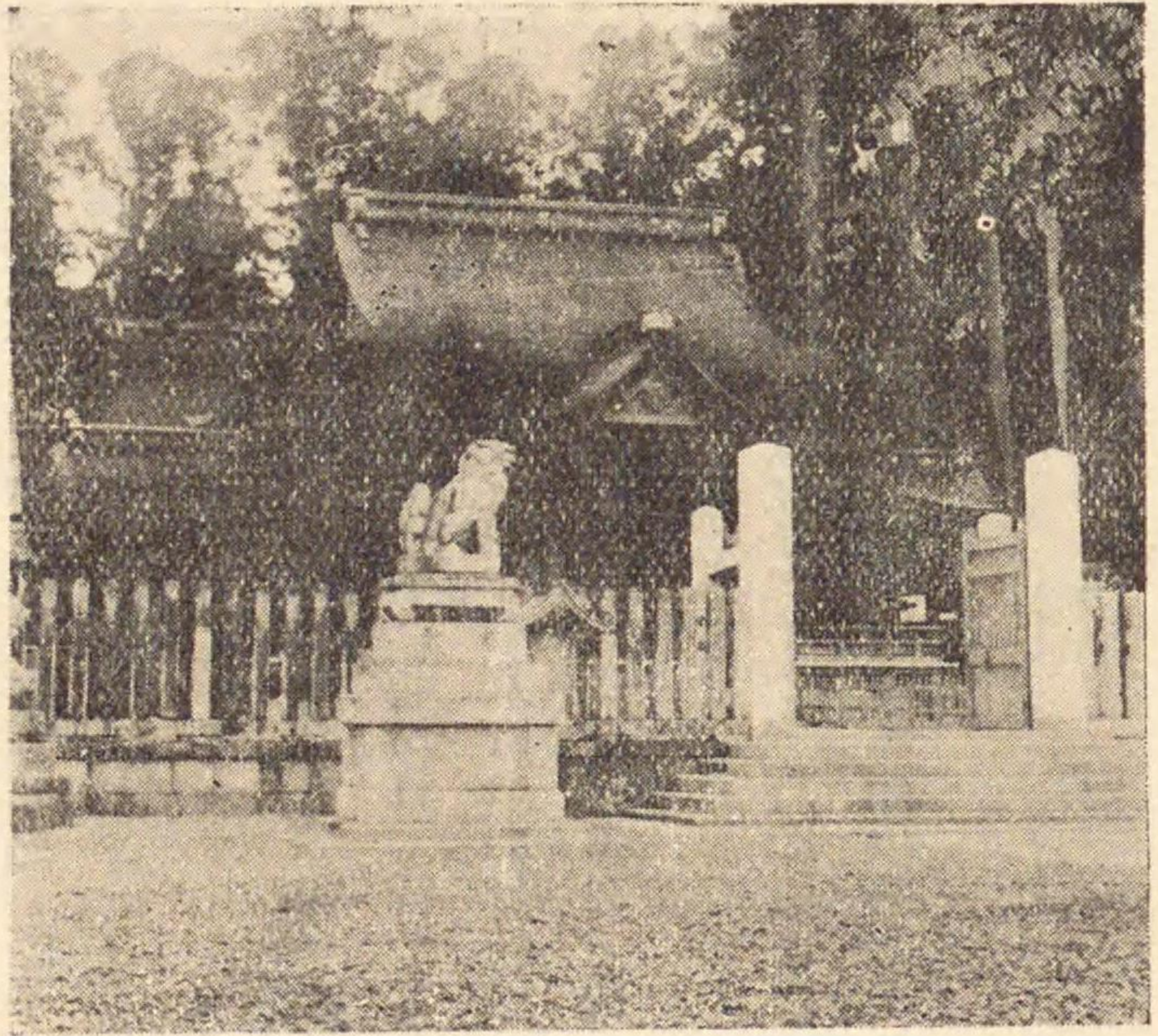
かうS君が訊いた。

『好いですな。いかにも神々しい社ですな』

『近江では、あそこは先づ行つて見なければならぬところですがね。あそこが延命の神——あそこにお詣りすれば、命がのびるといふのが特色ですな?』

『さつですツてね』

『何しろあそこに薙が名物になつてゐる。二十延びるといふのが名物になつてゐるんですからな。稽なもんですな』S君は土地の人だけにかう言つて笑つて、『何しろ、あそこには實例があるんだから、そら、何とか言ふ奈良の大佛を再建した人もあそこに祈つて、二十年生延びてゐる



多賀神社

し、秀吉もあそこに祈つて、その母親の命を三年だか延したんですからね……。それからあそこは非常に参詣が多くなつたといふことです』

『あそこで見た小さな舞は何とも言はれませんでしたよ……。雨が降つてゐる、その中にその鈴を持つた娘が舞うてゐるのがくつきりと見える……。くる人くる人立留つてそれを見てゐるけれども、ぢき行つて了ふ。劍の舞とか何とか言ふんださうですな?』

『あゝあれを見せましたか。矢張、縣知事などと一緒に رفتたからですね。あれは容易には見られない舞ですよ』

私はそのことを思ひ出さずにはゐられなかつた。私達は前の夜を彦根の樂々園に泊り、あくる朝

雨を浸して、近江線の汽車でそこへと行つた。丁度六月の初旬で、田植は既に終つて、緑が一面に野に靡いてゐた。汽車の烟は白く固つてはその緑の上に落ちた。高宮驛に來た時、『何うです、大華表を見て行きませんか』と土地の有志者が誘ひに來たけれども、雨に怯ぢて誰も行つて見やうとするものはなかつた。『は、さうですか、その一の華表がこの高宮にあるんですか？』そしてそこから二十町か三十町この雨に歩くのは大變だ……』など、私達の一人は言つた。高宮から多賀へと汽車はわかれて行つてゐた。やがて多賀に來た。私達はそこで傘を借りて、門前町のやうなところを七八町歩いて行つた。雨は降り頻つた。

多賀の社は、この附近に多く見ることの出來ないほど立派な社殿であつた。私達はそこに行つて参拜した。

それからその劔の舞を見て、更に奥に行つていろいろ古文書などを見た。信長や秀吉の願文などは澤山に澤山にあつた。私達はそこで茶を饗せられて、再び停車場の方へと戻つて來た。

## 彦根城址

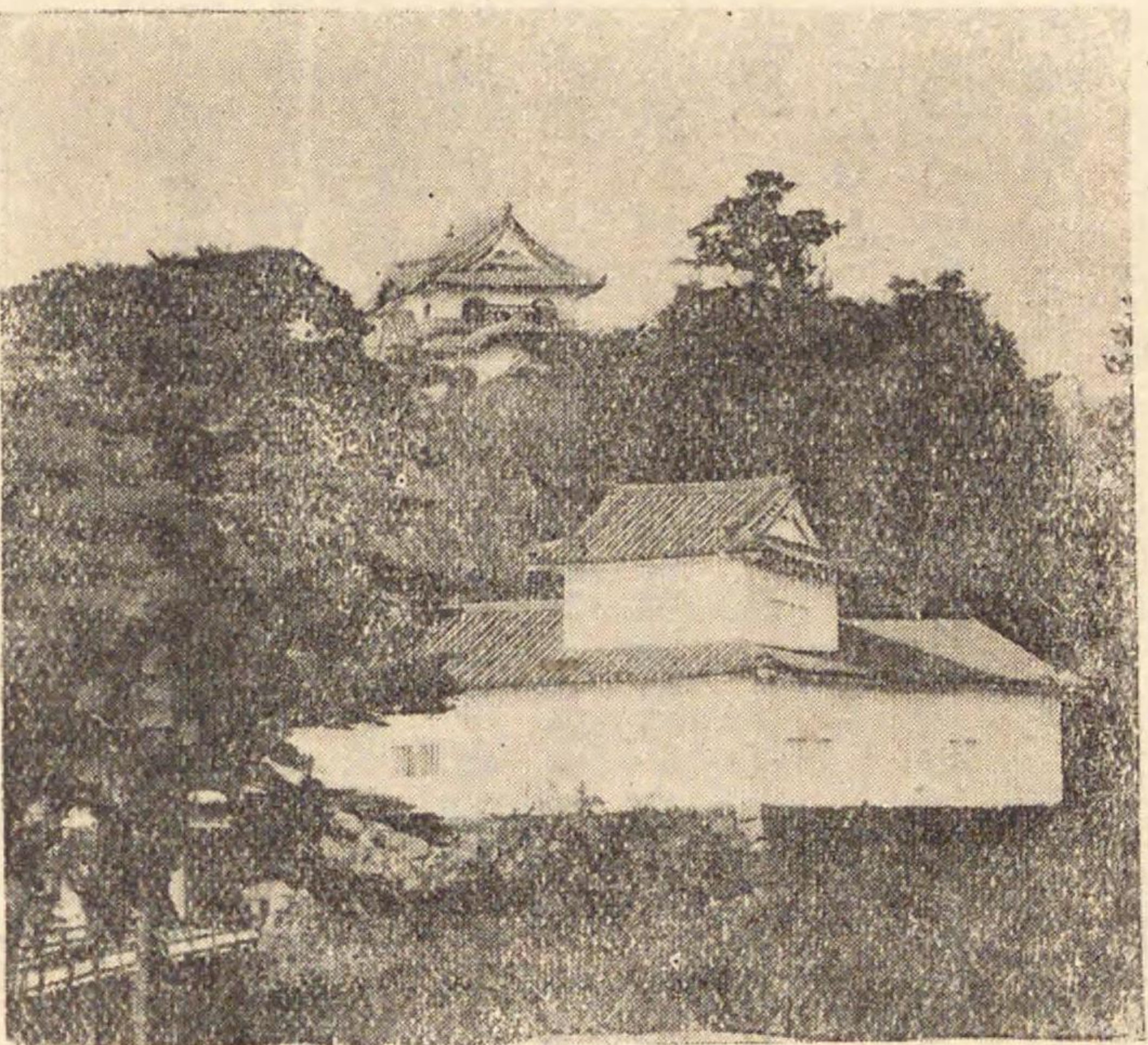
『さうだね、彦根といふ町は、鳥渡特色があるね。一度下りて見ても決して失望はしないね。あの直弼卿の事件のためか、それとも他に原因があるのか、町が三四十年前の光景を呈してゐるのが奇蹟のやうな氣がするね。さうさね、あそこでは、今の文化などは見たくも見られな。いね。何しろあの城がそのまゝに残つてゐる、昔のまゝに残つてゐるといふことが、一層さういふ感じを深くさせるのかも知れないけどもね……。まア、行つて見給へ、そこでは封建時代の空氣が到るところに巴渦を卷いて残つてゐるから。それに士族屋敷だつて、まだちやんとして残つてゐるよ。僕等の祖父のやうな老人がそこにもこゝにもゐるからね』

『そんなところかね？彦根は？』

『誰だつて、あそこに行けば、意外に思ふね』

『それで、その天守閣のあるところは、常に眺めが好いつて言ふぢやないか？』

『ちよつと好いね。しかし、荒神山や長命寺山に比べては、湖水の眺めはぐつと落ちるね。た



彦根城

だし、そこから竹生島は見えるがね……」  
『何でも石田のゐた佐和山城址と相對してゐる形になつてゐるんだつてね？』

『さうだ……よく知つてゐるね。つまりあそこは中仙道を扼してゐる形になつてゐるんだね。あそこで踏張れば一戦出來るといふ要害のところなんだと。そこから中仙道の鳥居本の驛を通つてずつと山の中に入つて行つてゐるさまがよく見えるよ。あそこから磨針峠へとかゝつて行くのだからね。』

『佐和山城址は何んなになつてゐるね？』

『僕はそつちには行つて見ないから、よく知らないけれども、彦根の城址の上から見ると、前に山があつてね。そこが佐和山だといふんだ。何があるかときいたら何でも墓石が一つか二つころがつ

てゐるはかりで何にもないといふことだ。徳川はすつかりあの城址を潰して了つたらしいからね。佐和山の佐の字も言はせなかつたらしいからね』

『敗けたものは、何うしてもさういふことになるね』

『兎に角、あそこに立つと、感慨無量といふ氣がするよ。』

『さうだらうね』

『あそこで僕はかういふ歌を詠んだ……』

年を経て

蘆の葉しけり

水草生ひ

蛙ほたるの

濠となりなき

『うむ——それは石田を詠んだんぢやないね？』

『さうさ、濠をよんだんさ。僕の通つた時は、丁度六月の雨の降る日だね。あの城の濠に眞菰や蘆などが茂つて、蛙がガアガアないてゐる。いかにも昔の城址の感じがして何とも言はれな

かつたからね。それから僕等は車を並べて、工場だの何だのある通りをずっと向うまで行つて、井伊家の別邸のやうなところで、いろいろな寶物を見せて貰つたよ。井伊の赤隊と言はれたその具足なども見せて貰つたよ』

『それはよかつた……』

『それに、その夜は城のすぐ下にある樂々園に泊つたが、あそこが非常に好いね。昔の殿様の庭園だけあつて、容易にあゝいふ感じは得られないやうなところだよ。琵琶湖の湖水がずっとあそこまで入つて來てゐるからね。蘆荻と蛙と螢、實際、あそこの一夜は忘れられないよ』

## 米原附近

米原は汽車のためにひらけたところで、昔はさびしいところであつた。従つて今でも町はさう大して立派ではなかつた。この附近では、湖の岸の方へ十町ほど行つたところに磯といふところがあるが、そこは昔から湖東の一勝地としてきこえてゐるところであつた。そこはちよつと入江を成してゐて、東西十五町、南北三十町ほどのひろさを持つてゐた。古歌に磯の松原など、言はれてゐたりするところであつた。

彦根の方から行けば、町外れの松原から七八町を歩いて行かなければならなかつた。そこにある磯山の上から見ると、竹生島も多景島もずつと一目のもとにあつまつて見え、遠く比良から比叡を望んださまは何とも言はれぬほど見事であるといふ。これから五六町北に行つたところに、筑摩神社——女が男を改へれば、改へただけ鍋の數を頭にかぶつて參詣するといふ筑摩鍋の古事のある社があつた。今でも祭禮にその形を存して、毎年四月八日には八歳から十二才までの女子が紙で作つた鍋を被き、狩衣を着て、列をなして社にお参りする儀式がある。

## 長濱城址

長濱では、伊吹山が實によく見えた。それは伊吹山の町と言つても好いくらゐるものであつた。そればかりではなかつた。琵琶湖もこのあたりから見たのは、大津あたりから見たのよりは更にすぐれてるやうな氣がした。

此町は織物などが盛で、町の通りが狭く、家のつくりが雪の多いために北國風であるのに拘らず、何處となく活氣があたりに充滿してゐた。こゝでは町の東の外れにある八幡神社と、町の中ほどにある智積院と、それからもう一つ秀吉の經營した長濱城址とであつた。八幡は坂田の八幡と呼ばれて、延久元年源義家の勸請したもの、後三條天皇の勅願所となつたことのある由緒ある古祠である。

長濱の城址は、今は公園になつてゐて、他の奇はなかつた。しかしそこからは琵琶湖と伊吹山とがはつきり手に取るやうに見えた。それに、秀吉が此の平野の城にゐて北國を牽制したさまなどが、はつきりと私の胸に浮び上つて來た。私はそこでかうした詩をつくつた。

靜かに、微かに

さして來る日影、

昔の濠の残つた水に

捨てられた舟に、

蘆の葉に。

その光線は

細かに、その水の底にさし

葉の中にさし、

飛んで來た

とんほの羽にさした。

私はその光線を

じつと見詰めた。



それが、私に  
昔を、  
遠い昔を、  
私に展けて見せた。

靜かに、

とんほは飛んで行つた。

さゝやかな風に、

蘆の葉は、

日影と共に動く。

## 小谷山城址

これから北に向つて行く汽車の感じは、何とも言はれず氣持が好かつた。左に琵琶湖とそれを遶つた山とが見える。右には美濃越前に跨つた高い高い山がある。冬など通ると、雪がキラキラ光つて、丸で金屬性の八角稜を見るやうな氣のする山などもあつた。

姉川がすぐ來た。橋をわたる音と共に靜かに川の流れてゐるのが見えた。これが例の織田信長と淺井長政と戦つた古戰場であつた。家康が先陣をかけて功名をあらはしたことなどが私の胸に浮んで來た。

この次ぎの停車場は、高槻であつたが、そこに達する前に、レイルの右に添つて一つの獨立した山を誰も見落さなかつた。それは他でもない、淺井攻めの時に秀吉の陣を布いた虎御前山であつた。傳説では虎姫といふ美しい女子がセ、ラキ長者に嫁して妊娠して小蛇を十五疋生んだので、恥ぢて自から淵に投じて死んだので、それでその名に呼はれたといふことであつた。高槻驛で下車。それから右に入る。路はひとり手に、淺井長政の古城址のある小谷山へと入つて

行つた。

そこには滅多に人が入つては行かないさうであるけれども、その構へられた城の形は、今でもはつきりと残つてゐて、そゝろに弔客の心を惹がすには置かなかつた。大手の門のあつたといふところも、物見櫓のあつたところも、猶ほそれから奥に入つて、當時唯一の水の手であつた泉なども依然として潺々として流れ出してゐるのを見た。

山の半は松で蔽はれて、それからそれへと日影の美しく洩れる路を靜かに歩いて行くやうになつてゐる。秋は松茸なども澤山に出來た。安土よりも感じがさびしかつた。それに、この城址から見わたした長濱から琵琶湖にかけての眺望は、容易に他にその類を得ることの出來ないものであつた。

## 賤ヶ岳

賤ヶ岳の古戰場へ行くのには、木の本驛で下りる。町へ出てそれに北に抜けて、また西にレイルを越して、黒田といふ部落に入る。そしてそこから大澤に出る。

例の中川清秀の陣した大岩山は、すぐその前にある。登路五六町、かなりに峻しい。そこに中川清秀の墓がある。何でもその子孫が新たに修めたもので、かなり奇麗になつてゐる。その少し手前には寺がある。周圍はすべて雑木林で取圍まれてある。

つまり此處は大岩山の陣地のあつたところだが、佐久間盛政はこれを略取して、すぐ下に下らうとしたが、本軍がつかないの躊躇してゐたのである。これから山の脊のやうになつてゐるところを十五六町ほど南に向つて歩くと、やがて木の本の停車場から眞直に此方にのほつて來る賤ヶ岳への本路と合した。こゝから西に五六町行つたところが、それが即ち賤ヶ岳の古戰場で、今はそこに碑が立つて、當時の七本槍の一人加藤嘉明の遠裔である水口侯の儒臣中村確堂の文が刻されてある。

そこからは余吾湖がすぐ下に小さく見えてゐた。そしてその一方には深く入り込んで來てゐる琵琶湖が手に取るやうに眺められた。湖に添つた山の深く靡きわたつてゐるさまも、人の心を惹かずには置かなかつた。

こゝから、琵琶湖畔の鹽津に行くのには、少し下りて飯浦といふところへと出て行く。この間が十二三町、それからまた急な阪にかゝる。これが六七町、峠からは深く入り込んで來てゐる湖水がそれと指さされて、立盡さずにはゐられないやうなところであつた。それから十二三町ひた下りに下つたところに鹽津の市街があつた。

余吾湖は琵琶湖の残水湖だといふことだが、ちよつと見ては、何うしてもさうは思はれないほどそれほど丘陵に圍まれてゐた。路は右にも左にもあつた。中でも川並から八戸の方へ出て行く路は平坦であつた。

## 余 吾 湖

琵琶湖を傍に、また後にして、雪の山巒の中に入つて行く感じはすぐれて好かつた。淺井長政の亡びた小谷山、秀吉が篝火を一面に焼かせて敵軍の膽を奪つて虎御前山、木の本の町の山裾に位置してゐる傍を通つて、次第に賤ヶ岳の残雪に近寄つて行くあたりは、當年の勝家對秀吉の戰略を思はせずには置かない。佐久間盛政の壯舉は偉とするに足るけれども、そこから平野に突出して行くだけの兵力を持つてゐなかつたことが残念である。一度押しして見たが、その押しが十分にきかなかつたために、今度は却つて敵から押される形になつて、遂に總退却の基をつくつて了つた。あの時、勝家の本軍が盛政の迂回した路を幕地に出て行けば、もつと面白い戦が戦はれたであらうと思ふ。

勝家の軍があこの山間の路を一本縦隊——即ち鰻縦隊で出て來たのも餘りすぐれた戰略と言ふことは出來ない。いくら大兵を擁してゐても、あれでは何の役にも立たないのである。曾て文

展で、小山榮達氏の描いたその鰻縦隊の畫を見たことがあるが、成ほどあそこらを通ると、あゝした繪が書きたくなるであらうと思はれた。余吾湖の水が半は雪に埋められてゐるのも私に繪を思はせた。

余吾湖は面積一方里三分、東西八町五十間、南北十七町、周圍一里三十町、水の深さは三十尋に達してゐる。これに行くのには、大岩山から江戸の方に出て行つても好いし、賤ヶ岳から湖の西岸を掠めて川並に出るのも好いが、汽車からの順路は、中の郷驛で下りて、西の山裾をぐるりと八戸から川並に出て行くのが、一番好いやうであつた。此處には何うした事か、菅原道眞についての傳説が非常に多くある。道眞は此處に生れたとも言はれ、ば、此處で生れたか、れが才能があるがために菅原氏に養はれたのだとも言はれてゐる。無論、荒誕取るに足りないものであるけれども、或は道眞が此處に來たことがあるとか、その血統のものがこゝに隠れたとかいふ間接な理由のためにさうした説が起つたのかも知れない。今でも菅公を祀つた神社がその湖畔にある筈である。

## 毛受勝助の墓

北國軍の大崩れの時に際して、柴田勝家のために一身を犠牲に供し、自から勝家と名取つて奮戦して死んだ毛受勝助めんじゆかつすけのことは、太閤記を讀むものの皆なよく諳んじて知つてゐるところのものである。ある人に言はせると、それは大塔宮の村上義光に於けると同じく、その忠烈義魂は大に表彰するに足るといふことである。勝助は義に厚く母に孝で、十二の時、柴田勝家に仕へて小姓頭となり、その主君に忠實なる、恰も影の身に從ふがごとくであつたといふ。太閤記に書いてあるところでは、かれはいよく主君の危いを見て、何うか今の中に逃れ去つて下さい。臣がこれに代つて君となつて死にませうと言つて、そしてその金幣を乞うて馬に跨つて敵に向つたといふことである。その墓が今片岡村字池原にあるのは、頗るめづらしいと言はなければならぬ。そこに行くには、中の郷驛で下車して、右に北國街道に出て、五六町北して東野に行つて、それからレイルを越して左に入る。また二三町行つて、天神前から右にすつと入つて行くと、池原の部落に達する。そこできけばすぐわかる。立派な碑が立てられてある。

中の郷驛から十五六町と思へば間違はない。

## 丹 生 谷

丹生谷にふたにといふのは、北國街道と山脈を一つ東に隔て、深く長く南北に穿たれてゐる溪谷である。つまり高時川の水が紆餘曲折して、深い山の中を流れ落ちて來てゐるところである。この溪谷のことは滅多に人の口に上つたのをきいたことがないが、その中には桃源のやうな村落があつたり、淙々とした小さな瀑が落ちてゐたり、昔榮えて今は衰へた大きな寺があつたりして、北近江では、ちよつと面白いところの一つに指を折られてゐる。

そこには洞壽院といふ寺がある。その谷の一集落菅並の北山にある。鹽谷山護國禪寺と言つて、曹洞宗の中本山として、昔は近江半國の僧綱所であつた。何でも應永年間に天閣和尚が鹽津祝山から此處に移つたのだといふことであつた。昔山鹽の出たあとが今でも残つてゐるといふ。

この丹生谷に入るには、中の郷驛から東に入る。峠は二百三米である。峻しくも何ともない。それをすつと下に下りると下丹生で、竹林の下に高時川が潺湲として流れてゐる。これか

ら上丹生まで十町、その部落を通り抜けて、今度は川を東にわたる。いかにも山の中に來たやうな心持がする。川について折れ曲つて、一里ほどで、その奥に蕭條とした山村の溪に沈み崖に架してゐるのを見る。それが菅並である。村に入る前で、川をまた西側にわたる。それを通り越すと、妙理川が西から落ちて來てゐる。妙理瀧といふのがその附近にある。

洞壽院はそこから、十町ほど北山に入つたところにある。今は衰へてゐるので、寺もさう大して立派と言ふわけには行かないけれども、それでもおのづから別天地を成してゐて、ひとり手に心の澄んで行くやうなところである。

これからは路は非常にわるくなるけれども、小原、田戸、鷺見、尾羽根、針川、半明などいふ村に添つて、この丹生谷を上つて行くのも、決して興味のないことではなかつた。菅並から六里ほどで北國街道の中の河内に出て來ることが出來た。

## 雪の敦賀港

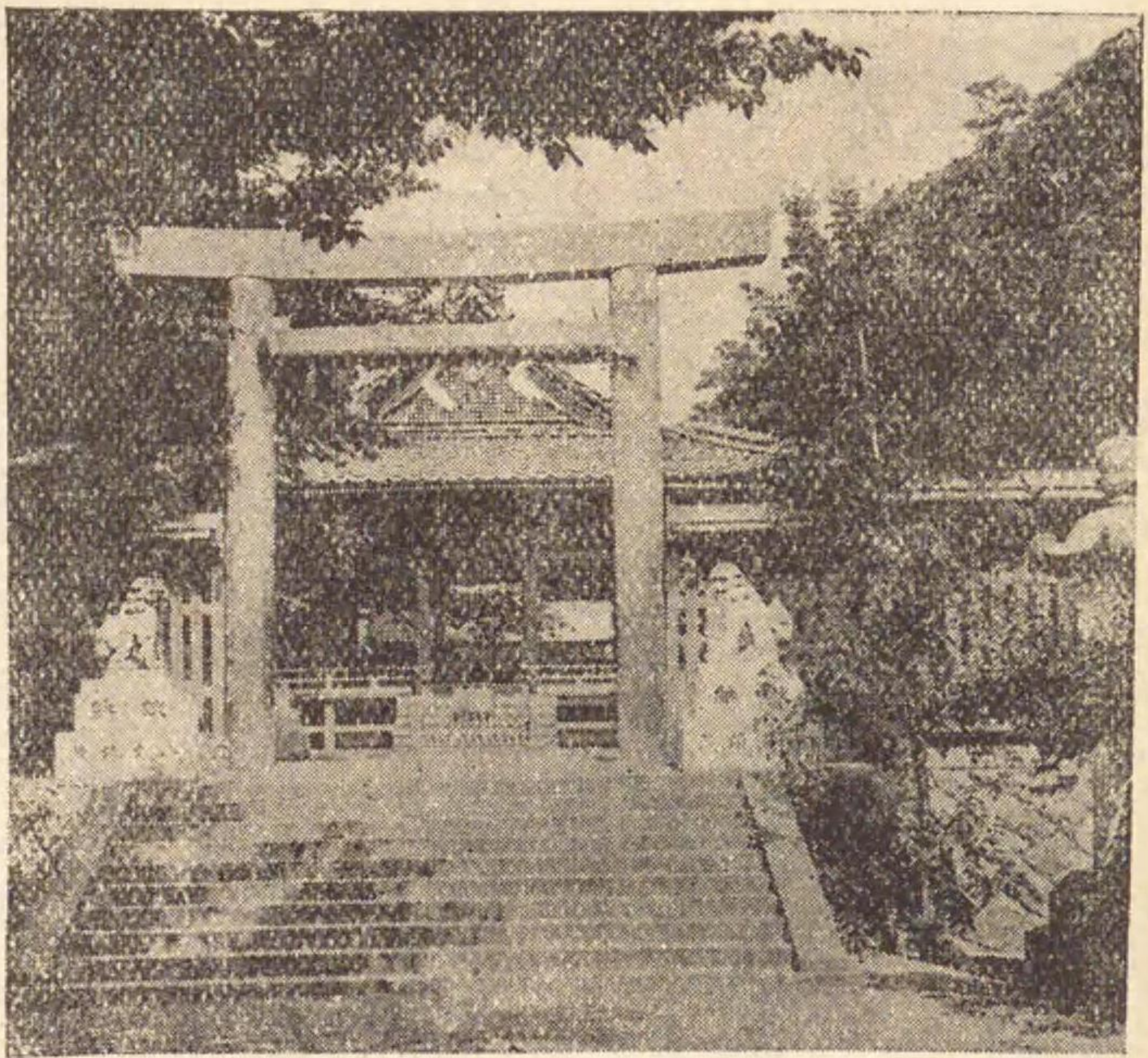
北陸の雪は、米原から入つて行つた感じが先づ旅客の心を惹く。「ここから寒い雪の中に入つて行くんだからな」こんなことを乗客が言つてゐるのを耳にしたが、實際、誰でもさうした氣がするに違ひない。琵琶湖の北岸を繞つた山巒には既に雪が白く、賤ヶ岳の古戦場のあるあたりには、髪が深く細かく入り込んで、そして斑らに白くなつてゐる。余吾湖の凍つた形も面白い。殊に汽車のレイルに添つた北國街道——勝家が鰻縦隊となつて此方へ出て來た街道が、行くまゝに次第に雪が深く、始めは半は泥濘半は堆雪であつたものが段々人跡も認められないほどに深く埋められて了つて、山に凭つた村落がさびしさうに點綴されてゐるさまは、繪でも見るやうに感じられた。

一度通り越してまた戻つて入つて行くやうな万根の小さな山の中の停車場、これから汽車はトンネルの中に入つて行つて、例の椽木の一支脈を穿つて、次第に敦賀平野へと出て行くのであるが、このあたりはかなりに雪が深く、陸軍の騎兵隊がこれを越したさまや、新田義貞の軍が

湖西からこの峠を北國へ入つて来たさまなどが脈々として私の胸を往來した。

敦賀に入ると、感じは全く一變した。そこでは地上に雪を見ることは出来なかつたが、四面の山巒は全く白堊を塗つたやうに白く、そこから吹きおろして来る風は刺すやうに冷めたかつた。夏ではそれとはつきりわからいであらうが、敦賀灣頭に聳えてゐる榮螺ヶ岳が、雪を被つてさながら榮螺を伏せたやうになつて見えるのも面白かつた。停車場から寒風に吹かれて入つて行くやうな長い路、大きな老松の徒らに風に鳴つてゐる氣比神宮、それから町に入ると、庇の斜めに出た家屋は一列に連つて、外形はさびしく寒いけれども、内は暖かである北國の人達の火燵の生活が私には想像された。火燵板の上の盃盤、それを取卷いた美しい妓達、さうした興も、決してわるくはなかつた。殊に羨しいのは生魚が多く、到るところに小鯛の赤い澄刺としたのがあり、長い足をした大きな蟹があり、烏賊の生づくりがあり、更らに見て行くと、いかなる家の軒にも、むしかれひを串につらねてさして日に干してゐないものはないことであつた。北國の冬の酒の旨さなどを思ひながら私は歩いた。

金崎宮の上から眺めた敦賀の港は、明るい美しい繪のやうに感じを私に與へた。十年前に來た時とは、ウラジホストツクへの航路の關門となつたため、大分、町の様子なども變つたところ



金ヶ崎宮  
雪の敦賀港

ろもあつたけれども、理髮店や小間物屋の看板をロシア語で書いてあるのなどめづらしい様な氣がしたが、港はさう大して開けたといふ感じも私には起らなかつた。それも冬で、碇泊してゐる汽船の數も少なかつたためであらう。白い赤いペンキ塗の汽船に、日が斜に明るく照つて、碧い海に鷗が二三飛んでゐるのも靜かに、南朝の悲劇が曾て此處に演ぜられたと思ふにすら、餘り縁遠いやうな氣が私にはした。

祠の後苑からずつと私は裏に廻つて、港から外洋に通ずる海の澎湃としたさまを長い間立つて眺めた。斜に欹つた一帆の白いのもさびしかつた。

敦賀の金崎宮の裏手で、港や、港外にひろがつ

てゐる海や、黄い赤いペンキ色に塗られて汽船や、成ほど榮螺のやうだと思はれる榮螺ヶ岳や、さうしたものを見てゐると、大きい方の男の兒は、

『あれは何だらう？ 何の烟だらう？』

かう言つて指した。

成程、見ると、白い黄い烟がもくもくと風に靡いて町の瓦葺の上に長く長く曳いてゐる。海岸近くから起つて、町を蔽つて、氣比神宮の杜あたりまで及んでゐる。しかし私は何とも思はなかつた。

『工場の烟だらう。』

唯、かうきめて、暫くしてからそこを下りて來た。

と、華表の近所まで來ると、人が五六人慌て、此方に登つて來るのに逢つた。

『火事だよ。父さん。あれは——』

かう男の兒は言つた。

『さうだな。火事だつたんだな、矢張。ぢやもう少し見てゐりや好かつた』かう私は言ひながら、しかも再び戻つて見る氣にもなれなかつた。それに、一時間の時間の間に、停車場まで行

き、好いところがあつたから、晝飯を食はなければならなかつた。

町に入つて來ると、いよく火事だといふことが明かになつた。家々から人が皆な出て來た。土さんも出て來れば、娘も出て來た。姉が小さな妹を負つてそゝくさと通りへと出て來たりした。半鐘の音がところ／＼できこえた。

少し此方に來て、消防の唧筒の置いてあるところでは、火事装束した人達が一生懸命に唧筒を引出さうとしてゐるのを見た。

『これぢや、とても飯などを食はせて呉れさうな家はないな。』

こんなことを言ひながら、私達は旅客の暢氣さを發揮して、騒々しい町の通を靜かに歩いた。

何の家からも、皆な娘や上さんなどが出て見てゐた。平生ではその影をさへ見ることの出来ない深窓の美しい娘さへも……。『お蔭で、敦賀の娘を皆な見せて貰つたやうなもんだな。』こんな戯談を言ひながら、私達は停車場前に來て、そして漸く遅い晝飯に有附いた。

敦賀では、一番先に氣比神宮に行くのが順路だ。それは停車場前の廣場を右にと取つて行け



ば、ひとり手にその所に出る。

いかにも古い神々しい社である。そこでは仲哀天皇時代のことが脈々として思ひ出されて来た。

こゝから町に出る。金崎宮まで二十町ぐらゐと思へば間違はない。

金崎から松原公園へ行くのには、町を此方の隅から向うの隅に行くやうなものだ。しかしそれは一度は歩いて見ても好い。何故と言へば、それを歩きさへすれば、敦賀の町の何んな町であるか、すつかりよく分るからである。それに松原公園も非常にすぐれた處である。松が見事である。松と海と相掩映した形も他に容易に發見することの出来ないくらゐ美しいところである。福岡の千代の松原よりも、此方の方が感じがすぐれてゐる。それに、こゝは水戸の浪士武田耕雲齋の一行の自刃したところで、近代史を知る上に於ても是非一度は見なければならぬところである。

敦賀が一方に金ヶ崎に接し、一方にこの松原公園を持つてゐるといふことは、旅客に一種深い感慨を持たせずには置かなかつた。

敦賀からは、若狭の小濱に行く汽車が西に向つてわかれてゐる。前に書いた若狭四湖や、三

方や、小濱や、外面そとや、大門小門には、それに乗つて行くのである。小濱まで行つて、そこから自動車で、高濱を経て、舞鶴から天橋立へ行くのも、さう大して面倒な道程ではなかつた。

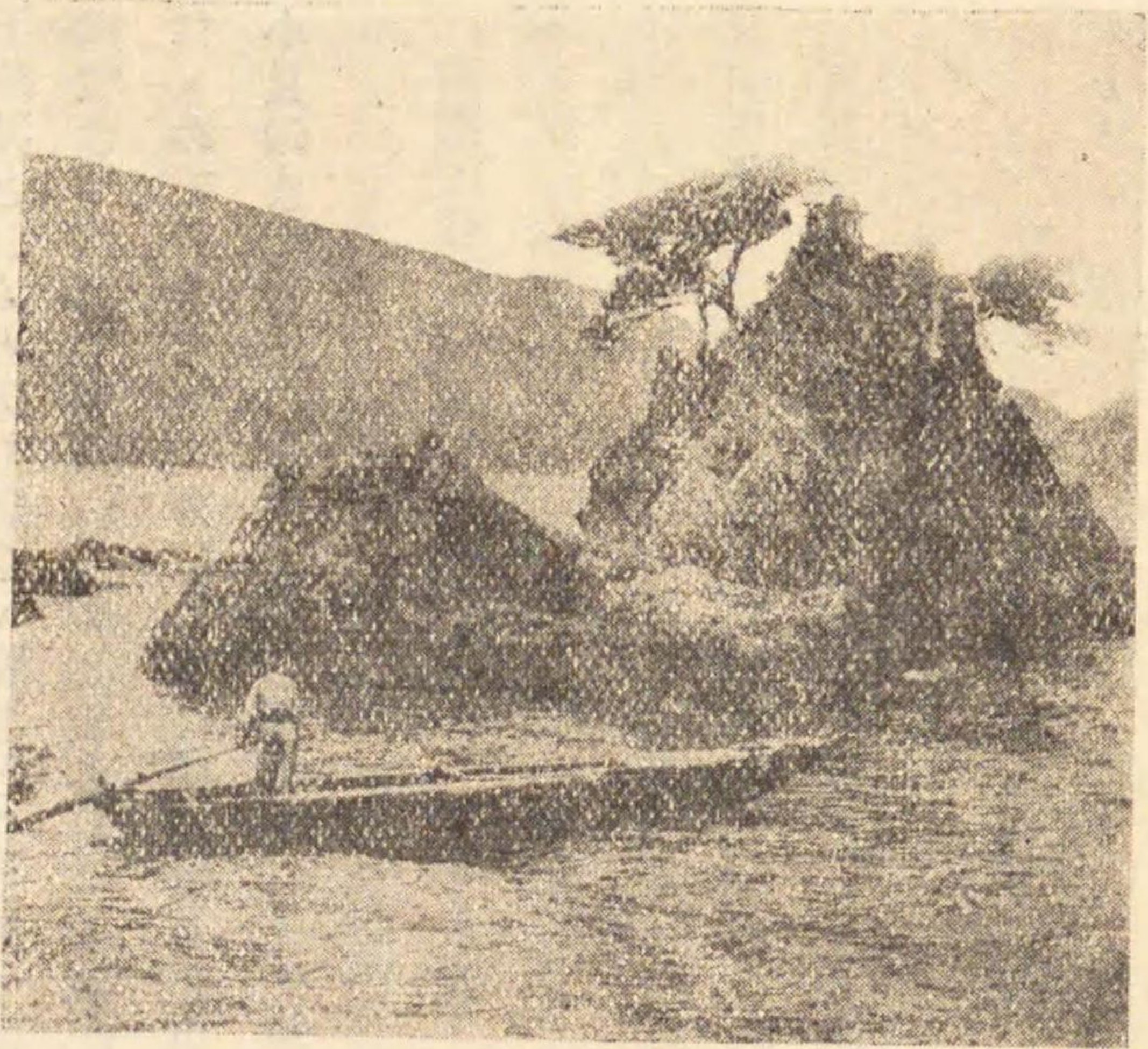
## 常宮へ

敦賀灣は小ぢんまりしてゐるけれども、海深が大きいので、色がいかにも濃い碧で塗られたやうである。時には日の光澤の具合に由つて、黒ずんだ紫に見えることさへある。灣内には辨天島などといふのがあつて、人達はよく舟でそこにわたつた。

しかし、此處では非行つて見なければならぬのは、辨天島もあるけれども、それよりも常宮——杉津の海岸あたりから見ればすぐ向うになつて見えてゐる常宮へと渡つて見ることだ。そこには乗合の舟もあるであらうし、場合に由つては、遊覽者に乗せるのを目的としてゐるラッチぐらゐはある筈である。

そこは丁度榮螺ヶ岳の東西、立石岬の此方になつてゐる。古い社で、無論式内社である。今は縣社に列してゐる。祭神は天八百萬比咩神、氣長足姫命、足中彦神の三神を祀つてゐる。大寶三年に建てられたものであると言はれてゐる。

舟を捨て、岸に上る。いかにも別天地に來たやうな氣がする。そこから望むと、敦賀の市街は



敦賀 辨天島  
常宮へ

遙かに蜃氣樓か何かのやうになつて見える。それに、その宮の拜殿がすぐ海に臨んでゐたり、本殿の後がすぐ屹立つた徒崖になつてゐたりするさまなどいかに特色に富んでゐる。宮島とは違つてはゐるが、しかし何處か似たやうな氣がする。周圍に老樹は多く、小さな流れが瀑を成して落ちてゐるのなもど感じが好い。

ことに、こゝで見るべきものは、秀吉が朝鮮から分捕して來たといふ古鐘である。高さ三尺八寸、周圍六尺九寸、大和七年三月日蓮池鐘成以下數字を刻してゐる。形も變つてゐるし、時代もついてゐて、旅客の心を惹かずには置かないものであつた。芭蕉の『奥の細道』に、その向うの立石岬に遊んだことが書いてあつた。それを此處に引く。

『十六日空晴れたればますうの小貝拾はんと種の濱（色の濱）に舟を出だす。海上七里あり、天屋某といふもの割籠さゝ筒などこまやかに認めさせ、僕あまた舟に取り載せて追ふ風時の間に吹きつけぬ、濱はわづかなる海人の小家にてわびしき法華寺あり、この所に茶を飲み酒をあたゝめて、夕ぐれのみさびしさに感に堪えたり。「さびしさや須磨に勝ちたる濱の秋」「波の間や小貝のまぢる萩のちり」この日のあらまし等裁に筆を執らせて寺にのこす。』

## 杉津の海岸

敦賀から木の芽峠の中に入つて行くと、溪の小流、野碓の獨りさびしくめぐれる彼方、田舎少女の眞白なる手拭に髪を包んだ、田島の處々白壁の土藏の日に照つた、櫛の林中の道、丘の上のひとつ松、やがて兩傍の丘陵小嶺は次第に迫つて、褐色の岩石に激する小溪の流、それも漸く細く細くなつて、やがて汽車は轟然としてトンネルの中に入つて行つた。

煤烟の音凄じく、車燈の影朧けに人を照して、轉た仙話の洞窟に入つたやうだつたが、忽ち出て去る光明また光明、何といふ好い景色だらう。俄かに、かう美しく前に展げられたるかと思はるゝばかりの海、島山、白帆。

わが汽車の駛れるところは山の半腹、これが爲めに、幻影の如き山水圖は皆な眼下に、岸には亂るゝ怒濤の掀翻、山には懸れる白雲の搖曳、長く彎入せる敦賀灣には紺青をもて描きしに似たる島嶼基布して、海に盡きたる榮螺ヶ岳の餘脈より、斜に開くや、縹渺たる日本海萬頃の怒濤。

「好い景色だ？」

「何時通つて見ても、此處ばかりに饜きんね。」

「實に好い。」

乗客の眼は皆偏うた。

「常宮は丁度あの近所になつて居るだらうかね。」

土地の豪商の子息らしい、赤き襟飾の、アルバカの洋服を着けたハイカラは、傍の友らしい男に尋ねた、

「左様サ。」と、問れた男は、前に展けられた景色を見て、「此處からはよく見えんが、丁度あの岸に着くやうになつて居る島があるだらう。あの少し右になつて居ると思ふね。常宮は好いね！」

汽車は再び隧道の中に入った。

隧道を出ると、其の會話はまた續いた。

「春なぞあの近所に行つて網でも打つたり、釣でも爲して居やうものなら丸で世の中を忘れて了ふやうな氣がする。君は、何時行つた。」

「僕は三年ばかり前の秋！」

「秋も好いだらう。」

「好いね、秋は空もよく晴れるし、眺望もよく利くし、それに紅葉が好い。」

「紅葉が？」

「さう澤山も無いけれど、海邊の紅葉と言ふものは又一寸風情があつて面白いものだ。」

「さうとも……。」

この汽車の開鑿した道は、岩石であるために、過ぎ行く車の底の轟音高く、見るから危きばかりなる岩石の一端、隧道ごとに、風景は少しづつ變つて行つて、海中に突出した冠岩一帯の丘陵、それがやゝ右に偏ると見た頃、汽車の歩みは漸くに緩く、開かれたる斜坡の上に、さびしき一箇の停車場があらはれ出した。

「すいづ、すいづ（杉津）。」

かう車掌は呼んだ。

此停車場からの眺望は何とも言へなかつた。新しき建築らしい小さな停車場、それから褐色の路はうねくと、或は豆島、或は粟畑、或は草藪の間を下に下にと降つて行つて、向うに風情

ある茅葺屋根の兩三軒、其處には子供の衣、浴衣などが高く竿に干されたるのを見えたが、猶下ると、松林があつて、右の山陰の荒磯深く、濤立ちあがる沙濱には、さびしき漁村蟹戸の群、ことに、冠岩は押漬されしやうに低く蒼波の上に突出して、其上には松樹が深くしけつてゐた。

停車場の名勝標には、此海岸に海水浴場あることが書いてある。乗客に問うと、其設備は完くないけれど、風光の明媚なるに憧れて、夏は行いて遊ぶ者が多いといふことであつた。私は心を動かした。そこには色の美しき撫子の花、山よりは絞れて流るゝ清水の泉、無邪氣なる若き漁師はさまざまなる面白き海物語、殊に月の明かなる夜など、一人その松原へとあくがれ渡つて、美しき海の閃耀を見やうと、一步は一步より高く其の斜坂の上へと登つて來はしないか。かうした空想の中にも、汽車は猶一二の隧道を過ぎて、其海山はたうとう見えなくなつた。

## 蘆原温泉の一夜

日の暮れる頃に、福井の先きの金津で下車した。私は蘆原温泉あわらおんせんに行かうとしたのであつた。その金津で下りる少し前に、汽車は轟々として九頭龍川の鐵橋をわたつた。私は地圖を檢して子供達に言つた。

『新田新貞の戦死したところは、そのすぐ向うだよ』

『藤島？』

『いや、燈明寺囀——』

かう私は言つた。薄暮の空氣は既にあたりを深く包み始めてゐた。汽車の轟々として音を立て、ゐる間、私は大きな川の白く流れてゐるのを目にした。

金津を下りた時には、何となくさびしかつた。また、寒かつた。金津までしか、切符が買つてないので、一度で、そしてまた切符を買ひ直して乗らなければならなかつた。三國の方へと行く汽車はもう出かゝつてゐた。烟突からは煤烟が湧き上つてゐた。

幸ひに間に合つた。私達が乗るとすぐ發車した。

スチームの入つてゐる暖かい幹線の汽車から、この暗い火の氣のない田舎の軌道車に入つて來た時は、私達は急に北國の寒さの身に染みわたつて來るのを覺えた。幸ひに、隣に坐を占めてゐた紳士が親切で、いろいろとその土地の話をして呉れたので、お蔭で、その寒さをもいくらかまぎれることが出來たやうな氣がした。

その紳士はいろいろなことを話した。蘆原の温泉のことも話せば、三國のことも話した。また罐詰の出來るやうになつてから、蟹の高くなつたことも話した。『なアに、元は安かつたもんですがな……。唯のやうなもんでしたがな……。高くなりましたよ』など、言つた。

蘆原の温泉については、『さア、好くなるにはなりました。福井が近いので繁昌しますけれど、何しろ、また年代が経つてゐませんからな。たしか明治の十五年か十六年に始めて開けたんですからな』

『そんなに新しい温泉ですか？』

『え……。もとは沼でしたな。私なんかでも覺えてゐますよ。勿論、その時分から、あそこからは、湯が出る、湯が出るツて言つてゐたにはゐたんですけれども、何しろ、設備が大變ですか

らな……。あれでも、あれまでにするには、いろいろなことがあつたんですよ』

『しかし、今では立派な温泉場になつてゐるんでせう？』

『それはなつてゐます……。旅舎だつて、随分多くなりました。お出になりや、おわかりになるが、今では立派とは行かなくつても、兎に角湯の町らしくなつてゐますからな』

紳士は三國港の話をしたり、その港の衰へて了つた原因を話したりしたが、私達が明日東尋坊に行く話をすると、『あ、あそこに行きますか。なアにわけはありやしません。何でも遊覽船も出る筈ですけれども、歩いていらつしやる方が便利です。さうですな、一里位しかありません』など、話



蘆原温泉

した。

お蔭で、寒いのもさう寒く感ずるひまもなしに、やがてその次の停車場に着いた。そこは蘆原であつた。

私は一種なつかしい氣分を感じた。それは丁度薄月のある夜で、地上にはまだ雪はなく、寒いには寒いにしても、何處か春めいた感じがあたりには漲つてゐた。停車場から突當つた細い通には、温泉場らしい軒燈が庇を並べてついてゐて、ある家からは、低い三味線の音が靜かにきこえてゐたりした。

私達は紳士に聞いた旅舎の名を一軒一軒覗いて行つた。

しかし、それは容易にやつて來なかつた。いくらか不安になつて 向うからやつて來た人に訊くと、『K樓ですか……。それなら、まだずつと先きです。これを行つて、右に曲つて、一番外れの右側の家です……。』と言つて、わざわざもどつて指して教へて呉れた。

『大變遠いんだな！』こんなことを獨語のやうに言ひながら、私達は猶ほ一軒一軒覗くやうにして行つた。家屋は次第に疎になつて行つた。灯も盡きて、あとには二つ三つ闇にそれと見えたりするばかりになつた。

遂にK樓の名をそこに見出した。

それは紳士の言つた通り、果して靜かな好い旅舎であつた。頬の紅い女中は、赤く起きた火を澤山十納に入れて持つて來てすぐ火燵をして呉れた。私達は浴衣を着て急いで湯に行つた。

いかにも新しい湯といふ感じがすると同時に、私は越後の村上の先きにある瀬波の温泉を思ひ出した。それも矢張二十年ほど前に初めて噴出したものであつたが、いかにもその湯の新しう感じが似てゐた。古い、年代を経た湯は——たとへば道後とか有馬とか、北陸で言へば山中とかいふ湯は、何處か肌のさはり加減は柔かではあるが陰氣でいやにべたべたするやうな氣がするのに引かへて、新しい湯は、荒くはあるけれども、何處かさばさばと心持よく爽かなところがあつた。この湯などもたしかにその一つであつた。それに、その旅舎の設備も非常によく整つてゐたし、浴槽なども箱根に匹敵するに足りるほど綺麗であつた。

私はこのあたりが沼であつた時のことを想像した。この北陸の海岸は、東尋坊あたりから能登の敷波あたりまで、平滑な砂濱になつてゐるが、そのところどころに瀉湖が出來てゐて、このすぐ上の大きな瀉、更に進んで柴山、今江、木場の三瀉、更に北に河北瀉など、いふ大きな瀉湖があるが、こゝもそのために洩れない小さな瀉湖であつたに相違なかつた。つまり、あの

伯耆の東郷湖の中の東郷温泉や、柴山瀉の中の片山温泉など、同じく日本にめづらしい湖の温泉の一つであるに相違なかつた。『へえ、今でも、また沼のあとはいくらかあります……。大抵は埋立て、了ひましたけれども……。』こんなことをその旅舎の主人は言つた。

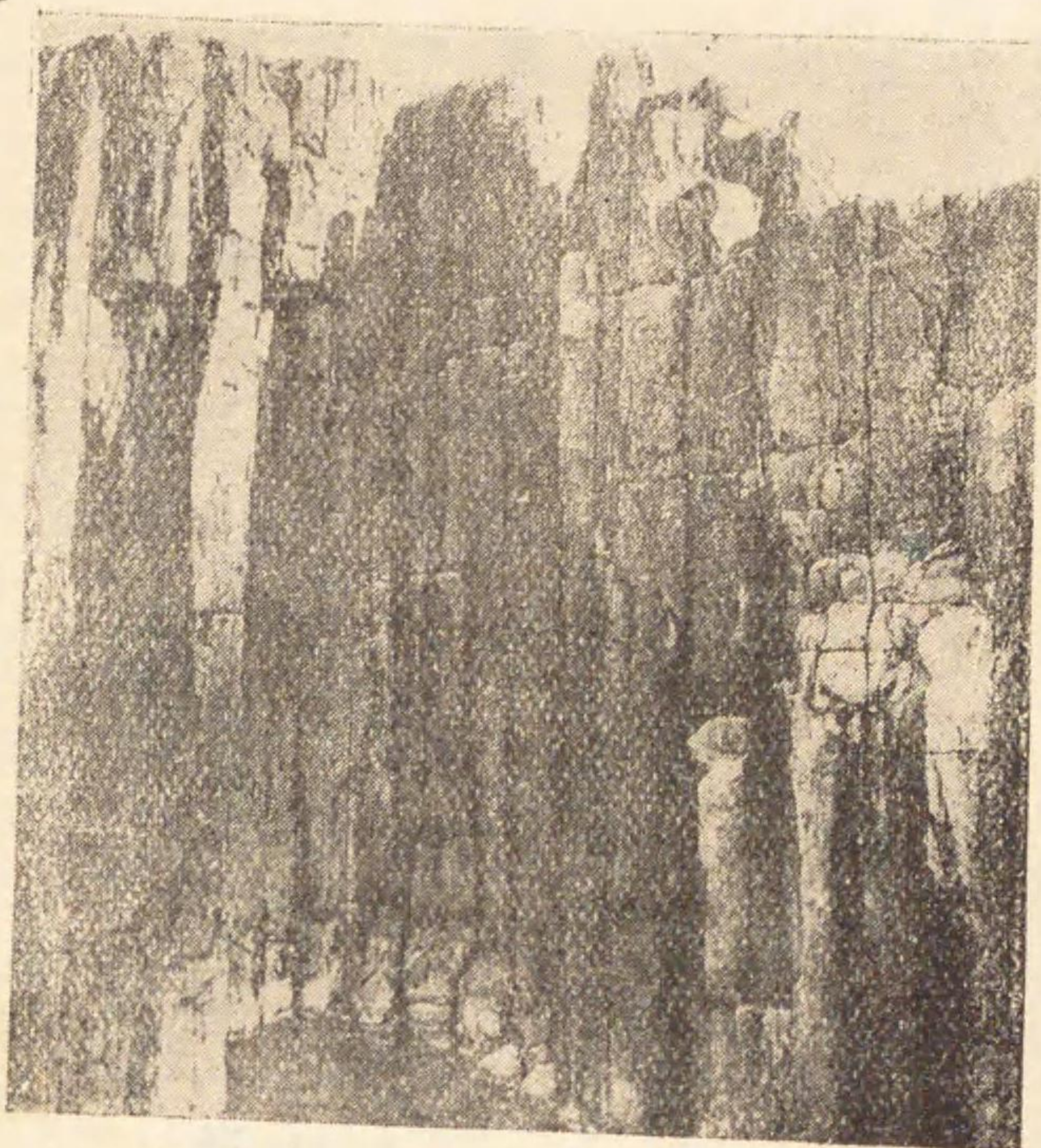
## 東尋坊の奇岩

三國の港外にある東尋坊はちよつと奇觀だ。岩石としては目を刮せしむるに足るものがある。唯、惜しいことには、附近がやゝ淺露で、陸上からもわけなく行つて見ることが出来ることである。これが海上を舟でわたつて行かなければ行けないところにあるのだと、一層名勝としての價値を大きくしたであらうと思ふ。例へば男鹿半島の萬雀窟のやうに、または若狭の大門小門のやうに。

そこに行くには、三國線の終端驛で下りる。そして衰へた昔の和船の港である三國港のさびしい市街を西に抜ける。この間がかれは十町、もう少しあるかも知れない。やがて九頭龍川の溶々とした川と、半は孕んだ帆船と、のんびりした向うの丘陵とが見え出して来る。河口はもうそこからすぐなのである。ほてをかついで蟹を賣つてゐる漁師の上さんらしい女をそこへと見かけた。

町から河口まで二十町ぐらゐある。大抵は村と村との連続である。途中に東尋坊遊覽の舟の





東尋坊の奇岩

出る所なども見かけた。河口に近く、右に小さな小高い社がある。これをぬけて行と近路であるが、普通はそれをぐるりと廻つて、河口のはつきり見えるあたりを通つて行のである。海に添つた道が暫しの間つゞくと、向うには松林——それもさう大して繁茂してゐない松林が見えて、それを隔て、雄島の鼻が少しばかり見え出した。で、七八町行つてその松林の中に入ると、そこに標木が立つてゐて、左が東尋坊に行く路であることが書いてある。路は急に細くなる。それに上つたり下つたりする。木の根なども路上にあらはれて来る。一軒、人家があるのを右に見て、爪先上りに松原の中をのほつて行く。海がひろくひろく

見え出して来る。いかにも好い氣持である。やがて松林を抜けると、草山になる。低い灌木がところどころに生えてゐる。路はその間をうねうねと傳つて、小高い丘の上のやうなところに通じてゐる。東尋坊はすぐその下に横つてゐるのである。

何でも傳説に由れば、昔、平泉寺に東尋坊といふ悪僧のあつたのを、皆なが持てあまして、だまして此處につれて来て、岩の上から突落して殺したためにその名を得たのであるといふことである。岩は火山岩で、到るところ方形の標柱状を呈し、中には五十間の高さに達するものすらある。いかにもめづらしい岩石である。そしてその岩の林立した間から深い潭が碧く見え、てゐるさまは何とも言はれない奇觀であつた。こゝから雄島までは、十二三町に過ぎなかつた。そこには式内社雄島神社が祀られてあつた。

東尋坊に行く途中で、日和下駄の齒を二枚折つて了つたので歩き悪くつて爲方がない。三國に行つたら是非入れなければなど、思ひながら私は歩いた。

三國は衰へた港として面白い。丁度、下田、酒田、三崎など、その運命を一にした古い和船の港であつた。大きな古い倉庫、さびしい暗い人通りの稀な通、その間を、例の赤い蟹を籠に

入れた漁師の筒袖の嗅が『蟹は？ 蟹！』はと言つて觸れて通つた。

此處に限らず、北國では、到るところ生魚の多いのが羨しかつた。敦賀などでも、蟹やかれひが澤山にあつた。小鯛の赤い奴が一杯籠に入れられてあるのなどは、あたりの雪に反映して、さながら繪のやうに私には思はれた。到るところの家の軒に、むしかれひが串に通して干してあるのなども、私は酒を思はせた。

初めに訊いた下駄の齒入屋は、生憎主人が留守だつたが、次に發見した下駄屋の亭主は丁度仕事場で仕事をしてゐたので、すぐ承知して入れて呉れた。待つてゐる間、

『此處等に、晝飯を食はせて呉れる家はないかね？』

かう訊くと、

『いくらもあります』

私は昨日敦賀の停車場前で懲りてゐるので、藝者などの入る料理屋でない、また純然たる旅舎でもない、唯單に旨い晝飯を食はせて呉れるやうな家をもとめてゐることを話すと、『それならそこが好い。この向う側で、松岡といふ魚屋で、ちよつと飯を食はせて呉れる家がある。あそ

こなら、好い』かう下駄屋の亭主は教へて呉れた。それに私は、何うかして蟹を少し土産に持つて行きたいと思つてゐる。『それなら、そこが一番好い』と亭主は言つた。

下駄が出来たので、そこを出て五六軒行くと、果してそこに亭主の教へてくれたMといふ魚屋があつた。『此處だ！』かう言つて入つたが、何だか具合がわるい。それも料理屋らしいところが少しもないからであらうが、兎に角、晝飯を食はせて貰ひたいことを話すと、今まで一人の客と長火鉢で相對して話してゐたお袋らしい老主婦が立つて来て、『これから飯を炊くんだが、それでも好ければ』といふ。汽車の時間はまだあるので、待つことにして、そして私達は上り込んだ。老主婦は別に室に案内するでなしに、直ちにその隣の炬燵のあるところへと私達を請じた。

そこで過した一二時間は愉快であつた。旅で一番うれしいのは、隔てない取扱を受けることである。旅客として、なしに、單に人として取扱はれることである。『をりくべてたける槽火のあたゝかきこの情けをばわれ忘れめや』かうした歌を、まだ若い頃、日光の山奥で詠んだが、さうして他人ならぬ情が旅客に何とも言はれずうれしいのである。私はそこで老主婦と、やがて歸つて來たその娘らしい主婦と一時間ほどゐたが、その他人ならぬ暖かい親切な取扱を何時の日か忘れ得よう。私は其處で、土産に持つて行く蟹を買ひ、子持蟹の食ひ方を教はり、烏賊

の生づくりで、好い心持に酒を飲んだ。私は一時間の中に、此間も東京から手紙をやつて蟹を送つて貰ふほどの主婦達と懇意になつた。それから比べたら、敦賀の停車場前の取扱は、女達は、主人の素つ氣ない風は――。

『好い感じがする上さんだつたね』

そこを出て来て、私達はこんなことを言つた。

『本當だね。北中きたなかの上さんのやうだね』かう男の兒も言つた。北中とは越後と羽前との間に横つた葡萄峠の一驛であつた。その旅舎の上さんの親切であつたことを男の兒は思ひ出したのであつた。

## 一 乗 谷

浅井長政の小谷山城址を書いた私は、福井を通るに際して、朝倉義景の一乗谷を忘るゝことは出来なかつた。

私は朝倉氏が多年そこに覇を唱へてゐたさまを想像した。次第に佞臣が下に蔓つて、内部から衰へて行つたさまを想像した。元龜三年に浅井氏の後詰として近江まで出て行つたために、信長に逆襲されて、刀根越の隘路で慘憺とした退却戦をしたことを想像した。そしてそれは、武田氏の長篠役と均しく、部下の勇將猛卒を過半失つて了つた決定的敗北であつたことを想像した。

今、そのあとには何もなかつた。人に由つてはわざわざ出かけて行つたことについて非常に不満を感じるかも知れなかつた。しかし、荒草亂離の中に、敗將の末路を弔ふのも、また一日の行樂ではないか。

そこに行くには、福井市からでも好いが、その一つ手前の大土呂驛で下車して行くのが一番

近い。そこから東郷まで一里半、そこはちよつとした田舎町で、人家が軒をつらねてゐるが、それを外れると足羽川がかなりにひろく流れてゐるのに出會す。その岸に沿つて十二三町行くと、阿波賀といふ部落がある、そこが即ち一乗谷の入口で、一つの溪流がその谷の中央を流れて南に足羽川に合してゐる。その小さな涔々とした溪流に添うて次第に山深く入つて行くのである。安波賀から十町ほどで城戸野門といふ部落に達する。そこは城の入口であつたところで、今でも土壘が残つてゐる。昔は立派な城門がそこに置かれてあつたといふことである。そこを通り越すと、溪谷は次第に狭くなつて行く。幅二三町ぐらゐしかないと思はれるくらゐである。その間が十二三町ほどある。やがて溪谷がやゝひらけて来る。しかし此處に来ると、もう全く山の中である。そこに一乗村の役場があるが、そこが昔朝倉氏の邸宅のあつたところださうで、桃山式の古雅な石門が立てられてあるのを私は目にした。何でも此門は秀吉が後に此處に来てその冥福を弔ふために建てたものだと言ひ傳へられてある。格好の好い雅致に富んだ門である。

しかし城のあつたところは、その奥で、そこまで行くには、細い草路を猶三十町ほど登つて行かなければならぬのであつた。しかし少しはつらくとも、そこまでは是非行つて見るこゝとが肝心であつた。何故かと言へば、そこまで行つて始めて朝倉氏の當時のさまがはつきりと飲み込まれて来るからであつた。そこには本丸のあともある、二の丸のあともある。千疊敷など、いふところもある。また山から少し下れば、當時城の唯一の用水であつた清水が湧いてゐたりした。何でもそれは不動の清水と言はれてゐたと私は記憶してゐる。それに、その山頂の眺望は、何とも言はれないほど美しかつた。そこから見ると、足羽川は勿論、福井平野が一目のもとにはつきり展げられて見えた。成ほど好いところだと思つた。それに、戦國時代にあつては、屈指の要害の地であつたこともはつきりと飲み込めた。朝倉がこの要害を占めてゐては、北國街道は、一兵だも通ることが出来なかつたに相違ないのであつた。

この一乗谷の奥を究るのも、また面白かつた。その奥の淨教寺といふ部落には、一乗の瀧といふ大きな特色のある瀑布があつた。それは越前では第一指を屈するに足る瀑であつた。頗る奇觀である。

## 永平寺

曹洞宗の本山永平寺は、福井市の東四里、志比谷村字志比にある。こゝにも亦そこまで行つては、素通りの出来ないところであつた。

で、福井市から大野に行く電車に乗る。永平寺口の停留場まで約四十分かゝる。こゝで電車を下りる。つまり此處から志比谷の溪谷に入つて行くことになるのである。寺の門まで一里二十町、徒歩で行つても、さして難儀でない。それに、路も好いので、車も自由に通ずる。今では福井から自動車でもやつて來ることが出來た。

路はいくらかのほりになつてゐる。それに溪谷の幅が狭く、行手には山巒が蓋をするやうに遮つてゐるので、こんなところにさうした大本山があるかと思はれるくらひである。しかし、少し行くと、溪谷は少しく展けて、山ふところと言つたやうなところに、人家が簇々として見え出して來た。それが即ち永平寺の門前町を成してゐる永平の部落である。このあたりには、古い佛像が澤山に道端の岩に彫りつけてあるのを誰も見るであらう。

門前町はさう大して綺麗だとは言はれない。何方かと言へば、汚い方である。小さな休憩店、小さな旅舎などがある。それを通り抜けると、正面に黒い門が見える。杉がこんもりと茂つてゐる。言ふまでもなく永平寺である。やがてそれに入る。

境内に入ると、通用門から内は、すべて履物を草履に代へなければならなかつた。私は、不思議な氣がした。これが曹洞宗の本山永平寺かと思つた。私は大本山といふから、もつと大きな、廣い寺を想像して行つたのに、實際はそれと違つて、境内は狭く、規模は小さく、堂がすべて一ところに寄り集つてゐるやうなを目にした。それと言ふのも、山懐の、狭い溪谷の斜面に建てられたためであつた。従つて堂から堂へと廊下が通じてゐて、雨が降つても雪が積つても、それづたひに草履で往來することが出來るのであつた。

しかし、外觀はさうであつても、内部に入つて見ると、佛殿、法殿、僧堂、すべて見事で、壯嚴で、整然としてゐて、成ほど一宗の大本山だけのことはあると點頭かれた。

それに、こゝでは、參詣するものを皆な宿泊せしめるやうになつて居り、集つて來る雲水の多數の僧をも修業させるやうな組織になつてゐるので、その厨、その浴場、その寢室、すべて大規模で、自足自給の生活をしてゐるので、米や、鹽や、味噌や、さういふ食糧もすべて大きな

倉庫に貯藏されてあるといふ形である。それに寺で用ゆる電燈もすべて寺で經營してゐる水力の電力を使用するといふ風で、山間の一王國を成してゐると言つても決して過言ではないのである。

寺の一隅、最も高いところに、承陽殿がある。承陽大師の廟所である。此處は一山でも一番神聖な場所にしてあつて、滅多なものは此處に入つて來るのを許さない。案内にも特別の案内が要る。何でも簡單ながら不思議の儀式もあるといふことである。しかし、私は詳しく知らない。

それに、秋の彼岸時分には、參詣者が各國から群を爲して集つて來るので、非常に賑やかな光景を呈するといふことである。それから雲水の僧の修業する形なども仔細に探ると、非常に興味多く眺められるといふことである。それには一日二日此處に滞在しなければならぬ。

## 北陸の四温泉

温泉軌道が出来ない中は、何うしても一番先に大聖寺から馬車鐵道で山中温泉に行き、それから山代温泉に行き、片山津に行き、粟津に行くといふやうになつてゐたが、今では何處へでも勝手に好きなところに一番先きに目覓けて行けるやうになつた。幹線から粟津へ行くのなどは特に便利だ。先づ粟津へ行き、それから山代、山中といふ風に出て行くのも面白かつた。

温泉のこともあるが、それよりも私はもう少しこの附近のことを書いて見たい。此處等はそれからそれへと遊んで見ても興味の多いところであつた。柴山、今江、木場の三つの瀉の連珠のやうに連つてゐるのも面白ければ、三湖臺から、この三つの瀉湖を望んで見るのも愉快であつた。それに、北に連つてゐる日本海に面した松林——この松林の中を往昔の北國街道が通つてゐて、そこに例の齋藤實盛の戦死した古墳が残つてゐるのなども、旅客に取つて忘れられないもの、一つであるであらうと思はれた。

その松原の中を私は半日以上歩いた。あの凄じい怒濤——地を撼して來る怒濤、成るほどこ

れでは年々土地が侵蝕されずには置くまいと思はれるやうな怒濤、それがいかにも耳にひびくやうにきこえて、そしてその中に時を刻んだ松風の音が靜かに靜かに琴でも奏づるやうに響いた。いかにもなつかしかつた。またいかにも世離れてゐた。

この松原の中には、漁村が處々に散點してゐて、中には鹽などを焼いてゐるところもあつたやうに記憶してゐるが、實盛の墳のあるところは、往昔の北國街道からちよつと左に外れたところで、たしか五輪の塔が依然としてそのまゝに残つてゐたと思つてゐる。そこに行くと、平家の軍勢の追ひ立てられて敗北して行くさまが、古い繪で見るやうにはつきり眼の前に浮んで來た。

この松原の中には、ところどころ西瓜のの出來るところがあつて、それを擔いで市場に持ち出して行く女達の三々伍々群を成してやつて來るのに逢つた。

柴山瀉は丁度その内部になるやうなところに位置してゐて、その縁を路がうねうねとめぐつてついたゐた。沼には蘆や眞菰も一面に生えて、小さな舟が一隻二隻その中に漂つてゐた。漁師が鰻をとるために、その小舟を巧にあやつつて、置針をそこから此處へと置いて行つたりしてゐるのも見かけた。河骨の花や、水あほひや、その上を飛んでゐる蜻蛉や、ひよつくり首を出し

てまたひよつくり沈んで了ふむぐりや、紅く白く咲いて蓮の花や、そのシインは、いかにもラステツクな夏の濃い色彩に塗られてゐるのを私は思ひ出した。

私は惜しいことには、片山津には一夜も泊らなかつた。湖に臨んだ旅舎で、晝飯の出來る間に、ちよつと湯に入つて、上つて來てから、ビールを飲んで、飯を食つてそしてそこを立つて來て了つた。従つて詳しいことは知らないけれども、水に近いただけそれだけ靜かな温泉であつたやうな氣がした。日本海の波の音が前に言つたそのひろい松原を隔て、さながら地を撼かすやうにきこえて來た。

粟津は小ぢんまりしてゐる。片山津が湖の温泉であり、山中が山の温泉であり、山代が平野の温泉であるなれば、こゝは丘の温泉であると言ひたい。そこは全くかけ離れてゐる。靜かに落附いてゐられるやうな氣のするところである。そこに、その近くに、例の北陸の名勝那谷寺なたがやがある。例の觀音が祀つてある。

こゝは那智山の那の字と美濃の谷汲寺の谷といふ字を取つてつけたといふだけあつて、流行佛としてもかなり世に名高きこえてゐる。香烟も従つて盛である。それに、堂とあたりの山との具合が小ぢんまりと整つてゐて、感じがわるくない。紅葉の時などには、人はわざわざそ

のために出かけて行くくらゐであつた。

『さうですな、粟津が矢張一番落附きますかな』

かうした言葉を私は少くとも三四人の人々から聞いた。またある人は言つた。『さうですな、山中も好いには好い。いかにも古風で好い。芭蕉の句に何とか言ふのがありましたな。菊時分でも菊もかゝさないで湯に入るつて言つたやうな句がありましたな……。さうさう「山中や菊も手折ぬ湯の匂ひ」でしたな……。さういふ風な古風な、田舎は田舎のまゝで固つて、そのまゝ何百年を経たといふやうな古い気分がありますよ。あれが山中では忘れられない気分ですな……。あの町通りが狭く、古い旅舎が立並んでゐる具合なども、陰氣には陰氣だが、何處か古い匂ひがしますな……。それから比べると、山代は極く新しく開けたやうな氣がして、町にしても浴槽にしても、すべて俗で、雅でない。……。あれはまゝ酒でも飲んで、女でもつれて行つて、おもしろ可笑しく遊ぶところでせうな。粟津ですか？ あそこも好い……。秋なんか殊に好い。しかし、夏はあまり涼しいところではありませんよ。矢張、あそこも紅葉時分でせうな』

『山中にも内湯つていふものがないやうですが、あつても形式だけのやうですが、矢張、湯が

少いでせうか？』

『湯も關東の湯のやうに、ありあまるほどあるといふのは少いでせうな。それは何うしても湯の多いのは、北陸では、和倉でせうな……。しかし、あの錢湯式の設備は、皆な道後、有馬あたりから來てゐるのでせう。上方の感化でせう。形から言へば古風なんでせう。温泉も昔は、通りかゝりの人でも入つて行かれるやうに、道の真中にあゝした大きな總湯をつくつたのが始めでせうからな』

『それはさうでせうな……。』

『何しろ、上方の感化は大したものですよ……。』かうその人はつゞけて話した。『あの湯女などでも、皆な上方式でせう。つまり上方風の田舎化でせう。だから同じ上方式でも、何處かに土臭いところがある。それに料理だつて、取扱方だつて、皆な上方ですよ』

『盛んなものですな、上方の感化力といふものは？』

『何しろ、金澤の狭斜街がさう、新潟がさうですから。皆な和船の交通が持つて行つたんでせうが、大したものですよ。裏日本には、關東の影響といふものは殆どないと言つて好いですから……。もつと大きく言へば、鶴岡だつて、酒田だつて、もつと先きの秋田だつて、弘前



だって、皆なさうですよ。關東なんか、それを思ふと、その感化力は微々たるもんですな……。下國なんて言はれるのも無理はありませんな』

かういふ風に抽象的に見るのは好いかわるいかわからないけれども、兎に角、さういふ處のあるのも事實だつた。山中にさうした古風な匂ひがあるといふことは、好い觀察の一つと言つて差支なかつた。實に山中は陰氣だけでも、何處か旅客を落附かせる、また楽しませるところがあつた。たとへて言つて見れば、老舗と言つたやうな氣分である。

山中には普通大聖寺の停車場を下りて、そこから軌道で行くのが普通だが、今は温泉軌道が出来て、粟津からでも、片山津からでも何方からでも行けるやうになつてゐた。山中にある山中漆器は、山代の九谷陶器と俱に湯歸りの好土産とすることが出来た。

この温泉軌道を利用して遊びに行つて見るところは、この他に三湖臺、安宅關の趾などがあつた。後者は日本海に瀕した土地が年々いくらかづゝ陥落するため、今は全く海の中になつて了つて、そのあと何もなくなつて了つたけれども、その安宅といふ町も海岸の小さな町として残つてゐるばかりで何も面白いといふこともないけれども、それでもそこに行つて昔のことを思つて見るのも興味がなかりなかつた。三湖臺にも、ひまがあつたら、出かけて行つて、そ

のさびた湖の姿に『詩』を思つて見るのもわるくはなかつた。

山中にある蟋蟀橋の持つた溪流は、溪流としてはさう大して立派なものではなかつた。いかにしても規模が小さかつた。變化に富んでゐなかつた。しかし溪流の美に乏しいこゝらあたりでは、これでも珍重すべきものであるかも知れなかつた。橋のほとりには、休茶屋などがあつて、夏は涼しいところであつた。鮎なども獲れた。

この他には、手取川の大きな谷、小松町にある齋藤實盛の遺物を藏した神社、それから美川の小舞子など、皆な行つて見て好いところであつた。小舞子には、夏だけ汽車が臨時停車場を設けた。

## 和倉まで

餘りに遠く行き過ぎるが、此處まで来た次手に、簡單にもう少し書いて見やう。金澤では、例の兼六公園、尾山神社、淺野川大橋などを見る。兼六公園は流石にその名を辱かしめぬものがあると思つた。

和倉温泉に行くには、津幡から能登の七尾線に乗換へる。この間は三時間と思へば間違はない。七尾から和倉までは、海にランチがあり、陸に自動車があるからわけなく行ける。しかし晴日ならば、陸路よりも海路の方が面白い。

和倉温泉は春先などはことに好いところである。いかにもものんびりしてゐる。此處まで来れば、遠く世を離れたやうな氣がする。湯も非常に豊富であるし、胃腸にもよくきくといふことである。旅舎は和歌崎などが好からうと思ふ。

こゝに長ゐるて、退屈したらば、毎日出帆する汽船の甲板の上に身を托して、能登の西海岸を宇出津から小木、飯田の方まで行つて見るのも好い。小木の先きには、九十九灣などといふ

景色の好いところである。

## 木津附近

京都から木津に行く。もし時間があれば、そこで下りて、大智寺、誓願寺、その北方にある哀堂に平重衡のあとを弔ふのも興が深い。重衡はあちこちを引廻された後、遂に此處で首を刎ねられたのである。その時供養した十三層の石塔が今でも残つてゐる。否、そればかりではない、そこから五町ほど隔てた木津川の堤下には、當時首を洗つたといふ池が依然として存してゐる。

この木津から加茂の附近には、曾て恭仁の宮が築き起され、一度は帝都にならうとしたところだけであつて、仔細に探ると、いろいろな古蹟がある。國分寺、海修寺、淨瑠璃寺などがある。百人一首の歌にあるみかの原だとか、鹿脊山だとかいふのは、皆な此處等にある地名で、例のいづみ川は今の木津川を指してゐるのである。此處に帝都をつくりかけて、さて此處よりは奈良の方が好いと言つて、そしてあの平城宮に移つて行つたのである。

## 笠置山

笠置に行くのには、木津から湊町名古屋線に乗替へればわけはなかつた。加茂驛の次ぎは笠置驛であつた。

笠置山は後醍醐天皇の行在所となつたので知られてゐるが、實はそれよりもすつと前、即ち天武天皇が皇太子でゐられる頃に、此處に獵に来て、一頭の鹿を追つたが、乗つてゐた馬が懸崖に乗りかけて、既に危うく下に落ちやうとしたを、佛を念じたため、馬が倒さに立つて辛うじて危難を免れた。そのしるしに、着てゐた笠を其處に置いたので、それで始めて今の名を得たので、現にその石が笠置石と言つて、その山に残つてゐた。で、天皇が位に即かれた白鳳十二年に始めて今の寺が創建せられ、鹿鷲山笠置寺と言つたのであるといふことであつた。

今では僅かに福壽院といふ一字が残つて、それが笠置寺といふ名を冒してゐるけれども、昔は——尠くとも後醍醐天皇の蒙塵された時分には、堂坊も澤山にあつて、その力も侮りがたかつたので、それに頼つて此處に行幸せられたのであつた。現に太平記を讀めば、笠置の僧兵の働

いたことがかなりに詳しく書いてあるので、何でもさういふ風に寺が榮えて勢力を  
持つやうになつたのは、後鳥羽天皇時代の解脱上人良慶の力であるといふことであつた。

こゝに登るのには、驛から橋をわたつて、そして阪にのほる。つまり汽車の中から指さされ  
るその山にのほつて行くのである。これはかなりに峻しい。板を立てたと言つても好いくらゐ  
である。それが十八町ある。

そこにはその福壽院の笠置寺がある。休茶屋がそこゝに赤い毛布の縁臺を出してゐたりす  
る。秋の午後などはいかにも明るい感じのする静かな場面である。

山上には巨岩大石がごろ／＼してゐる。ことに、此處で驚かれたのは、その大きな石に佛像  
が白描のまゝに彫まれてあることである。何でも笠置寺の榮えた時分には、この上に本堂が建  
てられてあつたといふことで、現にところどころに柱礎のあとが残つてゐるのを見ても、その  
規模のいかに大きかつたかといふことを知ることが出来る。何でも巨石に彫りつけた佛像は元  
弘以前には澤山にあつたさうだが、その時に焼けたり何かして、今で微かながらにその髣髴を  
認められるは、薬師、文殊、彌勒、虚空藏の四つである。石の高さは、薬師が四十尺幅三十一  
尺、文殊が二十二尺幅十二尺、虚空藏が四十二尺、幅三十一丈、彌勒が四十一尺幅三十尺であ

るが、この中で一番その線がはつきりとして、完全に保存されてゐると思はれるのは、彌勒石  
だけであつた。しかしその規模の雄大で、その線についても些の澁滞するところのないのは天  
平時代でなければ他に求められないやうな心持がせずにはゐられなかつた。

これから岩石の門をくゞるやうにして、高さ二十間餘の大門を過ぎ、東覗きといふ方へと出  
て行く。そこからは東の谷がはつきりと見わたされる。案内者は遙かに右に木津川に落ちてゐ  
る一小溪谷を指して、『あそこは飛鳥路といふ村ですが、あそここの村のものが、間道を教へたの  
で、それでこの笠置の山は落ちたのです。今でも、そこは別なものにされて、他村からも縁組  
はしないことになつてゐます。』など、指し示した。

これから少し行くと、太鼓石がある。その近くに後醍醐天皇皇居の蹟がある。天武天皇の笠  
置石もその附近にある。元弘の時にその上で貝を吹いたといふ貝吹石は、猶ほその下にある。  
で、再び寺のあるところへともどつて来る。それを下に下りずに、南に行くと、二十町ほどで  
柳生に出る。つまり月の瀬の梅溪に行く裏街道になつてゐるのである。こゝから月の瀬の桃香  
野まで四里には少し遠いくらゐる。

笠置驛から北に木津川をわたると、其南岸に笠置温泉がある。炭酸泉でわかし湯であるけれ

ども、胃腸や子宮病等に効があると言ふので、行つて浴するものが少しはある。それに、つれ込宿としても世離れたところである。鮎の時節などには澤山人のやつて來るところである。これから木津をすつと溯つて見ても面白いのだが、それは別に書くことにした。

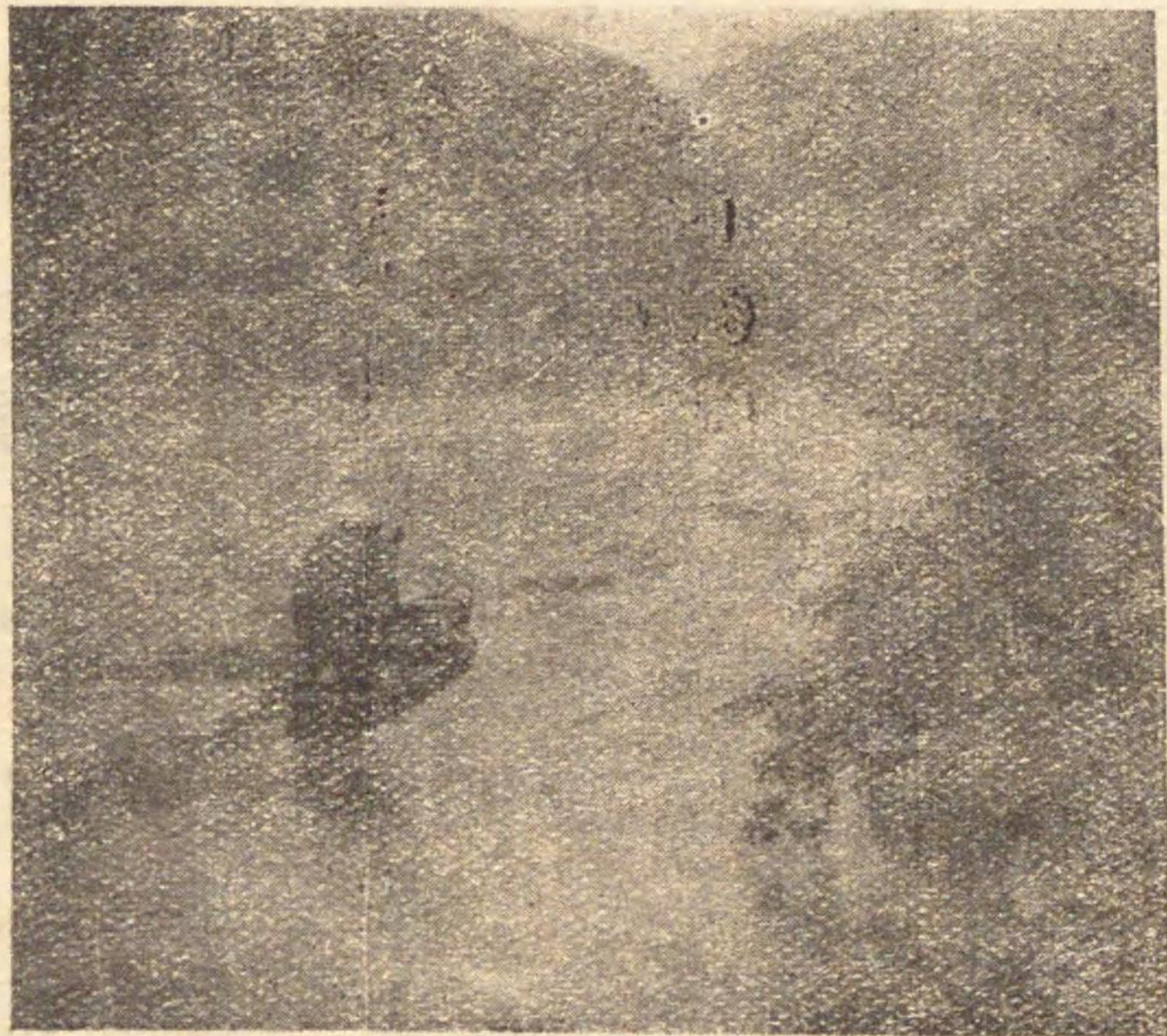
## 明神大瀧

木津川は大河原から笠置までの間に、見事な溪山を展開してゐる。これは汽車の中からも見えるけれども、一度はその河岸を歩いて見ることが必要である。一日の行樂としても、この河岸を歩いて、笠置に上つて見るのも、絶好の行程であると思ふ。

それには大河原驛で下りる。そして北大河原の部落のあるところまで行く。この間が五六町、そこで川をわたつて南岸に行く。細い細い路が岸を縫つてゐる。この間が十五六町、忽ち前に名張川の南から落下して來るのを目にした。

このあたりはあまり人に知られないけれども、頗る景色が好い。潭も見事であれば、岩石も秀麗である。ことに、名張川が全川傾斜をなして、高くはないが、一大ナイヤガラを成してゐるさまは、何とも言はれない。里人はこれを明神大瀧と言つてゐる。

ことに、そこには雄臺、雌臺といふ二つの巨岩があつて、水のそれに當つて激するさまは、宛然山水畫譜中の景である。



木 川

これで引返して今度は北大河原上ヶ崎から上流に溯つて見る。この間も中々好い。烏帽子岩、鯨岩、ガラス瀧などがある。

南大河原から川の南岸を下るのも亦頗る好い。それは廣谷の部落から折れ曲つた川筋——汽車の線路とは一山を隔てた溪間の路を通つて、辛うじて通つて、そして飛鳥路の方へと出て来るのであるが、この間の溪山も亦頗る目を刮せしめるに足りるものがある。ことに、増岩、かへる岩、松の下、このあたりは、中でもすぐれてゐて、思はず立留まらずにはゐられないやうなところが到るところにある。三郷の瀨、笠置炭酸水涌出所、布目川(關西水力電氣水源地)釜岩などを経て、橋をわたつて右市鑛泉の所へと出て来るのである。

## 月の瀨の梅溪

『君の作に「名張少女」といふ作があるね?』

S 君はかう言つて微笑を含んで私の顔を見た。

『あゝ、ある』

『あれは「椿の花」と同じ材料だね?』

『さう——』

『あゝ、いふことがあつたんだね?』

『まア、あつたとして置いてもいいね』

私は笑つた。

『「椿の花」の方が實説らしいね?』

『さうかね。それは説明のかぎりでないけれども……』

『あれは島ヶ原だね?』

『さうだ、よくわかつたね？』

『だつて、月の瀬の梅に行くことが書いてあるもの……。あそこには、いつでもあゝした女が澤山ゐるのだね？』

『いや——』私は笑つて、『いつでもゐるわけでもないだらう。何でも梅の時分になると、大阪や京都から梅見の客が大勢入り込んで来るので、それであゝいふ女をあちこちから驅り催して来るのだらう？』

『梅見の客にも、さういふ女を相手にする客が澤山にあるのかね？』

『それはあるんだらう——現に、「椿の花」の主人公なども引つかゝつてゐるからね？』

『さうだな』

S君は笑つた。

私の眼には、その島ヶ原のT屋といふ旅舎がはつきりと映つた。大和障子を明けて入ると、厨がすぐ向うに見えるやうな旅舎——。

『一度行つて見やうかね？』

『僕もさう思つてゐるんだ……。もう一度是非行つて見たいと思つてゐるんだ。その女は人

の細君にはなつてゐるだらうけれども、あそこに住んでゐるには違ひないからね。もし住んでゐなくつても、姉がゐる筈だからね？その名を知つてゐるからね。それを頼つて行けば、ぢきわかるよ』

『ぢや、まだ忘れられないわけだね』かう言つてS君は笑つた。

月の瀬の

梅もあれども

なつかしき

名張少女を

いつかまた見ん

かういふ歌をその時私は詠んだ。その女は名張町のものだつた。名をよねと言つた。十九だつた。

そのためではないが、私には月の瀬の梅溪が深く深く印象されて残つた。月の瀬を頭に浮べると、すぐその女がつゞいて思ひ出されて來た。

月の瀬には、その時は二度目であつた。前に四五年前に一度行き、あとに五六年後にもう一度行つた。

しかしさうした情痴は、此處に説く必要はない。此處では月の瀬の梅溪を説きさへすれば好いのである。

先づ一番近いのは、何と言つても島ヶ原驛である。汽車を下りて、町へ出て、左に木津川に添つて少し行くと橋がある。それをわたつて山の中に入つて行くのである。十町ほどかなりこのほりであるが、それをすぎると、全く路は平になる。松や雑木の林が多く、人家などは白樫の部落に行くまで一軒もない。峠のところは二百十米で、それから白樫までずつと下りになる。白樫に行つて、上野町からやつて来た路とひとつになる。こゝまで二里ある。

上野驛から来る路は、停車場から上野町まで、小さな軌道がある。町では公園だの、例の荒木又衛門の仇討の鍵屋の辻だの、芭蕉翁の誕生塚だの、見るものが澤山ある。暇があつたら、さういふものを見るのも好い。で、町の南の外れから、大和街道にわかれて、小田村で川をわたる。清水、高出、大野木などといふところを通る。半は丘陵で半は野と言つたやうな地形である。いかにもものんびりとした氣分である。少くとも島ヶ原から行く路に比してクラシツクな感

じがする路である。

で、上野驛から三里、上野の町外れから二里ぐらゐるで、白樫の部落に出る。さつき島ヶ原からもやつて来た村である。そこから二つの路が一緒になつて十町行くと、國境の標柱の立てられてあるところに出る。大和と伊賀の境である。それを通過すと、石打村になつた。

これから尾山まで猶ほ一里足らずあつた。尾山村の役場の前から新舊二道がわかるが、その手前からも入る路がある。舊道は山の峯のやうなところを行くやうになつてゐる。少し行くと、もうそこは月の瀬の梅溪で、向うに屏風のやうな山嶺に偏つて深く名張川の流れてゐるのを目にした。

溪谷としても、近畿地方には多くはないやうな大きな、立派な、美しい谷であつた。

眞福寺といふ寺がある。そこは散谷ほんふたにと言つたと覺えてゐる。一目萬本とも言つてゐる。そこからは、溪谷も、向うの山巒も、溪にかけられた橋も、何も彼もひと目に見わたされるやうになつてゐる。好い景色である。しかし、梅は櫻と違つて、爛熳とした眺めは求めることは出来なかつた。そこに一簇、かしこに一簇、白く残雪のやうにかたまつて見えてゐるばかりであつた。こゝから鹿飛谷、杉谷などいふところを通る。拙堂、星巖、山陽等の來て泊つたといふ



寺などもある。路は一曲毎に下へ下へと下りて行つた。

九十曲折

一をりごとに

かはりゆく

梅のけしきの

おもしろきかな

鶯谷まで下りて行くのに、尠くとも十一二町はあつたと覺えてゐる。やがてそこで、尾山村の役場から竹藪に添つて此方へと出て來た新道と合する。名張川はすぐその下を流れてゐる。

鶯谷の梅は頗る見事である。下から仰ぐと、碧空を地にした梅は、丸で星か何かのやうに見える。掛茶屋がそこにも此處にもある。茶の烟が裊々として梅花の上に靡いてゐるのも、たまらなく好い。惜しいのは、名張川に架つてゐる橋が殺風景な鐵橋であることである。山陽時代には、此處は舟わたしであつたことは、その詩や文でよくわかつた。

この橋は月の瀬橋と言つてゐる。長さ五十間ほどある。眺めがいかにも好い。それをわたり終ると、舟の出るところがある。これに由ると、上流にも下流にも行くことが出来るといふこ

とである。溪の水はいかにも美しく、沈々として流れてゐる。

これから少しのほる。一目萬本臺がある。それは今まで通つて來たところを反對に此方から眺めるといふ形になつてゐる。尾山の八谷に梅の白く咲き満ちてゐるのが手に取るやうにはつきりと見える。

それから猶ほのほる。二三町奥に旅舎が二三軒ある。私はかぢ屋といふのに泊つた。

こゝからもう一度川の畔に下りる。そして竹藪の多い岸を北に向つて行く。この間が五六町ある。川はそこで南から北へと大きく曲つて行つてゐる。暫し途絶えた梅がまた澤山に見え出して來る。川に臨んだ懸茶屋なども見え出して來る。

春なれど

まだ風寒き

月の瀬は

さえても梅の

香こそにほえれ

かういふ歌を私はそこで詠んだ。そこは月の瀬の最の奥である桃香野であつた。

これから柳生、笠置の方に出て行くには、路を西に取つて、一つの大きな峠を越す。それはいかにものんびりとした、大和でもなければ見られないやうな感じのするところであつた。で、邑地、下出などいふところを通つて、柳生に出る。こゝまで三里には遠いくらゐるである。柳生には重兵衛、柳生但馬守邸址などがある。こゝから笠置へ一里ある。

## 赤目四十八瀧

赤目四十八瀧は、伊賀では名高い山水であつた。今、そこに行つて見ることにした。

上野町から名張町までは五里には少し遠い。しかし、この間は大和街道で路が好いので、自動車でも馬車でも何でも通ずる。たしか、乗合自動車も一日に二三回ある筈である。

ちよつと億劫なので、旅客は容易にそつちまで入つて行かないけれども——汽車の線に遠くなるのを恐れるやうに、ちよつと入りかけて見れば、すぐまた出て行つて了ふけれども、こゝから、名張町から、赤目の山水を見て、大和に入つて、室生から長谷の方に出て行くのは、決してつまらない道程ではなかつた。それに、今では乗合自動車が開けた。室生寺まで入るのはさうは行かないけれども、そこに何うしても一夜は泊らなければならぬけれども、名張町からすぐに長谷に行くのなら、乗合自動車でも三時間もかゝれば、樂に向うに出て行くことが出来るのであつた。

名張の町を通り抜けて、新町橋をわたる。名張川はいかにも美しい流れを成してゐる。これ

から大和街道を眞直に行つて、安部田から入つて行つても好いか、それよりも、新町橋の手前から、川添ひに左に入つて、長屋、丈六などいふ部落を通つて、柏原から山の中へと入つて行く。瀧川の流が淙々として路の傍に流れ出して来る。

兩側から山が迫つて、溪が全くその中に窘蹙されて了つてゐるやうに見える。嵐氣が染めるやうに人の衣を襲つた。やがて長阪に着く。

こゝまで名張町から三里、そこに延壽院といふ寺がある。これまでは樂に人車が通ることが出来た。

こゝに參詣して、そこからいよいよ溪にかゝる。二町で、一番先に行者瀧がある。ちよつとした瀑である。つまりこの瀧川の溪流は、兩山にせばめられて、到るところ無数の瀑となつて崖に觸れたり、岩に當つたり、瀨を成したりして亂れて落ちてゐるのであつた。

つゞいて不動の瀑があらはれた。これはいかにも大きな瀑であつた。丁度日光の方等の瀑に似てゐた。それから、布引、荷擔、琵琶などいふ瀧が一つ一つあらはれ出した。布引の瀧は、細いけれども、高さは百二十尺もあつた。いかにも趣致に富んでゐた。瀧壺あたりも、夏など行つて遊ぶのに、至極好いところであつた。

四十八といふけれども、細かく數へたらもつと瀨やら潭やらがあつたかも知れなかつた。規模から言へば、さう大して大きいといふことは無論出来ない。また日光のやうに山の深い感じは味ふことは出来ない。それに、一條の溪流の落下するにつれて瀑を成してゐるのに、一々名をつけたのであるから、瀑といふ感じもさう大して濃厚ではないけれども、しかしめづらしい溪潭、溪瀨であるといふことは争はれなかつた。たとへて見れば、日光の龍頭瀑のもつと長いのが、もつと兩方が迫つて溪を窘蹙してゐるのが、ずつと長くつゞいてゐるやうなものであつた。そして旅客は、その溪に添つて、仔細にその瀑を一つ一つ見て行くことが出来た。

夏も好いけれども、矢張、秋の紅葉の頃が、一番すぐれてゐるといふことであつた。そして溪の盡きたところに、寺があるが、その感じもまた決してわるくはなかつた。その山は役行者が開いたのであるか、何でもその時分不動明王が赤目の牛に乗つて出て來たため、そのためその名を得るやうになつたのであるといふことであつた。

## 筆捨山

鈴鹿は、東海道の中でも、箱根に對して、昔は名高い峠道であつた。輿夫や、旅客や、早飛脚や、大名の行列などが常にあとを絶たなかつた。

『何うだ、行つて見ないか？』  
かうの君が誘つた。

『さうだな、行つて見るかな……。』私は考へて『向うまで越して見やうといふのかね？』

『さア、君が越さうといふなら越しても好いがね？ ぐるりと廻つて、拓植つちの方に出て汽車で歸つて來ても好いけれどもね？ 大變には大變だね？』

『さうだね、越すんぢや大變だね。關から水口まで六七里は何うしてもあるね？』

『ぢや、それは別として、筆捨山まででも好いから、行つて見やうぢやないか？』  
『さうだね』

で、私達は出かけた。

阪は照る照る

鈴鹿はくもる

あひの土山

雨が降る……

これを本調子で三味線に合せて唄うのだから、それが何とも言へない情調を私の心に染み込ませた。私の眼の前には、鈴鹿の昔がはつきりと映つて見えるやうな氣がした。

私達はその昔の幻影にあくがれて、關の停車場で下車した。

やがて長い、いかにも昔の驛次らしい町が私の眼の前にあつた。私達は靜かに歩いた。目に立つて衰へてゐる形も私達の心を惹いた。

私達は一番に名高い關の地藏堂へ行つた。これが名高い堂かと思つた。いかにもあたりが荒れきつてゐた。荒廢しすぎてゐた。

『昔は賑やかだつたらうね？』

『さうだね』

こんなことを言ひながら、その堂の前に行つて、私達は鰐口を鳴した。關の小萬のことなど

を私達は思ひ出してゐた。

こゝを出外れると、もう人家はなくなつて、前にはひろい野と蒼い空を地にした山巒とがはつきりと美しくひろげられて見えた。昔の並木の名残を示してゐる松が一本大きく向うに立つてゐた。

『いかにも東海道らしい感じがするぢやないか？』

『本當だね？』

『こゝらを皆な昔の人達は通つて行つたんだね。』

『なつかしいやうな氣がするね』

『何しろ、あの山なんか、皆なそれを見てゐたんだ。輿に乗つたり槍を立てたりして行く人達のさまを。それなのに、それなのに——』

『本當に悠久な感じがするね。さういふ人達はもうとうの昔にゐなくなつて了つてゐるんだからね。すつかり時世が變つて了つて行つてゐるんだもの……』

『本當だとも……』

『山なんかそれから思ふと悠々としてゐるね。あのツルゲネフの散文詩にある通りだね』

『本當だ』

こんなセンチメンタルな心持に捉えられつゝ私達は歩いた。山はいかにも靜かであつた。かういふ風にいつも靜かであるのであらうか。今日だけかう靜かなのではないかと思はれるぐるゐるそれほど靜かであつた。やがて折れ曲つて流れてゐる鈴鹿川があらはれ出して來た。

それは瀬も淵もなしに、唯、靜かに緩かに折れ曲つて流れてゐると言つたやうな川であつた。路についたと思ふと離れ、離れたと思ふとまたついて來た。『おもしろい、風情のある川だね？』こんなことを私達は言つた。

やがて市の瀬といふ村落が出て來た。冬は雪が積ると見えて、庇なども長く、構へ方も山國風で、屋根の上には石などが置いてあつた。いづれの家も、半以上戸を閉めてゐた。

『此處等は昔は賑かだつたんだらうがね？』

『本當だね……。丸で火が消えたやうになつて了つたね？』

『あの碓氷の下の坂本もこんな風だつたね？』

『さつだつたね』

このさびしい山村を通り越して行くと、十二三町で、川は大きく曲つて行つてゐる。そして

その角のところ、ちよつとめづらしい岩石が峨々として聳えてゐる。水は潺潺として音を立て、流れてゐる。

行き違つた人に、

『筆捨山は？』

かう私は訊いて見た。

『それでさー』

その人はかう言つたまゝ、そのまゝさつさと下りて行つて了つた。

それは存外つまらぬ山であつた。こんなところで筆を捨てたといふのは、あまりに好くてではなくて、晝にならないので捨てたのではないかと思はれた。恰度耶馬溪の柿坂にある山陽擲筆松といふところによく似てゐた。

『でも、これでも、昔の人には、めづらしい岩や溪流に見えたんだよ。さうだよ、きつと……』

『でもね』

こんなことを言つて、私は暫しそこに立盡した。

暫くしてから、

何う『する？』

『もう少し行くかね？せめて坂下あたりまで——』

『もう歸らう。どこまで行つたつて同じことだらう？』  
で、私達は引返した。

## 龜山から大廟

龜山驛では龜山公園に行つて見ても好かつた。汽車はこゝからわかれて、宇治山田へと行つてゐる。伊勢へ參詣するものは、汽車が鳥羽行、宇治山田行でない限り、此處で乗替なければならなかつた。

下の庄驛からは、豊久野の錢かけ松が近かつた。こゝらあたりは、丘陵の中のやうなところで、春は山躑躅などがところどころに咲いて感じが好かつた。錫杖ヶ岳の突兀とした山巒も汽車の窓からはつきりと指さされる。

この丘陵の中を海岸平野に出切つたところは一身田驛で、そこに大きな寺觀のあるのを誰も見落すものはないだらう。言ふまでもなく、それは眞宗高田派の大本山である専修寺である。ちよつと下りて參詣しても決して徒勞ではない。門前町もちよつと賑やかである。遊廓などもある。

津驛では、津公園、安濃浦、阿漕などが、下りて見れば見るところであつた。岩田川の河口にある鰐崎も、伊勢灣を眺望する地點としては、かなりにすぐれたところである。津市の中心繁華地である觀音堂の賑はひも多少特色がないでもなかつた。阿漕の海水浴旅舎に一夜靜かに泊つて見るのもわるくはなかつた。

結城宗廣を祀つた別格官幣社結城神社もこの近くにあつた。

香良洲浦の海水浴へは、高茶屋驛で下車した。わづかに三十町ぐらゐしか隔つてゐなかつた。青松白砂、伊勢灣では、海水浴場としては、此處が一番好いといはれてゐる。

松坂は汽車で見て通つただけでも、好いところであるといふことがよくわかつた。また富豪の多い町であるといふこともわかつた。こゝには、公園が城跡にあるが、その下のところに本居宣長を祀つた本居神社がある。また翁の住んでゐた家も魚町に残つてゐて、すべて當時のままであるといふことである。下車してたづねて見るのも好い。

細かくたづねて見れば、この他にも、まだおもしろいところがある。澤山にあるであらうけれど——現に、北畠氏の多氣御所の址などこのあたりでは是非探つて見なければならぬところであるけれども、汽車から遠く離れてゐるので、容易に入つて行くことは出来なかつた。とても伊勢參りの次手ではむづかしい。

それに、この伊勢の海岸平野は、汽車で見ても、平凡で、單調で、あきあきするやうなところであつた。唯、伊賀の境に聳えてゐる布引山脈の翠色と、相可驛から田丸驛に至る間の疎らな赤松林とが、纔かにその單調を破るばかりであつた。しかし、それも暫しの間で、宮川近く行くと、あたりの風景は全く一變した。大廟近い感じが犇々と身に迫つて來た。

## 伊勢大廟

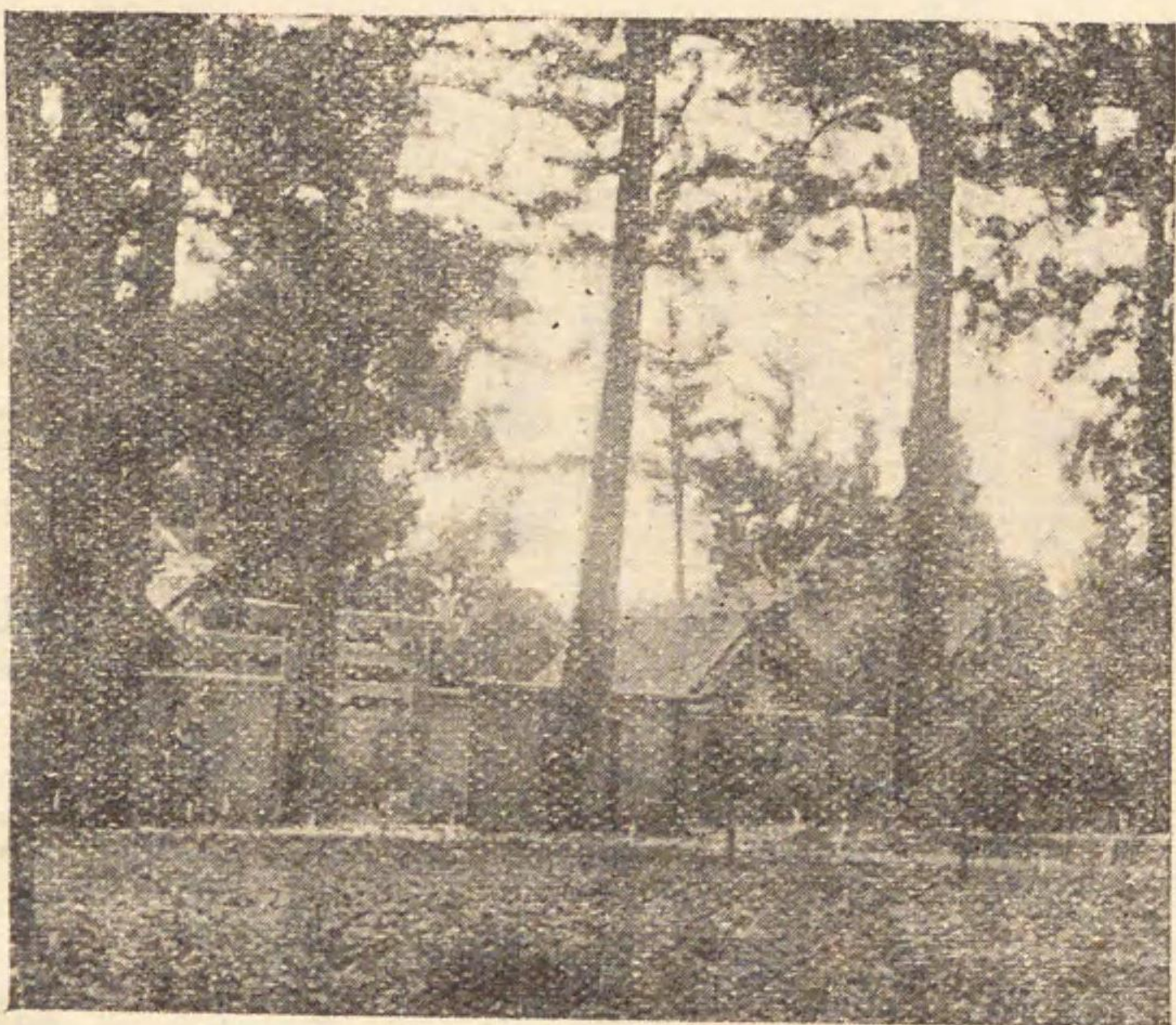
そこに行つて見ると、成ほど古い國だといふ氣がした。山の連つてゐる具合といひ、川の流れてゐるさまといひ、流石に伊勢大廟のあるところだといふ氣がした、宮川橋をわたつて宇治山田市に入つて行く心持では、何とも言はれない静けさと清ささと尊たささを感じた。

で、宇治山田驛に着く。そこは流石に大きな停車場である。やがて改札口を出ると、砂利の敷かれた綺麗な廣場があつて、いかにも伊勢らしい大きな旅舎が、そのまゝ、兩側に庇を並べてゐるのを目にした。宿引の番頭が頻りに客を留めてゐるのを見た。

少し行つたところには、内宮の方に行く電車が、明るい感じのする新しいペンキ塗の車臺を二臺も、三臺もそこに連ねて待つてゐた。

これに乗れば、内宮の方へ、または二見の方へすぐ行くことが出來たけれども、しかしそれより先きに旅客は先づ外宮に參拜することが必要であつた。で、その前を通り過して、眞直に北へと向つて行つた。





外宮正殿側面

外宮の正面の入口が、そこからいくらかもなかつた。

參詣者はそこから先は烟草を喫つてはならなかつた。砂利を敷いた路は、橋をわたつたり、監守の見張つてゐるところを通つたり、大きな杉の樹の下蔭を通つたりして、次第に奥へとかなり曲つて入つて行く。いかにも大廟らしい神々しい感じがあたりには漲つてゐる。たしか華表もあつたと覺えてゐる。二三町ほどで、例の太古そのまゝの廟屋が見え出して来る。參詣者は、そこでは、その前の手洗水で手を洗ひ、漱いで、更に外套やトンドビを取り、帽子を脱して、そして正面の神前へと進むのである。あくまで謹まなければならぬ。

で、そこから引返して、もとの入口の方へと戻つて来る。そこからは、電車で内宮まで行つても好いのであるけれども——その方が、便利なだけけれども、昔の宇治山田の町を餘所に見捨て、行くのは惜しい氣がするので、大抵はそこを歩いて見るのが例のやうになつてゐる。車で行くのも、のんきで好い。

それは細い狭い通りであつた。しかしさうした通りも昔、伊勢參りの旅客が陸續として通つて行つたところだと思ふと、何となしなつかしく感じられた。路はひとり手に曲つて、段々奥深く先へ先へと行つてゐた。曾ては、荒廢し切つて、大廟のある町がこんなでは外國人などに對しても見つともないといふやうな氣がしたこともあつたが、今では割合に綺麗になつて、そのため昔の感じとか匂ひとか言ふものは薄くなつたけれども、いかにも小さつぱりとした家並のつゞいてゐるのを誰も目にした。例の昔のまゝの遊女屋などところどころに残つてはゐるけれども、別にわるく目に立たないほどそれほど靜かに小綺麗になつてゐた。阪を上つて少し行つたところに、有名な油屋といふ旅舎があつた。

しかしこの通りはかなり長かつた。少くとも五十町ぐらゐはあつたに相違なかつた。例のお杉お玉の間の山は、丁度その中ほどにあつたが、今では小さな活動小屋があるぐらゐなもの

で、昔のあとを見るべくもなかつた。やがて坂を上つて、段々奥へ奥へと行つた。朝熊の萬金丹の招牌を出してゐる家が二軒も三軒もあつた。ある富豪が自分で小さな公園らしいものをつくつて、そこにいろいろなものを奉納してゐるやうなところもあつた。やがてひろくとしたところへと出て行つた。そこからは内宮のある山や、五十鈴川の流れてゐる谷がはつきりと指さされて見えた。いかにも心持が好かつた。成ほど大廟の鎮座するのには最も適してゐるといふやうな感じがした。つゞいて大きな急の坂がやつて來た。車は三分の二ほど下つてから、一氣にそれを走り下りた。

こゝから宇治橋の畔まで、また賑かな町が續いた。電車はすぐその裏を通つて行つてゐる。飲食店、小料理屋、萬金丹、土産物を賣る店が絶えずつゞいて、混雑した空氣が到るところに渦を巻いてゐた。やがてそれも盡きて、前には宇治橋があらはれた。

こゝでは誰でも乗物を下りなければならなかつた。いかにも神々しい感じがした。橋の上も綺麗に掃除が行きとゞいてゐて、泥靴などで歩いてはすまないやうな氣がした。山から神苑にかけての感じは何とも言はれなかつた。

參詣者は砂利を踏んで、靜かに歩いて行く。監督がまたそこにある。少し行くと杉の綠葉が

鮮かな色を見せて、右に、五十鈴川の綺麗な水の流れてゐるところへ達した。そこで皆な下り立つて手を洗つたり口を漱いだりした。

『好いね……何つていふ綺麗な水でせう？』

『これが五十鈴川ね？ 好い川ね？ 本當に好い御手洗みたらしだわねえ』

こんなことを誰も彼も言つた。

水は潺々として日影をチラチラさせながら美しく流れてゐた。

こゝから爪先上りに、大きな杉の下道を通つて行つた。左に社務所だの、お札を受けるところだのがあつた。いかにもあたりが靜かであつた。心持も好い氣持だつた。『何うだ、この杉の大きいこと……それに、葉の緑の色が綺麗ぢやないか？ とても他では見られない！』こんなことを言ふのにすら、小聲で言はなければならぬやうな氣がした。

二町ほどで、お宮のあるところへと達した。

此處も外宮と同じであつた。誰も皆なそこに行つて正面に跪拜した。

『二十五年目！ さうですか。二十五年目に改築になるんですか！ そしてその形は其のまゝなんです。そのとほりそのまゝなんです。』



伊勢内宮

少し此方に来て、こんなことを夫らしい紳士に  
言つてゐる若い細君などもあつた。日本國民とし  
て誰も一度は此處にお詣りしなければならぬ—  
—その願望をやつて遂げたといふやうにして、  
満足した顔色をしてそして歩いて行つた。

『何うしても、お宮では、お伊勢様ですな……』  
年を取つた女は、さも感心したやうにして言つ  
た。で、皆な宇治橋の方へと出て來た。二見の方  
へ行くのには、それから五六町もこの通りを戻ら  
なければならなかつた。そこには、そつちへ行く  
電車の停留場があつた。

そこで電車の來るのを待つてゐる間、私は傍に  
ゐる大阪者らしい三人づれの一人の男に訊いた。  
『あなた方、今朝、大阪からお出でになつたんで

すか？』

『さうです』

『早いですな……。それぢや、大阪から日歸りが出來ますな？』

『出來ますにも……。朝、一番で湊町を出れば十一時には着きますでな、五時間はあそべます  
な……。四時の汽車で歸れば、十時すぎには大阪へかへれますでな……。』

『ふむ、さうですか？ 便利になりましたな！』

私がかう言はずにゐられなかつた。そこに二見行きの電車は來た。

# 朝熊山

朝熊あまぐまにのほるのには、内宮の傍からのほるのが一番樂だ。私も一度そこから登つた。

初めの間は少しのほる。さうさ、十町ぐらゐはかなりののほりと言つて好いであらう。やがて右に谷を見るやうになる。私の通つた時は、春で、山の峽がらにも山櫻が咲いてゐて、鶯が頻りに好い聲を立てゝゐた。

こえて行く

人もあらぬを

うぐひすは

日ねもす長く

たれを呼ぶらし

こんな歌を手帳を書きつけながら私は歩いた。

それは丁度峯の背のやうなところを通つて行くやうになつてゐた。左には、野や水田を隔て

て遙かに海の光るのが、時々蜃氣樓のやうになつて見えた。楠部峠あたりの眺めはことに見事であつた。

殆ど平らと言つても好いぐらゐの山路ではあつたが、しかしその里程はかなり長かつた。

神苑内からたうふやのところまで六十二三町は優にあつたやうに思はれた。

たうふやといふ旅舎は、二見からのほつて来る峠の上のところかみやしろに位置してゐたが、そこはいかにも眺望に富んでゐて、二見の浦をはじめ、神社おほみなと大湊の方が一目にパノラマのやうに見えた。

## 九十曲折

けはしき路も

なくさみぬ

をりノ見ゆる

海のけしきに

これは楠部峠で詠んだものだが、このをりノ見ゆる海の大觀を盡したのが、そのたうふやの位置であつた。旅客はそこで皆な晝飯を食ふのを例にしてゐた。